

天理大学アメリカス学会 学会誌

アメリカス研究



Journal of the Americas Studies
Revista de Estudios de las Américas
Revista de Estudos das Américas

第28号 (2023年11月29日公開)

<特集：アメリカス地域の文化と言語の学びと継承（天理大学アメリカス学会 第27回年次大会シンポジウム）>

シンポジウム「アメリカス地域の文化と言語の学びと継承」を終えて

Relembrando o Simpósio: Aprendizado e Transmissão da Cultura e Língua das Américas

----野中モニカ (NONAKA, Monica)

日本の大学生の4年間の英語学習モチベーションの変化

Motivational Change in Japanese University Students Over Four Time

----小林千穂 (KOBAYASHI, Chiho)

米国ハワイ州の外国語教育“World Languages”プログラムから —外国語教師の関心の所在—

From "World Languages" Program in Hawaii's Foreign Language Education: Foreign Language Teachers' Interests

----山本享史 (YAMAMOTO, Takashi)

スペイン語を取り入れた漫才ワークショップ —オンラインと対面学修の比較—

Taller de comedia japonesa con incorporación de español: Comparación del aprendizaje online y presencial

----橋本和美 (HASHIMOTO, Kazumi)

母語継承の難しさ —在日外国人集住地域を事例に—

Difficulty in Language Inheritance: A Case Study of a Brazilian Community in Japan

----大川ヘナン (OKAWA, Gennan)

日本語・スペイン語の複数人会話における話者交替と発話の重なり —聞き手の反応を中心に—

El análisis de la conversación: Toma de turnos de palabra y solapamientos en la conversación en grupo multipersonal de japonés y español

----市川禎理 (ICHIKAWA, Yoshimichi)

<論文>

「現集団」の動態と「コミュニティの品質」の考察 —『ヨシテ文献 (ミカサフミ)』のタカマナルアヤと「コミュニティの品質」、そこから「社会政策の基本」と「移民の病理」を読み解く—

A Bird's-Eye View of Community and Jetzt-gruppe

----森田成男 (MORITA, Shigeo)

シンポジウム「アメリカス地域の文化と言語の学びと継承」を終えて

本特集は、2022年12月3日（土）に対面及びZOOM配信というハイブリッド形式で開催された天理大学アメリカス学会第27回年次大会で行われた公開シンポジウム「アメリカス地域の文化と言語の学びと継承」で講演・報告いただいた6人の方に、お寄せいただいた論考である。

アメリカス地域では、ネイティブ固有の言語文化の重要性は認識されつつも、今や移民がもたらした言語文化が各国の基礎的な言語資源、文化資源となっている。さらに現在のグローバル化時代においては、人の移動の増加に伴い、言語教育でも学習者の背景が多様化し、母語を共有していないことも多くなっている。言語と文化の学習や継承も多様化そして複合化している中、シンポジウムでは、継承する「言語」や「文化」、戦略的に学習する「言語」や「文化」など多様な観点から検討し、同時に、グローバル化した世界に生きる我々の「言語文化」や「学習」「継承」について再考した。

シンポジウムの構成は、第一部の基調講演、第二部のパネル発表、第三部のパネルディスカッションである。

第一部の基調講演では、マヤ語・マヤ文化研究の第一人者である東北大学の吉田栄人先生（東北大学大学院国際文化研究科）に、「植民地時代カトリック宣教師のマヤ語文法と現代のマヤ語研究をつなぐ」の題でご講演いただいた。

第二部のパネル発表では、5人の研究者にご登壇いただいた。

大川ヘナン氏（大阪大学大学院人間科学研究科）は、「言語・文化継承は選択可能なのか？在日外国人集住地域を事例に」の題で、ブラジル人保護者が母語・母文化を重要視しつつも、日本ではその言語と文化継承が有利に働かない実態というジレンマを抱えていることに触れ、言語・文化継承は誰のためなのかを議論した。

市川禎理先生（関西外国語大学非常勤講師）は、「複数人会話における話者交替と発話の重なりに関する日西対照分析」の題で、自然会話を分析することで得られた知見の言語教育での活用を目的に母語話者による自然会話を分析し、自然会話における発話権の取得・維持の方法をはじめ、会話への参加の仕方の相違を明らかにした。

橋本和美先生（天理大学准教授）は、「スペイン語を取り入れた漫才ワークショップ —オンラインと対面授業の比較—」の題で、多様性が叫ばれる現代社会において、大学生に求められている力とは何かを確認し、コミュニケーション力を高め、学修者間の絆を深める漫才ワークショップの有効性や今後の課題について考察した。

山本享史先生（天理大学准教授）は、「米国ハワイ州の外国語教育 —“World Languages”プログラムから—」の題で、多様な民族構成及び多言語状況が見られ、言語教育も特徴的であるハワイの外国語学習を紹介したが、現地ハワイ語よりスペイン語の学習を選択する生徒の多さなど、外国語教師の認識面だけではなく、学習者の言語学習モチベーションも垣間見えた。

小林千穂先生（天理大学教授）は、「日本の大学生の4年間の英語学習モチベーションの変化」の題で、入学時の学生が、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持っており、半年後も高いモチベーションを維持していることから、モチベーションの維持に貢献する要因について考察した。

第三部のパネルディスカッションでは、短時間ながらもパネリストとフロアから示唆的な意見がでたのを以下にまとめた。(敬称略)

大川：日本人とブラジル人の共生について、例えばブラジル人住民が多い保見団地では、日本人は高齢化しているが、ブラジル人は若い人が多く、他の団地のように分断が起きている。「日本人の知り合いはいますか」という質問には、「団地の外にはいる」という答えがよく返ってきたため、団地内で共生は課題として残っている。

山本：ハワイのヒスパニック人口のデータはないが、民族構成としてはそう多くはない。しかし、学習言語としてスペイン語を選択する生徒は多い。大学進学率では、アメリカ本土に行くケースも多くため、外国語の単位習得で大学に行くことを考えると、ハワイ語を選択するよりスペイン語を選択していると考えられる。

吉田：「継承語」ということばは奇妙に思える。誰かが継承させたいから「継承」、「継承語」ということばを使うが、本人である子どもや二世の子がどのことばを使うのかは本来自由である。例えば日系人が日本語を学びたいのであれば、日本語を「学習」すればいいわけで、「継承」する必要はない。メキシコでは先住民言語の復興運動が行なわれており、スペイン語教育を受けて育ってきた先住民のインテリを中心に70、80年代から文化継承が盛んに言われるようになった。自分たちの民族文化が失われつつある中で、世界の文化遺産であるから取り戻さないといけないというような、外国から降ってきたイデオロギーをもとに、自分たちの運動を展開している。

継承を考える際、教育者と学習者は分けて考えた方がいいのではないか。モチベーションの観点では、モチベーションを作り出すのは教育者であり、学習者の立場では、生存戦略であり、必要であれば学習する。アイデンティティの問題ではなく、自分の生活をよくするため、自分の社会的地位を高めるためのものである。ニーズがどこにあるのか、きちんと見極めないといけない。

山田：今回のシンポジウムの目指すところは文化と言語の学びと継承であるが、権威あるいは社会的圧力がキーワードとなっている。吉田先生の話では、カトリック神父たちの書いたものが社会的権威となり、信頼され絶対的であるということで、文化が作り出され、言語形成がなされていった。大川さんの発表は誰が言語文化を継承するのか、誰の圧力によって子どもたちは言語を継承しなければならないのか、が導き出される。西川さんの発表は会話の主導権という観点で、その場その場での社会的圧力によって話題の主導権に関わってくることを感じた。逆に、橋本先生の発表は社会的権威や圧力を感じない素地を作るのが大事であり、そういうものの中で言語教育がなされていると感じた。山本先生の発表では複言語、マルチリンガル、マルチタスクが素晴らしい、そういうものを目指しましょう、という見えない圧力がかかっていると感じた。

初谷：日本語とスペイン語の対象言語学という分野は、実際の言語教育、例えばスペイン語圏の学生に日本語を教える現場においてどのように役立つかが明示してほしい。

市川：中級上級の学習では、言語自体の学習に加え、その背景にある文化理解が重要となってくる。学習言語の背景にある文化の理解が追いついていないと、言語の応対の中で誤解され関係がこじれることもあり、コミュニケーションに影響が出てくる。コミュニケーションスタイルの違いを実際の例を提示して比較するなど、文化理解を深める指導が必要だと思う。

小林：言語を学ぶのはメリットだけの問題ではなく、好きだから、その言語圏に対する憧れ、

文化に興味がある、などそういうところも言語学習のモチベーションになっていると思う。

吉田：モチベーションという言葉で全てを説明するのは難しい。教育者は学生たちに勉強させ、モチベーションを持たせるようにするが、学習者の立場から考えた時にそれって一体何だろう？ということになる。例えば、ことばが一番うまくなる近道はそのことばを話す恋人もつことである。そのニーズを持つと必ず勉強をしないといけないから。それがある意味でモチベーションであり、メリットである。モチベーションというよりも具体的なニーズを学習者が持つことが一番のモチベーションだと思う。学生たちが大学に入った時に持っていたモチベーションを維持できるかどうかは、自分がどういったニーズを見いだしていけるかにかかっている。例えば通訳者になりたいと思ったら、それに向けた勉強の仕方があるはずで、それを大学が提供をしてくれなかったら、どんどん失望してモチベーションがなくなる。具体的な目標を見つけて、そのためにどういった勉強をすればいいのかわかる、そして、それが提供できるかどうかは大学の教育者には大事である。

モデレーター

野中モニカ（天理大学）

日本の大学生の4年間の英語学習モチベーションの変化

小林 千穂（天理大学）

1. はじめに

モチベーションとは、学習の理由や目的、意欲・努力の大きさ、努力の持続という3つの要素に関わる概念であるが（Dörnyei & Ushioda, 2021）、3つめの要素、つまり「どれぐらいそれをやり続けるか」という問いは、言語学習モチベーションの分野ではあまり関心を集めてこなかった。しかし、言語学習の成功には学習者の長期的な努力が不可欠であるため、この3つめの要素についての検討が求められる。また、近年の言語学習モチベーションの分野で注目されている社会的・動的アプローチでは、学習者のモチベーションは一定ではなく、環境と相関的に反応し合いながら変動する「複雑で動的なシステム」（菊池, 2015, p. 23）であることが示されている。そこで、本研究では、2022年4月にある私立大学の英米語専攻に入学した44名の学生を4年間追跡し、彼らの英語学習に対するモチベーションや態度の推移を調査する。本研究は2026年の3月まで継続する予定であるが、本発表ではデータの収集・分析が終了している入学時と春学期終了時に実施した調査の結果を報告する。

2. 研究の目的

本研究では、学生の英語学習モチベーションや態度の4年間における変化とその理由をL2動機づけ自己システム論（L2 Motivational Self System）（Dörnyei, 2005）の枠組みに基づいて探る。本研究の具体的な研究課題は、①日本の大学生の英語学習に対するモチベーションや態度は4年間でどのように変化するのか、②日本の大学生のモチベーションや態度に変化をもたらす要因は何か、③日本の大学生のモチベーションや態度は彼らの英語力とどのように関係しているのかの3つである。

3. 調査方法

上記の通り、調査協力者は、2022年4月にある私立大学の英米語専攻に入学した44名の学生である。44名中男子学生が19名、女子学生が25名だった。入学前に1週間以上海外に滞在した経験があったのは6名のみだった。この44名の学生は、入学時にACE Placement Testを受け、その点数に基づきA, B, Cの3クラスに分けられた。全体の平均値は、300点中179.64（ $SD=40.45$ ）点で、各クラスの平均値は、Aクラスが225.47点（ $SD=21.23$ ）、Bクラスが175.53点（ $SD=10.95$ ）、Cクラスが134.93点（ $SD=18.08$ ）だった。

先行研究(Taguchi et al., 2009; Yashima, 2009)で使用された質問紙を基に、新たな質問紙を作成した。この質問紙は2つの部分から構成される。パート1は、英語学習への態度やモチベーションに関連する17の因子に分類される70項目を含み、それぞれの項目がどれくらい当て

はまるかを6段階の評価尺度を用いて評価することが求められる。この17の因子には、動機づけ、理想自己、義務的自己、家族の影響、道具的一接近、道具的一回避、言語学習に対する自信、英語学習に対する態度、海外旅行への志向性、英語に対する興味、英語使用への不安、統合的志向、文化に対する興味、目標言語のコミュニティーに対する態度、留学に対する態度、異文化間接近一回避傾向、海外の出来への関心が含まれる(付録1)。これに対し、パート2は、渡航経験、留学経験など、学習者の背景情報などを問う項目を含む。

質問紙を基に、インタビューガイドを作成した。このインタビューガイドは、英語を専攻することに決めた理由について問う1項目、自分の英語能力についての認識を問う1項目、英語学習に対するモチベーションや態度に関連する17の因子について問う17項目、入学後の授業での英語学習経験について問う1項目、入学後の授業外での英語使用について問う1項目、将来の目標について問う1項目、入学前の英語学習経験について問う1項目、大学生生活一般などについて問う1項目の24項目を含む。

調査協力者全員に、入学時と卒業までの各学期末に前述の質問紙を授業時に配布し、記入させる。記入に要する時間は10分程度である。また、44名の調査協力者の中から、性別や英語力を考慮して、約15名の調査協力者を選出する。この約15名の調査協力者を対象に、前述のインタビューガイドを使用して、40-50分程度の半構造化インタビューを課外で実施し、質問紙の解答のより詳細な理解を試みる。また、入学時には全員がAce Placement Testを受け、各学年の年度末に、全員がTOEICテストを受ける予定である。

上記の通り、本発表では、現時点でデータの収集・分析が終了している入学時と春学期終了時に実施した調査の結果を報告する。

4. 調査結果

4.1 英語学習に対するモチベーションと態度

データに欠損があったため、5名の調査協力者は除外し、残りの38名のデータを分析した。表1は、調査協力者の質問紙の回答の記述統計量をまとめたものである。入学時は、義務的自己、家族の影響、英語使用への不安、海外の出来事への関心を除くすべての因子の平均値が4以上だった。このことから、調査協力者が、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って入学してきたことが分かる。また、道具的一接近の平均値は高く、調査協力者が将来英語力を活かせる職業に就きたいと強く思っていることが伺える。

春学期終了後は、海外旅行への志向性、英語使用への不安を除くすべての因子の平均値が上昇した。中でも、理想自己、道具的一接近、英語学習に対する態度、英語に対する興味、総合的志向、文化に対する興味、目標言語のコミュニティーに対する態度、留学に対する態度、異文化間接近一回避傾向、海外の出来事への関心の平均値は、0.1ポイント以上上昇した。これは、1学期終了後、調査協力者の英語を使う自己がより明確化し、英語力を必要とする職業に就きたいという気持ちがより強くなり、英語学習に対する態度もより好意的になったことを示している。また、調査協力者の英語、英語圏の文化、コミュニティーに対する態度がより好意的になり、もともと強かった、留学をしたいという欲求がより強くなったことを示している。

調査協力者の英語学習に対するモチベーションや態度の変化量が有意であるかを検証するために、17因子のそれぞれについて、対応のあるt検定を行った。表2は、このt検定の結果をまとめている。t検定の結果、理想自己、道具的一接近、英語学習に対する態度、英語に対す

る興味、統合的志向、目標言語のコミュニティーに対する態度、留学に対する態度の7つの因子において有意差が確認された。また、文化に対する興味、異文化間接近一回避傾向の p 値は有意水準に近づいた（それぞれ、 $p = .052$, $p = .062$ ）。この結果は、調査協力者が入学後、英語学習に対するモチベーションや態度に関連する様々な面を向上させたことを示しており、記述統計の結果を裏付けている。

表1：英語学習に対するモチベーションと態度に関連する17因子の記述統計量

因子名	入学時		春学期終了後		増減	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
動機づけ	4.14	0.85	4.18	0.85	0.05	0.58
理想自己	4.16	0.99	4.28	0.96	0.12	0.36
義務的自己	2.97	1.01	3.04	1.12	0.07	0.40
家族の影響	2.80	1.19	2.89	1.17	0.09	0.40
道具的—接近	5.31	0.65	5.43	0.58	0.12	0.27
道具的—回避	4.63	0.85	4.65	0.88	0.03	0.40
言語学習に対する自信	4.52	0.67	4.59	0.71	0.07	0.30
英語学習に対する態度	4.49	0.94	4.80	0.81	0.30	0.47
海外旅行への志向性	4.96	0.87	4.95	0.83	-0.01	0.43
英語に対する興味	4.53	0.88	4.68	0.90	0.16	0.37
英語使用への不安	3.89	1.03	3.89	1.04	0	0.43
統合的志向	4.89	0.84	5.08	0.70	0.18	0.39
文化に対する興味	4.59	0.94	4	0.91	0.13	0.38
目標言語のコミュニティーに対する態度	4.87	0.91	5.03	0.93	0.16	0.36
留学に対する態度	4.83	1.29	4.99	1.20	0.16	0.44
異文化間接近一回避傾向	4.44	0.86	4.56	0.88	0.12	0.39
海外の出来事への関心	3.67	0.84	3.80	0.94	0.13	0.64

表2：英語学習に対するモチベーションと態度に関連する17因子の対応のある t 検定の結果

因子名	<i>t</i>	<i>df</i>	<i>p</i>
動機づけ	-0.49	37	.628
理想自己	-2.10	37	.043
義務的自己	-1.11	37	.275
家族の影響	-1.32	37	.195
道具的—接近	-2.73	37	.010
道具的—回避	-0.41	37	.686
言語学習に対する自信	-1.48	37	.147
英語学習に対する態度	-3.98	37	.000
海外旅行への志向性	0.12	37	.902

英語に対する興味	-2.63	37	.012
英語使用への不安	0.00	37	1.000
統合的志向	-2.95	37	.006
文化に対する興味	-2.00	37	.052
目標言語のコミュニティーに対する態度	-2.67	37	.011
留学に対する態度	-2.23	37	.032
異文化間接近一回避傾向	-1.93	37	.062
海外の出来への関心	-1.27	37	.212

4.2 英語学習に対するモチベーションと態度の変化と維持のプロセス

インタビュー・データから、調査協力者の英語学習に対するモチベーションと態度の変化と維持の背景が明らかになった。習熟度別編成のすべてのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って英米語専攻に入学し、春学期終了後、英語学習に対する態度がより好意的になり、高いモチベーションを維持することができた。英語学習の目的や英語学習に対するモチベーションについて、AクラスのF、BクラスのD、CクラスのNは以下のように述べている。

入学時よりもモチベーションは高くなっています。入学時は、教師になりたいというだけでしたが、外交官セミナーを受けて、高いレベルに挑戦したいと思うようになりました。先輩や先生からも刺激を受けています。在学中に交換留学に挑戦したいとも思っています。大学は自由だし、自分が好きな英語がメインなので、大学生活には満足しています。家では、授業の準備やテスト勉強の他に、2ヶ月前ぐらいから単語を30分とか1時間ぐらい覚えています。(F; 男性, Aクラス) [春学期終了時]

ここでは、日本文化と英語を学んで英語教師になりたいです。半年ぐらい留学もしたいです。英語学習には意欲的に取り組んでいると思いますが、自分に合った勉強の方法を探しています。家では課題と3日に1回ぐらい、好きな歌を翻訳しています。一人暮らしを始めたばかりなので、まずは自分の人間関係を作りたいです。大学の授業は高校よりも専門的で楽しいし、授業中に教えてあげたり聞いたりして、友人と共有するのも英米語専攻らしくて楽しいです。(D; 男性, Bクラス) [春学期終了時]

得意教科というわけではありませんが、英語が好きです。大学ではたくさん英語を使って、英語力を伸ばし、留学もしたいです。環境に慣れるのに時間がかかり、これまでの大学生活には満足していません。良かったと思うことは、全部の授業で自分が使うためにやっていることが実感できた点です。絶対というわけではありませんが、英語を使う職業に就けたらいいと思います。授業の課題や復習をやったり、授業について行くのが精一杯で、TOEICやTOEFLの勉強はできていませんが、勉強は結構やっています。バイトのない日は大学に残って、多い時は一日に3時間ぐらい勉強しています。(N; 女性, Cクラス) [春学期終了時]

このように、ほとんどの調査協力者は、英語力に関係なく、4年間の学生生活に大きな期待を抱いて入学し、在学中に留学し、卒業後は英語教員などの英語力を活かせる仕事に就きたいという目標を持っていた。入学後も、授業や課外活動に意欲的に取り組み、クラスメートや先

輩などから刺激を受け、英語や英語圏の文化についての関心を深めていた。ただし、FやDの場合のように、実際には英語学習に多くの時間を費やしていないケースも多かった。

上記のように、すべてのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対する好意的な態度や高いモチベーションを維持することができたが、少数ではあるが、維持することができない者もいた。

大学生活には満足していません。やる気が出なくて休みが多いです。英語は専攻しなくても出来るので、英語だけでいいのかなと思ったりもします。今までは新しい環境に慣れるのに精一杯でしたが、最近は少しだけ、外部試験の勉強なども始めました。(J; 女性, Bクラス) [春学期終了時]

入学時と比べて、モチベーションは下がっています。バイトを始めて時間が取れなくなって、勉強ができていません。A大では、日本語の英語の授業が多いと感じます。大学の授業で充実感がないし、英語力は落ちていると思います。(K; 男性, Aクラス) [春学期終了時]

このように、少数の調査協力者は、新しい環境への不慣れ、英語を専攻したことに対する迷い、英語の授業に満足感が得られないこと、アルバイトに時間が取られたことなどのために、英語学習に対するモチベーションが下がっていた。

5. 考察

アンケート調査とインタビュー調査の結果を総合すると、習熟度別編成のすべてのクラスのほとんどの調査協力者は、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って英米語専攻に入学したことが分かる。英語が好きで、多くの場合、得意科目でもあり、大学でさらに英語を学べることにわくわくしていた。また、具体的な職業は決まっていなかった場合もあったが、ほとんどの調査協力者は、卒業後、英語を活かせる職業に就くことを強く希望していた。さらに、英語、英語圏の文化、コミュニティに対して好意的な態度を持ち、留学をしたいという強い希望を持っていた。

1学期終了後、ほとんどの調査協力者は、英語学習に対する高いモチベーションと好意的な態度を維持することができた。英語を使う自己をより具体的に描けるようになり、英語学習に対する態度がより好意的になり、英語力を必要とする職業に就きたいという気持ちがより強くなった。また、英語、英語圏の文化、コミュニティに対する態度はより好意的になり、留学をしたいという欲求はより強くなった。これは、社会的・動的アプローチを用いると、新しい環境に置かれた学習者が様々な外的要因の影響を受けたことにより、英語を使う自己像

(Dörnyei, 2005)を精緻化していき、その結果、高いモチベーションを1学期間維持することができたと解釈できる。ただし、上昇したモチベーションは必ずしも学習量の増加には繋がっていなかった。

このように、1学期終了後、ほとんどの調査協力者は、英語学習に対する好意的な態度や高いモチベーションを維持することができたが、他方で維持することができない調査協力者もいた。学習意欲高揚要因には、英語、英語圏の文化、コミュニティへの興味、英語授業への満足感、クラスメート、教員、先輩などの他者の影響、留学や将来のキャリアへの展望などが含まれ、他方、学習意欲減退要因には、新しい環境への不適応、部活動やアルバイトなどの他の

活動への関与、選択した専攻への迷い、英語授業への不満足などが含まれた。

なお、1学期終了後、ほとんどの調査協力者が英語学習に対する高いモチベーションと好意的な態度を維持することができたため、この時点では、英語力と英語学習モチベーションや態度の間には関係は見られなかった¹。

6. おわりに

まとめると、英語を専攻する学生のほとんどが、英語力に関係なく、英語学習に対して高いモチベーションと好意的な態度を持って入学し、1学期終了後、彼らの英語学習に対する好意的な態度はより好意的になり、高いモチベーションは維持されることが明らかになった。これは、恐らく、新しい環境へのわくわく感がまだ持続しているためだと考えられる。しかし、時間の経過とともに、学生のモチベーションに差が現れることが推測される。英語力の着実な向上とそれに伴う自己肯定感の上昇が、彼らの今後のモチベーションの維持にとって重要になることが推測される。上昇したモチベーションが必ずしも学習量の増加には繋がっていないことを考えると、学生の授業内外における英語学習を促すための教員のサポートが求められる。

【引用文献】

- Dörnyei, D. (2005). *The psychology of the language learner: Individual differences in second language acquisition*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Dörnyei, D., & Ushioda, E. (2021). *Teaching and researching motivation* (3rd ed.). New York: Routledge.
- 菊池恵太 (2015) 『英語学習動機の減退要因の探求：日本人学習者の調査を中心に』 初版
東京：羊書房
- Taguchi, T., Magid, M., & Papi, M. (2009). The L2 motivational self system among Japanese, Chinese, and Iranian learners of English: A comparative study. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds), *Motivation, language identity, and the L2 self* (pp. 43-65). Bristol: Multilingual Matters.
- Yashima, T. (2009). International posture and the ideal L2 self in the Japanese EFL context. In Z. Dörnyei, & E. Ushioda (Eds), *Motivation, language identity, and the L2 self* (pp. 144-163). Bristol: Multilingual Matters.

¹ この発表では結果を報告できなかったが、*t*検定を用いて、英語学習に対するモチベーションや態度をクラス間で比較したところ、入学時に1因子（海外の出来事への関心）に有意差が見られたが、それ以外には有意差が見られなかった。

付録1：因子と項目数

因子名	項目数	因子の詳細
動機づけ	4	学習者の英語に対する意図的努力
理想自己	5	学習者の理想自己の中で英語に対する側面
義務的自己	4	悪い結果を避けるために学習者がもっているべきだと信じている義務感や責任感などの特性
家族の影響	4	親が果たしている能動的、受動的役割
道具的一接近	5	お金を稼ぐ、よりよい仕事をみつけるなどのために英語の高いスキルを達成しようとするなどの個人的目標に基づく自己調整
道具的一回避	5	試験に合格するために英語を勉強するなどの義務感に基づく自己調整
言語学習に対する自信	4	学習者の言語学習に対する自信
英語学習に対する態度	4	身の回りの学習環境や経験に関連した状況に応じたモチベーション
海外旅行への志向性	3	学習者の海外旅行についての志向性
英語に対する興味	4	学習者の英語に対する興味
英語使用への不安	4	学習者の英語を話すことに対する不安
統合的志向	3	学習者の英語話者への好意的態度、英語圏文化の一員になりたいという気持ち
文化に対する興味	4	テレビや雑誌、音楽、映画などの英語圏文化に関するものへの学習者の興味
目標言語のコミュニティーに対する態度	4	学習者の英語を話すコミュニティーに対する態度
留学に対する態度	2	学習者の海外研修に対する意欲
異文化間接近一回避傾向	7	異文化背景をもった人と関わりを持とうとする傾向
海外の出来への関心	4	海外の出来事や国際問題への関心

米国ハワイ州の外国語教育 “World Languages” プログラムから

——外国語教師の関心の所在——

山本享史（天理大学）

はじめに

本シンポジウムは「言語継承」と「文化継承」を言語学習など多様な観点から検討し、グローバル化した世界に生きる我々の「言語文化」について再考する手がかりにするという趣旨に基づいて開催された。この開催趣旨に基づき、筆者は米国ハワイ州の外国語教育について話題提供を行った。発表では前半は米国内の外国語教育への関心の高まりについて概観し、後半は高校の教科「世界言語（World Languages）」（以後、WL と表記）とその研究へのアプローチとしての活動について述べた。本稿は発表内容をまとめたものである。

教科 WL は、米国の中学、高校の 91% で設置されているが、多くの調査や研究の課題が残されている。例えば、WL 教育は社会的公正の実現への志向性を持って進められているが、学区内における選択言語や受講状況の違いについて全米的な調査は進んでいない。また、言語教師の学生に対する認識、学校関係者の進学等に関する方針や具体的提案、言語カリキュラム選択に関わる個々の教育的経験や動機に関しても今後のさらなる調査と研究が求められている（Baggett, 2016 他）。

ハワイは全米の中で最も住民の出自民族が多様であり、多言語状況が見られる州であるが、言語教育も特徴的である。筆者はハワイ州の高校を対象に WL 教育研究を進めるにあたり、交流行事の企画や研修会への参加を通じて現地の教員とのつながりを強めることからアプローチを始めている。研究協力者となるハワイの外国語教師の多くは Hawai'i Association of Language Teachers (HALT) に所属している。ハワイの幼稚園から高校までの外国語教師の団体である HALT は、州の WL 教育を支える重要な役割を担っており、教師間の情報交換と指導力向上の機会を提供している。外国語教師の認識を探る皮切りとして、過去に実施された HALT の行事のテーマや発表タイトルを概観してみると、ハワイにおける社会的公正実現をめざす外国語教師たちの姿勢が見えてくる。

1. 米国における外国語教育への関心の高まり

経済や情報、人の移動など、さまざまな点でグローバル化する中で米国では外国語教育への関心が高まっている。その理由として、人材の雇用拡大、言語の専門家の不足、地域社会からの要請などに加え、外国語教育を通じて母語と異なる言語を学習することによって得られる知的刺激の重要性、複言語能力保持者の認知的優位性が広く認識されてきていることが指摘されている（大谷, 2012）。

米国の教育政策は教養と実用の両方に目が向けられており、その認知的優位性に関する認識の広まりを受けて外国語教育の大衆教育化、「外国語」教科の必修化が望ましいと考えられてい

るとの分析がある（拜田, 2013）。全米外国語教師の会である ACTFL(American Council on the Teaching of Foreign Languages)はそのウェブサイトで、外国語を学ぶことにより、生徒の学力 (academic achievement)、認知力(cognitive ability)、言語学習、話者への積極的態度 (positive attitude toward the target language and /or the speakers of that language) が向上するという研究結果があると述べている (ACTFL, 2022)。

この外国語教育への関心の高まりは具体的には大学入学要件や「二言語使用者の証 (Seal of Biliteracy)」という制度にも見ることができる。全米の約4分の1の大学では、すでに10年以上前から入学にあたって外国語の単位取得が求められており (Barnwell, 2008)、大学進学を考えてWLの教科を選択する高校生は多い。また、2011年以降、各州では「二言語使用者の証 (Seal of Biliteracy)」という表彰制度ができてきている。この制度は高校卒業時に2つの言語（基本的には英語ともう一つの言語）に熟達していることが認められた優秀な生徒が表彰されるというもので、Seal of Biliteracy のウェブサイトによれば 2022年現在、サウスダコタ州を除く全ての州で制度化されている。

2. ハワイの言語状況

ハワイは住民の民族的文化背景において米国で最も多様性に富んだ州であり、それぞれの民族コミュニティー同士が十分な距離を取りたいのであれば、州を離れる以外に方法はない(Saft 2019:6) とされるほどの緊密さを持っている。従って、ハワイの言語教育状況もまた多様な言語の置かれた社会状況（民族集団の歴史や社会的位置、経済活動においてそれぞれの言語がいかに関与するかなど）に影響を受けているといえるだろう。

日本語は現在、ハワイで広く学ばれている外国語のひとつであるが、その複層性は興味深い。1800年代中頃に始まる日本人移民は山口、広島といった特定の地域の出身者が多く、彼らの用いる日本語が借用語としてハワイ社会の中で定着していった。現在も *bento* (弁当) や *syoyu* (醤油) など一般的な語に加えて、*habuteru* (「はぶてる」:「怒る」を意味する広島地方を中心にした表現から) や *girigiri* (「ぎりぎり」:「つむじ」を意味する山口地方を中心にした表現から) のような移民一世の表現が現在も生活語彙として残っている。一方で戦後、観光業の隆盛に伴って多くの日本人がハワイを訪れ、移住してきた中で広がり、学ばれてきたのが、「標準」日本語である。

またハワイ語は本来、外国語ではないが、学校教育においてはひとつの外国語として学ばれる場面が多い。ハワイ語の衰退と復活の歴史と近年のハワイ語学習、ハワイ語教育の隆盛は大きな関連がある。ハワイ語は米国による帝国主義的統治の過程で1960年代に使用者が数千人まで減り、絶滅の危機に瀕する言語とされてきた。しかし1970年代に始まるハワイ先住民主権回復運動と歩を合わせたハワイ文化復興運動の中で、めざましい復活を遂げてきたのである¹⁾。ハワイ語は1978年に英語と並ぶ州の公用語に制定され、ハワイ語のみで教育(イマージョン教育)を行う学校も増加している²⁾。現在、ハワイ大学ではハワイ語のみで修了できる博士課程まで整えられてきている³⁾。

3. “World (Foreign) Languages” 教科の設置

ハワイ州教育省 (Hawaii State Department of Education: HDOE) はこのような言語状況を鑑み

て、教育政策の柱の一つに多様な文化に重点をおく多言語主義 (Multilingualism) を据えている。その具現化の形のひとつが学校教育における教科「世界言語 (World Languages)」の設置である。多言語主義は他にも、ハワイアン生徒の育成に焦点を当てたイマージョン教育の「カイアプニ (Kaiapuni) プログラム」、複数言語使用に熟達した生徒の育成を推進する「Seal of Biliteracy」制度、英語による教育が困難な生徒に母語でのサポートを行う「EL(English Learning) プログラム」として具体化されているが、教科 WL の設置は最も幅広い生徒たちに開かれたものといえるだろう。同時に教育省は生活コミュニティーとの連携強化 (Civic Engagement) にも力を入れており、各言語を生活言語とする民族グループのコミュニティー住民を言語教育のサポーターとして活用することも推奨している。

ハワイ州の公立中学、高校は約 70 校あり、教員数は約 13,000 である。そのうち WL の教員数は約 300 であり、各校に 4 名程度が所属していることになる。WL はハワイ州の公立高校教科の中で「芸術」(Fine Arts)、「就職・技術教育/予備役将校訓練」(CTE (Career and Technical Education) or JROTC) との選択になっている⁴⁾。先述したように大学進学時に単位を取得していることが求められるため、大学進学希望者の多くが WL を選択している。

州教育省は 11 言語 (アメリカ手話、フランス語、ドイツ語、ハワイ語、イロカノ語、日本語、韓国語、中国語、ロシア語、サモア語、スペイン語) を小中高の WL の言語コースとして提示しているが、実際に設置されるコースは各学校の状況 (学校の近隣コミュニティ、準備できる教員など) による。山本 (2021) によると最も多くの高校で設置されている言語コースはスペイン語 (96.2%) であり、その次が日本語 (92.3%)、ハワイ語 (69.2%) となっている。

4. 研究課題の所在

Baggett (2016) の調査によると、全米の 91% の高校で WL が設置されている。しかしながら、言語教師の認識や指導の実態、生徒の言語選択動機といった点において研究課題が多く残っている。例えば、各言語を選択する生徒や言語指導に関する言語教師の認識、言語カリキュラム選択に関わる教師自身の教育的経験、学校関係者の進学に関する方針、進路選択に関する具体的提案、言語カリキュラム選択に関わる生徒個人の動機 (学区内の民族出自やジェンダーなど、文化的差異による言語選択傾向) に関する調査や研究は進んでいない (Baggett, 2016)。

米国の中等教育における WL 教育研究の現状に照らし、筆者は現在、ハワイ州の中学、高校を対象として調査を始めている。現段階の研究課題は以下のとおりである。「ハワイの中学、高校の WL 教員はどのようなことを考え、どのような教育実践をしているのか。(どのようにつながりながらハワイの言語教育を支えているのか。)」

5. 研究対象へのアプローチ

上記を研究課題として進めるにあたり、筆者が研究対象へどのようにアプローチを始めているかについて述べておく。まず、筆者自身がハワイの WL 教員および生徒たちとつながりをもつことが不可欠であると考えている。このために 2022 年度に行った以下の 2 つ、(1) ハワイ島ヒロ高校と天理高校の生徒交流会の開催、(2) Hawai'i Association of Language Teachers (HALT) 開催行事への参加について述べる。

(1) ハワイ島ヒロ高校と天理高校の生徒交流会の開催

本企画は筆者が 2013 年度から取り組んでいる学校法人天理大学に所属する各学校の英語教育連携活動の一環として実施した。2022 年 5 月 10 日に天理高校（第一部）英語コース 2 年生 35 名とハワイ州ヒロ高校（ハワイ島）の生徒 21 名との Zoom によるオンライン交流会である。天理大学英米語専攻の大学生 4 年次生 4 名も会運営と交流のサポーターとして参加した。

この交流会は筆者がヒロ高校で日本語を教えるアヤ・シハタ教諭に相談を持ちかけ実現した。アヤ・シハタ教諭は後述するハワイの外国語教師の会である Hawai'i Association of Language Teachers (HALT) の中心役員であり、日本語教師代表を務めている（2022 年度）。ヒロ高校から参加した生徒は同校のクラブ活動である Japan Club、Taiko Club に所属しており、日本語や日本文化に関心を持っている。交流会の前半は両校からスライドや自作のポスターを用いた学校紹介。後半はお互いの高校生活について英語と日本語で質問をし合った。筆者はこの企画の準備、実施、振り返りを通して、同校の外国語教員とのつながりを強めるきっかけとした。

(2) Hawai'i Association of Language Teachers (HALT) 開催行事への参加

ハワイ州の WL の授業を支えている教員たちの団体に Hawai'i Association of Language Teachers (HALT) がある。HALT は 1986 年に設立され、幼稚園から高校までの言語教師が外国語教育に関わるアイデアや経験を交換し、専門的な背景を豊かにする機会として重要な役割を果たしてきた。近年の主な年間行事は秋のシンポジウム (Fall Symposium)、セミナーと個人、グループ発表を行う春の大会 (Spring Conference)、ワークショップが中心の夏のサミット (Summer Summit) である。各言語や地区の代表が HALT の役員を務め、ハワイ教育省「多言語主義による平等な教育のための諮問委員会 (The Advisory Committee for Policy 105-14 Multilingualism for Equitable Education) へ委員派遣も行っている。ハワイ州の外国語教育推進の重要な役割を果たしている組織の一つであるといえる。

筆者は HALT の事務局の許可を得て、春の大会 (2022 年 5 月 1 日)と秋のシンポジウム (2022 年 10 月 23 日)に参加する機会を得た。いずれもオンラインでの参加である。これらへの参加を通じてハワイの複数の言語教師につながりを広げてきた。

6. HALT 開催行事のテーマから

本項では HALT 開催行事の過去のテーマと筆者が参加した 2022 年の行事から WL 教師の関心のありようを考えたい。2010 年以降の HALT 開催行事のテーマを概観する中で言えることは、社会的公正⁵⁾の実現をめざす立場としての言語教員や学校の役割に関するものが多いということである。もう少し詳細に見ると (1)文化、言語の多様性とのつながり、(2)社会構成員としての学習者育成を目指す指導、(3)ICT による指導革新、が関心の大きな柱になっているように思われる(表 1、2 参照)。

表 1 : Spring Conference テーマ一覧

開催年	テーマ	分類
2022	Sharing Our Stories, Connecting Our Cultures	(1)
2021	Transformation of Teaching: Zooming Back to the Future- What has worked and what will you take with you?	(3)
2020	Rise HI: Elevating Multilingualism & Multiculturalism	(1)
2019	Celebrating the International Year of Indigenous Languages	(1)
2018	Learners as Leaders	(2)
2017	Celebrating Hawai'i's Heritage & Language Diversity	(1)
2016	“I ka ‘ōlelo ke ola” (“In language, there is life”)	(1)
2015	Advocate, Communicate, Educate.	(2)
2014	Show and Tell	(3)
2013	National Standards, Local Style	(2)
2012	Advocacy: Building Collaboration	(2)
2011	Celebrating HALT's 25th Year!	—
2010	Innovations in Language Teaching	(3)

(分類は筆者による)

表 2 : Fall Symposium テーマ一覧

開催年	テーマ	分類
2022	Cultural Global Connections in the World Language Classroom	(1)
2021	SELing it in the World Language Classroom	(2)
2020	Exploring Social Justice through Technology!	(2),(3)
2019	Fall Fun-posium!	—
2018	Tech or Treat!	(3)
2017	Experience IT (Instructional Technology)	(3)
2016	Communication on the Go	(2)
2015	From Teachers to Students and Beyond: Slides, Sites, and Storytelling.	(3)
2014	Creating Practical Language Teaching Tools: Forms, Apps, and Tests	(3)
2013	Connecting Classrooms, Connecting with Students	(2)
2012	Connections with Google Tools	(3)

(分類は筆者による)

2022年 Spring Conference の主な発表のタイトルと要旨を表3にまとめた。タイトルの後の説明文はオンラインで配布された発表レジュメの要旨部分を筆者が訳したものである。下線を付した部分は社会的公正の実現をめざす立場としての言語教員や学校の役割、および上記の分類(1)、(2)、(3)に関わっていると考えられる記述である。

表 3：2022 年 Spring Conference 主な発表のタイトルと要旨

	発表タイトル	要旨
A	Teaching French civilization with songs	歌と短い文学の技粋を通して20世紀のフランスを考察する「La Chanson Française au 20e siècle」という教材の扱い方。各曲を導入するためのストラテジーと生徒を飽きさせないためにYouTubeを使用することを紹介する。
B	Gather, Heal, Engage	刻々と変化する世界の中で、私たちはどのようにしてレジリエンスを築うことができるのでしょうか。本講演では、新しい教育・学習環境における自らの役割を再認識するために、すべての教育者が探求すべき主要な要素を取り上げる。
C	Connecting with learners on their own terms: Multilingual dilemmas and intergenerational conversations	中級・上級レベルの学習者は、言語学習に対する強い意欲を持っているが、言語使用者としての自分自身を明確に意識していない場合がある。ハワイ・ランゲージ・ロードマップが運営する、このようなニーズに応えるための2つのプログラムを紹介する。
D	Second Language Program Administrators: Critical Values and Practices	私たちの研究プロジェクトは、オアフ島の学校において、批判的または社会的正義を志向する第二言語プログラム管理者を育成することを目的としている。意思決定や政策立案の際に求められる見解、価値観、実践を検討する。
E	Elevating World Language Classroom Practice with Community Building	新しくポジティブな「世界言語」学習環境を構築するにはどうすればよいのだろうか？生徒の認知的、社会的、感情的な関与を促すような授業を設計するにはどうすればよいのだろうか。このセッションでは、発表者が学習コミュニティを築きながら、学習者を惹きつける授業実践を紹介する。
F	Encouraging Proficiency Through Mindfulness and SEL Activities	ターゲット言語でのマインドフルネスとSEL(Social and Emotional Learning)活動は、生徒が安全な場所で自己表現できるようにすることで、生徒同士の優しさ、思いやり、理解を深めるのに役立つ。また、これらの活動は、ターゲット言語への関わりを促進し、難しいトピックに取り組んだり、議論するためのプラットフォームとなる。
G	Aloha 'Āina Content: How are we giving back to our place?	私たちのカリキュラムに Aloha 'Āina を取り入れるにはどうしたらよいのだろうか。地域社会における学びの機会、Kapū kākāや食料システムなどの現在の問題、そしてこれらの創設の歴史に注目する。私たちのコンテンツに中身はあるのか？この問いが、私たちの土地に恩返しをするためのスタートとなる。
H	White Rock, Gray Rock: SEL, Project Based Learning, and Japanese #a	過去1年間、ワイパフ高校の日本語クラスは、日本式のロックガーデンを作るために懸命に取り組んできた。このプレゼンテーションでは、そのプロセスや学んだことを説明し、どの言語/レベルの教師でも学校で何かを作る際に役立つアイデアを共有する。
I	Engage Learners Cognitively & Emotionally with Global Competence Framework	「世界言語」の授業で、学習者を人類の次のステージを切り開くグローバル市民に育てるにはどうしたらよいのだろうか。発表者は、多様性のある授業において、認知的・感情的なタスクを通して、自己と他者とのより深いつながりを促進する学習をデザインし、促進する方法を共有する。

(要旨の翻訳、下線は筆者による)

HALT は「外国語」教師の勉強会ではあるが、各言語の指導技術の共有（例：発表 A）や言語を身につけさせるという側面を越えて、ハワイ社会の構成員である生徒たちがよりよく生きる人々の社会を実現していくために、言語教師には何ができるのかを探し求めているように思われる。また、島嶼州という地理的要因から比較的早く学校教育への ICT 導入が進められ、活用の工夫が試みられてきた様子がわかる。

「外国語イコール英語」という日本の学校外国語教育においては、TOEIC や TOEFL といったテストのスコアが重視され、その学習効果や効率性が着目されやすい。しかし、同時に重視されてきているキーワードの一つである「コミュニケーション」について考える時、言語とその文化背景への理解、共生への志向は外国語教育において不可欠である。

全米で唯一、ひとつの教育委員会の元に学校教育が統括されている州であるハワイは、文化的多様性を視野に入れた学校教育研究を進める上で私たちが考えるべき多くの事例を提示してくれると思われる。ハワイの教科 WL と外国語教育を担う教師たちに焦点を当てた研究は日本の外国語教育研究の裾野を広げるものにもなると考えている。

今回の発表で紹介した内容は HALT 開催行事の表面的な部分に過ぎない。まずはフィールドにアプローチをし、ハワイ WL 教育研究の入口に立とうとしているところである。今後の調査、研究へとつないでいきたい。「ハワイの中学、高校の WL 教員はどのようなことを考え、どのような教育実践をしているのか（どのようにつながりながらハワイの言語教育を支えているのか）」という研究課題の追究はこれからである。

【注】

1) 拙論、山本（2004）、山本（2005）はハワイ先住民主権回復運動と学校教育の強固な関わりについて具体例を挙げて分析を行っている。

2) 公立イマージョン校への入学者は 2015 年から 2020 年の 5 年間に 40% 増加して約 2,200 人

に、ハワイ文化を中心に据えて設立されるチャータースクールへの入学者は 21%増加して約 1,300 人になったとされる(ハワイ教育省ウェブサイト)。

3) 松原好次はハワイ語教育の現状と歴史に関する論考を数多く発表しているが、書籍の中では、松原 (2004)、松原 (2010) が特に参考になる。

4) ハワイの WL についての詳細は拙論、山本 (2021)。

5) 『社会学小辞典[新版]』は「社会的公正 (social justice)」を「どのような人々にどのような社会的資源をどれだけ分配するかに関する適切さの判断基準」(p.262) と定義している。文化的多様性に富むハワイ社会においては生活に密着して特に重要な概念であろう。

【参考文献】

- Adams, Kapuaokeko‘olauikaulupua Angelina Leiko. 2018. “Hawaiian Language Normalization: An Analysis of L2 Hawaiian Speaker Narratives.” *Second Language Studies*, 37(1), 35-75.
- Baggett, Hannah Carson. 2016. “Student Enrollment in World Languages: L’Egalite des Chances?” *Foreign Language Annals*. Vol.49(1), 162-179.
- Barnwell, David. 2008. “The Status of Spanish in the United States.” *Language, Culture, and Curriculum*, 21, 235-243.
- Higgins, Christina. 2019. “The dynamics of Hawaiian speakerhood in the family.” *International Journal of the Sociology of Language*. Volume 2019: Issue 255, 45-72.
- Kahakalau, Ku. 2017. “Developing an Indigenous Proficiency Scale.” *Cogent Education*, 4 (1). 1-11.
- Saft, Scott. 2019. *Exploring Multilingual Hawai‘i*. Lanham: Lexington Books.
- 大谷泰照 (2012) 『時評 日本の異言語教育-歴史の教訓に学ぶ-』 英宝社.
- ジェニングズ, ジャック (2018) 『アメリカ教育改革のポリティクス-公正を求めた 50 年の闘い』, 東京大学出版会.
- 拝田清 (2013) 「米国の外国語教育政策に見る言語文化教育観 -初中等教育を中心に-」『言語教育研究』第 3 号.
- 濱嶋 朗・竹内郁郎・石川晃弘 編 (1977) 『社会学小辞典[新版]』, 有斐閣.
- 松原好次 (2004) 『ハワイ語復権運動の現況』 関西学院大学出版会.
- 松原好次編著 (2010) 『消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして-先住民族による言語と文化の再活性化運動』 明石書店.
- 山本享史 (2004) 『ハワイにおける先住民主権回復運動とハワイの教育の関わりについて-1980 年代オアフ島ワイアナエ地区の教育プログラムを中心に-』 奈良教育大学大学院修士論文.
- (2005) 「米国の多文化教育の展開-1980 年代のハワイの教育事例を通して-」『アメリカス世界のなかの「帝国」』 天理大学アメリカス学会編, pp.201-215, むさし書房.
- (2019) 「米国の付加言語教育における言語熟達度指標の意義 -ハワイ語熟達度指標 ANA ‘ŌLELO の事例から-」『アメリカス研究』第 24 号, pp.77-96.
- (2021) 「米国の高校における外国語教育の変化の可能性 -ハワイ州公立校の教科「World Languages」に焦点をあてて-」『アメリカス研究』第 26 号, pp.125-141.

【参考ウェブサイト】

ACTFL. <https://www.actfl.org/> (2023年3月9日アクセス)

Hawai'i Association of Language Teachers. <http://halhome.org/>(2023年3月9日アクセス)

Hawai'i State Department of Education. <https://www.hawaiipublicschools.org/>(2023年3月9日アクセス)

Lee, S. 2020. Building A Hawaiian Language Curriculum Classroom By Classroom.

<https://www.civilbeat.org/2020/02/building-a-hawaiian-language-curriculum-classroom-by-classroom/> (2023年3月9日アクセス)

Seal of Biliteracy. <https://sealofbiliteracy.org/>(2023年3月9日アクセス)

スペイン語を取り入れた漫才ワークショップ

——オンラインと対面学修の比較——

橋本和美（天理大学）

はじめに

本稿の目的は、大学における「スペイン語を取り入れた漫才ワークショップ」に焦点をあて、オンラインと対面授業の学修効果の相違について検証することである。

漫才とは「ボケという滑稽なことを言う人とお客さんの視点に立ちストーリーを展開するツッコミの会話で笑いを生み出す話芸」（鈴木・島岡 2022: 103）と定義される。この漫才の「笑い」が学びを活性化させるしかけとして「教育」にかけあわせられ、「笑育（わらいく）」が誕生したのは2007年のことであった。「笑育」の中心となるのは「プロのお笑い芸人から漫才のしくみを教わり、学修者が二人一組で漫才づくりに挑戦できる漫才ワークショップ」である。同ワークショップは大阪の小中学校への導入を皮切りに、2014年以降全国の教育機関へと広がりを見せている（松竹芸能事業開発室・井藤 2018: 158-143）。

橋本（2023）では大学での先行事例を概観するとともに、オンラインでのスペイン語の授業における実践結果を省察し、漫才づくりが語学の授業を活性化させる可能性を示唆した。本稿では調査対象に対面授業を加える。参加者の授業後アンケートをKH Coderで計量テキスト分析することによってオンライン授業と対面授業での共通する学修効果、および異なる点を抽出したい。

1. 先行事例

笑育は主に小・中・高等学校で展開されているが、大学でも若干の事例からその有効性を確認することができる（橋本 2023）。就職を控えた学修者20名¹⁾を対象に漫才づくりを実践した井藤（2017）では、「漫才を通じて他者とより良くかかわるためには、自己を深く見つめることが求められ、その先により他者理解への道が開かれる」ことが明らかにされている。また留学生と日本人学生を実践対象とした関口・ドリュー（2020）では人をからかうという非日常的な表現に触れることによって新しいコミュニケーションスタイルを獲得し、日本人学生との友人関係構築に良い影響を及ぼしたことが示された²⁾。立部・フランポネ・藤田（2022）³⁾ および鈴木・島岡（2022）⁴⁾でも日本人学生と留学生による「漫才づくり」が実践され、「日本人学生が海外の人からの意見を肯定的に受け取る成果が見られた」、「学修者が達成感を得た」、「留学生が日本文化へ興味関心を高めた」、「取り組み初期は戸惑いがあったものの、活動の過程において新たな気づきを得られた」、「漫才が親しみ、広がりのあるものになり、メッセージ発信手段の一つとして捉えられるようになった」、「学生自らが新しい作品として漫才を創り出し、クラスで共有したことは受講生にとって大きな意味があった」、「肯定的な反応（笑い）

が、心理的、認知的な足場かけ（Scaffolding）として機能し、豊かな学びにつながった」などの報告があった。

グローバル化、IT化により急速に変化する現代社会において、若者たちには詰め込み型教育で得られる知識のみならず、「コミュニケーション力」、「問題発見力」、「創造力」、「協働力（協働する能力）」が求められている。教育学の見地から笑育を体系化した井藤（2017: 164-166）によると、漫才づくりはこれらの諸能力を事後的、結果的に養うことができる極めて汎用性の高い学びであると示唆される。以下に先行事例より「漫才づくりによって習得が期待される能力」と「その理由」の主なものを一覧する（青砥 2015: 49-54 および井藤 2017: 164-166）：

表1 漫才づくりによって習得が期待される能力（代表例）

能力	漫才づくりが有効である理由
人間関係形成力	大学生は一般に低コンテクスト社会（異質性・他者性の高い集団）での「笑い」に消極的であるが、漫才づくりは他者とより良い関係性を構築するきっかけとなるから。
言語能力	大学生は改まった場で意図的に笑いを活用する能力が未熟な傾向にあるが、漫才を発表する場では人々の共通性・異質性・状況を瞬時に判断することが求められる。このような体験により、スピーチや話し合いをより良く実践できるようになるから。
複合力・総合力	漫才づくりを体験することによって、自己認識（思考力、発想力、イメージ力）および他者理解（相手との協働、観客への配慮現代社会で求められる諸能力）を直接的・間接的・事後的・結果的に体得することができるから。
レジリエンス	漫才づくりでは、好ましくない出来事を「笑い」のネタに読み替えることができる。このような思考のシフトを習慣化することによって、ネガティブ事象を人生の糧とし、より柔軟に力強く生きることができるようになるから。
笑い観の継承・発展	漫才の中には、落語のように人間の普遍的な愚かさ、弱点を笑いながらも引き受けようとする日本的感性のエッセンスが含まれるものがある。これらに触れ親しむことは、日本人らしい笑い観の継承・発展につながる可能性が高いから。

2. 実践

本章では、筆者が実践した漫才ワークショップについて省察する。表2に示すとおり、ゲスト講師の参加形態は、実践1～3ではオンライン、実践4のみ対面であった。一方学生の参加形態は、実践1では全員がオンライン、実践2ではオンラインと対面の混合、実践3および4は全員が対面であった。本考察ではコロナ禍以前の授業、つまり講師と学修者全員が対面である形態を「対面授業」と位置付けたい。つまり実践1～3をオンライン、実践4を対面授業と分類する。

また、授業目標はオンライン、対面ともに「漫才づくりを通してスペイン語に触れる」、「他者と協力して課題に取り組むと設定した⁵⁾。

表2 実践内容 (2021年度)

実践	日程	大学・学年	授業形態	授業名	受講人数(名)	ゲスト講師
1	6/18	A・2～4	オンライン	スペイン語コミュニケーション1	12 (オンライン)	フランボネ島岡・藤田ゆみ・たねやん(オンライン)
2	6/21	B・3	オンライン	表現文化演習	12 (オンライン2/対面10)	フランボネ島岡・藤田ゆみ(オンライン)
3	12/6	B・2	オンライン	スペイン語演習	19(対面)	フランボネ島岡・藤田ゆみ(オンライン)
4	12/15	B・1	対面	スペイン語B	8(対面)	藤田ゆみ・たねやん(対面)

- 【授業の流れ】
- 1) ゲスト講師の自己紹介
 - 2) 漫才とは
 - 3) コンビ名の決め方、飛び出し(資料1)
 - 4) ペア作業1
 - 5) 発表1
 - 6) ネタの作り方(資料2)
 - 7) ペア作業2
 - 8) 発表2(資料3)
 - 9) 相互評価(資料4)
 - 10) ゲスト講師による総評、質問タイム、アンケート

オンライン授業(実践1～3)

調査時期は2021年度、対象者は私立A大学「スペイン語コミュニケーション」の受講生12名(2～4年次生, 学修歴1年3か月)、および私立B大学「表現文化演習」の12名(3年次生, 学修歴1年6か月)と「スペイン語演習」の19名(2年次生, 学修歴1年3ヶ月)であった。それぞれの科目名や学年は異なるが、学修歴(1年以上)と習得内容(基礎的なスペイン語終了⁶⁾)は一致しており、語学力に大きな差はなかった。

次に学修者同士の交流状況について述べる。A大学は学部の方針により全外国語科目がオンライン授業で実施されていた。そのため学修者らは入学当初から対面での交流がなかった。Zoomを利用したリアルタイム授業では個人情報への配慮から画面オフが保たれており、例年に比べ新たな人間関係が育まれにくい環境であったと推察される。一方B大学は本実践を行った段階で対面授業が再開されており、教室では同じ部活動に所属する学修者らの会話が見られた。しかしながら感染症対策が続く中、アクティブラーニングによって学修者の交流を積極的に促すなどコロナ禍以前の授業を展開することは難しい状況であった。また学修者が個々の事情に応じてオンラインへの切り替えを申し出ることも多く、決して落ち着いた学修環境ではなかった。このような状況から、両大学とも学修者同士の交流はコロナ以前に比べると希薄であったと捉えられる。

ここからはワークショップの流れについて述べる。まずzoomに登場したゲスト講師ら⁷⁾が、略歴や活動内容等を紹介し、「コンビ名の決め方」、「飛び出し(挨拶)」について説明した(資料1)。その後、担当者があらかじめ割り振っていたコンビに分かれ、ペア作業に移った⁸⁾。Zoom受講者がペア作業を行う場合は、ブレイクアウトルーム機能を利用し、ゲスト講師が各ルームを訪問してサポートした。対面参加者から質問が出た場合は、筆者を通じてスクリーン上のゲスト講師に呼びかけ、やりとりが行われた。約10分程度経過した段階で準備が整い、前半の発表を行った⁹⁾。後半ではゲスト講師がネタの披露しながら、オチの作り方を紹介した(資料2)。学修者は「似ている語リスト¹⁰⁾」を参考に、ペアワークを進めた。約20分経過したところで全コンビの作業が終了したことが確認され、全体でネタを披露した(資料3)。締めくくりとして

ゲスト講師から総評を受け、質問タイムに移った。最後に学修者はアンケート¹¹⁾に回答して授業は終了した。

対面授業（実践4）

調査時期は2021年度、対象者は私立B大学「スペイン語B（文法）」の8名であった。このクラスはスペイン語専攻とはいえ学修歴が1年未満であることから、本稿では実践1～3と同レベルと位置づけた。授業形態は対面ではあるが、実践2,3と同じく感染症対策に配慮し、アクティブラーニング等を控えており、学修者同士の交流はコロナ以前に比べると希薄であったと捉えられる。ワークショップの流れは、ゲスト講師と学修者が一堂に会した点をのぞき、実践1～3と同様であった。

3. 結果

ここではオンラインと対面授業で実施したアンケートの自由記述回答「学んだこと、気づいたこと、感想などを自由に書いてください」を分析しどのような相違があったかを確認する。アンケートはgoogle フォームを利用した。回答者数はオンライン43名、対面8名であった。

分析にはフリーソフトウェア KH Coder を用いて、筆者の恣意的・主観的な解釈となる可能性を回避することに配慮し、自由記述回答をテキスト型データに変換して質的な計量テキスト分析¹²⁾を行った。これらの操作手順は樋口（2014: 101-202）に詳しい。本分析では KH Coder なかでもアンケートの全体を可視化できる「共起ネットワーク¹³⁾」を利用した。

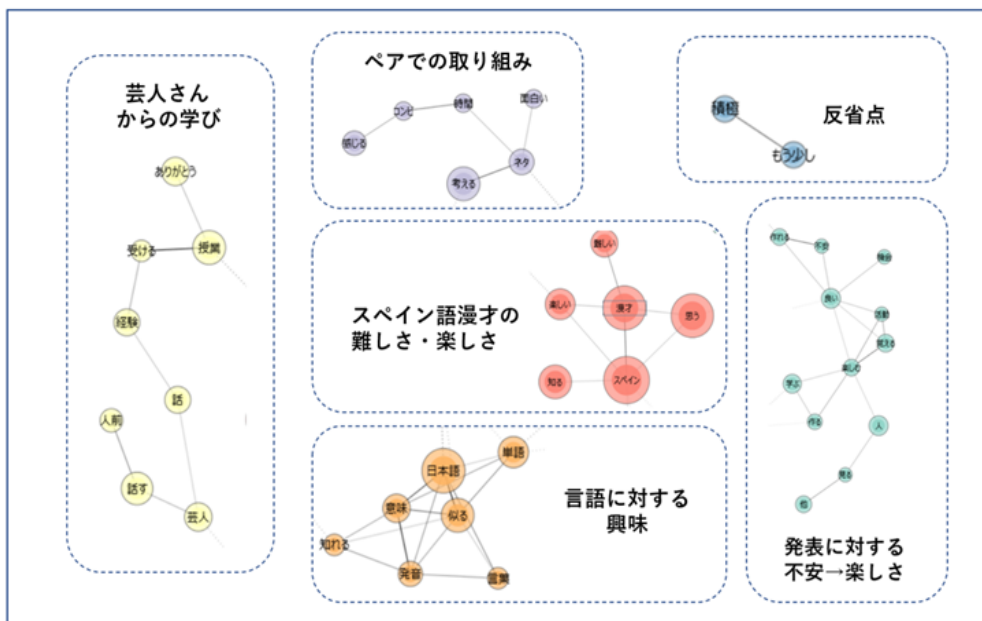


図1 オンライン授業の感想

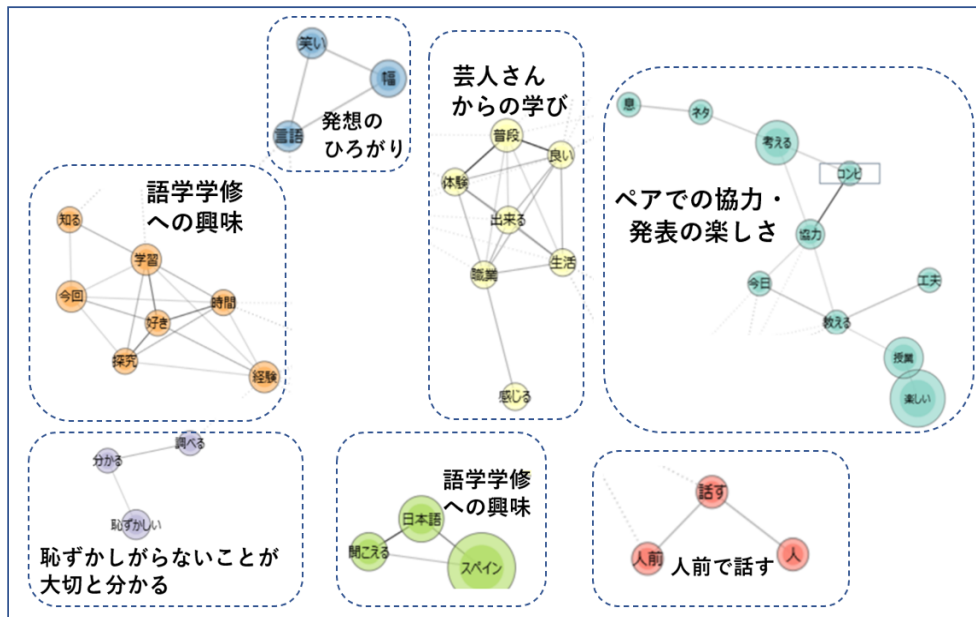


図2 対面授業の感想

図1はオンライン、図2は対面授業の感想である。共起ネットワークでは強く結びついた語同士が自動的にグループ化されるサブグラフ検出を行うことができる¹⁴⁾。サブグラフのタイトルは、筆者が素データで出現回数の多い語を確認し、サブグラフの特徴を表わしうるキーワードと判断したものを付した。たとえば、図1中央上部のサブグラフは「ネタ」「考える」「時間」「面白い」などのキーワードで構成されていることから、名称を「ペアでの取り組み」とした。

表2 「漫才づくり」によって習得が期待される力 (オンライン授業)

サブグラフ	人間関係形成力	言語能力	複合力・総合力	スペイン語力
ペアでの取り組み	○	○	○	
発表に対する不安→楽しさ		○	○	
芸人さんからの学び	○	○	○	
言語に対する興味		○		○
スペイン語漫才の難しさ・楽しさ				○

表3 「漫才づくり」によって習得が期待される力 (対面授業)

サブグラフ	人間関係形成力	言語能力	複合力・総合力	スペイン語力
ペアでの協力・発表の楽しさ	○	○	○	
人前で話すこと		○	○	
発想のひろがり			○	
恥ずかしがらないことが大切と分かる		○	○	
スペイン語漫才の難しさ・楽しさ				○
芸人さんからの学び	○	○	○	
語学学習への興味				○

表2, 3「漫才作りによって習得が期待される力」では、左側に共起ネットワーク (図1, 2) に現れたサブグラフの名称、上段は表1の知見「人間関係形成力」、「言語能力」、「複合力・総合力」

合力」に「スペイン語力」を加えた4項目が並ぶ。筆者がアンケート回答の素データを確認した上で、各サブグラフがどの能力育成に結びつくかを○印で示した。その結果、オンライン、対面授業ともに「人間関係形成力」、「言語能力」、「総合・複合力」、「スペイン語力」の育成につながる可能性が示唆される結果が得られた。

表4 オンライン・対面で異なる特徴

	オンライン	対面
スペイン語漫才の難しさ	○	△
不安	○	—
反省	○	—
芸人さんからの学び	◎	○

表4はオンラインと対面で異なる特徴を示したものである。表の左には筆者がアンケートを確認し、オンラインと対面で学修者のコメントに異なりが見られた点を項目として並べた。以下でこの結果を考察し、今後の課題を抽出したい。

まずオンラインでは対面に比べて「スペイン語漫才の難しさ」や「不安」を感じる学修者、また授業後に「反省」の気持ちを述べるコメントが多く見られた。今後の課題として、オンラインでは授業担当者が学修者により寄り添う姿勢を見せて声かけをするなど精神的なフォローを心がける、また事前課題を準備して緊張感をほぐすなどの配慮が必要だろう。

一方、ゲスト講師である「芸人さんからの学び」に着目すると、その価値をより大きなものと認識していたのはオンライン学修者であった。あくまで筆者の印象であるが、対面授業ではゲスト講師の存在感が常に近くに感じられることから、教室は終始賑やかで一体感のある雰囲気は保たれた。他方、オンライン授業では和やかな雰囲気が保たれていたが、スクリーンのゲスト講師が発言する際は、教室は静まり学修者らは私語を慎んで集中するなどメリハリが感じられた。特に2021年の春学期は感染状況がまだ落ち着かず社会全体に緊張感があったことから、真剣な取り組みが実現しやすかったのかも知れない。

このオンラインと対面の相違は質問タイムに関する回答でも見られた。オンラインではゲスト講師のメッセージを人生の糧としてとらえたコメントが目立った。一方、対面授業では、真剣な質問を投げかけるには明るすぎる雰囲気だったのかも知れない。漫才づくりを非日常のイベントとして楽しむことはもちろん大切であるが、冒頭で述べたとおり本ワークショップは現代社会が若者に求めるスキルを修得する目的も兼ねている。これらを考慮に入れ、学修者の自己学修能力を高めるために授業者がフォローをする必要があるだろう。

4. おわりに

本実践の結果から、大学で初級スペイン語の習得に取り組む学修者にとって「漫才を取り入れた授業」はオンライン・対面授業ともに多少なりとも有効であり、特に「人間関係形成力」、「言語能力」、「総合力・複合力」、「スペイン語力」に寄与することが示された。一方、オンラインでは、精神的なフォローや事前準備が必要であることが明らかになった。また対面授業では、学生の自己学修能力を高めるために授業者の働きかけが必要であることが示唆された。

しかしながら今回の調査は短期間の取り組みに基づいているため、その結果は必ずしも一般化できるものではない。また対象が初級スペイン語の学生に限定されているため、他のレベルや言語における効果については考慮されていない。今後はより多くの学修者を対象にした長期

間の比較研究を継続し、対面、オンラインともにより効果的な教育方法を模索する必要がある。

【注】

1) 2016年5～7に東京理科大学において全9回(週1回)で開催。

2) 2019年6月21, 24, 26日に筑波大学英語プログラムスピーチ課題として全3回で開催。

3) 2021年の4～8月に徳山大学の地域ゼミにおいて全15回で開催。

4) 2020年12月22日に東京外国語大学国際日本学部の授業科目「メディア日本語：メディアとメッセージ」(日本語母語話者29名、日母語話者12名)で開催。

5) 安心・安全な学修環境を保つため、学習者には次の2点もあわせて提示した：①コロナ禍、またその他の事情によりオンライン参加が可能、②人前で表現することが心身に影響を及ぼす場合は見学し、別課題に取り組む。今回の実践において、見学希望者はなかった。

6) 各クラスとも発音から動詞の直説法現在形および過去形を用いた文章の組み立てに必要な知識までを終了している。

7) 吉本興業株式会社の漫オコンビ「フランポネ」マヌー島岡さん、「スペイン語大好き芸人」藤田ゆみさん、「漫オで覚える外国語」スーパーバイザーのたねやんさん(専門学校スペイン語講師)が講師となった。なお、吉本興業は2019年4月に同ワークショップをスタートさせている。

8) コンビは授業担当者の著者によって割り振られた。先行研究の知見に基づき、低コンテキストの学修者がペアとなるように配慮された。

9) 学修者のつくったコンビ名には、Salud taberna, Ajo to sal, Aquí llama, Bus Mate, Mar mar mori mori, Pica pica, Gran paella, Bien macho などがあつた。

10) リストには、“bien (良い/鼻炎)”, “quiero (欲しい/消えろ)”, “sos (熊/おっそ!)”, “vivir (生活する/ビビる)”, “manga (袖/漫画)”などがあつた。

11) 本研究の目的と内容、回答内容は論文として公表されること、個人名が第三者に特定されることがないこと、参加は自由意志であり拒否における不利益はないこと、調査票の回収をもって調査協力への同意を得たものとするを、学修者へ口頭また書面にて説明した。アンケートの質問内容：1「漫オワークショップを楽しむことができましたか」、2「スペイン語の新しい知識を得ることができましたか」、3「またこのような活動をやってみたいですか」、4「学んだこと、気付いたこと、感想などを自由に書いてください」。質問1～3の結果は橋本(2023)に詳しい。本稿では4のみ扱う。

12) 樋口(2014:15)の定義によると、「計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う方法である。計量テキスト分析の実践においては、コンピュータの適切な利用が望ましい」とされる。ソフトは次のURLからダウンロードできる：<https://khcoder.net/> またKH Coderでは、分析対象ファイルをテキスト形式(*.txt)で準備する必要がある。本実践では学修者から回収した素データ(google フォーム)をテキスト形式にするために「メモ帳」アプリを利用した。「メモ帳」とはWindowsであればどのバージョンにも付属している標準テキストエディタである。メモ帳では、文字情報のみのファイルの作成、編集、保存することができる。本実践では、素データがワード文書であったため、これをコピーして「メモ帳」に貼り付ける手順で、素データをテキスト形式に変換した。

13) アンケートの回答文を単語レベルに切り離し、それぞれの語同士の結びつきや出現回数を可視化したものである。図では出現回数を円の大きさ(Frequency)で表現しており、それらの円の結びつきの強度が線の太さで示されている。共起関係が強いほど、線は太く、濃くなる(Coefficient)。語群が線で結ばれているのは、学修者の文章中で接近した場所に現れていることを示している。

14) 各サブグラフを囲む枠(点線)は筆者が付け加えたものである。

【参考文献】

- 青砥弘幸(2015)「現代の若者の『笑い』に関する実態とその課題：大学生に対する調査を中心に」『笑い学研究』22, pp.47-61.
- 井藤元(2017)漫才づくりを通じた自己認識と他者理解：大学生を対象とした「笑育」の意義について『東京理科大学紀要・教養篇』49, pp.163-182.
- 松竹芸能事業開発室・井藤元(2018)『笑育ー「笑い」で育む21世紀型能力ー』毎日新聞版.
- 鈴木美加・島岡学(2022)「多国籍の学生と芸人・教師による漫才ワークショップー「メディアア
 日本語：メディアとメッセージ」授業における試みー」東京外国語大学国際日本研究センター編『Journal for Japanese studies』12, pp.99-116.
- 関口美緒・ドリュウ, スペイン(2020)「中上級日本語学習者における創作活動ー漫才の指導を通してー」筑波大学グローバルコミュニケーション教育センター『日本語教育論集』35, pp.45-53.
- 立部文崇・フランポネ・藤田ゆみ「留学生と日本人による漫才作成過程における多文化共生への気づき」『徳山大学総合研究所紀』44, pp.55-62.
- 橋本和美(2023)「スペイン語を取り入れた漫才ワークショップーコロナ禍におけるオンライン学修の試みー」『NGO活動研究』(ナークジャーナル)21-1, pp.1-9
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析』, ナカニシヤ出版.

【参考ウェブサイト】

KH Coder <https://kncoder.net/> 2023/3/31 アクセス

【資料】

資料1 コンビ名、飛び出し(挨拶)の例

〈コンビ名〉	
バンド名と同じようなもの。ネーミングに決まりはないが、覚えやすい名前、ヘンな前、おもしろい名前の方がよい。例えば「好きな食べ物と嫌いな食べ物を組み合わせる：トマトパエリア」、「おもしろい響きの言葉：ウンポコ、ポコアポコ、バカとアホ」、「おもしろい地名：クエルナバカ、チワワ、マルデアホ」など。	
〈とびだし〉	ボケ・ツッコミ : Hola.
	ボケ : Me llamo Yumi. Yo soy japonesa.
	ツッコミ : Me llamo Manu. Yo soy japonés.
	ボケ : Somos Vaca to Ajo.
	ボケ : Mucho gusto. 資料提供 吉本興業

資料2 ネタ作りの例

スペイン語のおもしろい言葉や間違えた言葉を使う例	
<ul style="list-style-type: none"> ・ Vaca バカ(牛)と ajo アホ(にんにく) ・ No sé (知らない)が野瀬さんに聞こえる など 	
ネタの例	ボケ : あれ、佐藤さんまだ来ないね。
	ツッコミ : 佐藤さんならあと5分で来るって。もうちょっと待つて。
	ボケ : Mucho tomate? トマトがたくさんあるの?
	ツッコミ : Mucho tomate じゃなくてももうちょっと待つてと言ったの! もういいよ。
	両方 : どうもありがとうございました! 資料提供 吉本興業

資料3

学生の漫才（抜粋）

オンライン

AB : Hola～（拍手しながら登場）
 A : Me llamo A. Soy japonesa. Me gusta Judo.
 B : Me llamo B. Soy japonés. Me gusta Kendo.
 A : Somos “Bien Macho”.
 AB : せーの、Mucho gusto.（おじぎ）
 A : おまえ、好き嫌いある？
 B : おれ？おれ、アボカド、ダメやねんな～
 A : え？Abogado Dame!? 弁護士が欲しいって！
 おまえなんか悪いことでもしたん？ いいところ紹介するで。
 B : ちゃうちゃう、スペイン語の Abogado と Dame じゃなくて、
 くだものアボカドが苦手ってこと！ ¡Ya basta!（もうええわ！）
 AB : ¡Muchas gracias!

対面

CD : Hola～
 C : Yo soy Choji. Me gusta el béisbol.
 D : Hola, soy Hiroshi. Me gusta el fútbol.
 C : Somos “Choshi” .
 D : Mucho gusto.
 C : ひろし、何つくってるの？おいしそうだね。
 D : Hola Choji. Estoy preparando el gazpacho.
 C : ちょっと味見していい？
 D : ¡Dame Ajo!
 C : なんでそんなこと言うん？ひどいわ。
 D : ちゃうちゃう、Dame ajo て、にんにくちょうだいて意味やねん。
 C : そういうことか。もうええわ。
 CD : ¡Muchas gracias!

資料4 相互評価用ルーブリック

ルーブリック①：各コンビ発表時の他者評価

評価項目	3点	2点	1点
A 発音	ゆっくり大きな声で、 聞き取りやすい。	聞き取りやすい。	聞き取ることができる。
B 関わり	とても 息が合っていた。	息が合っていた。	取り組み方を工夫すればさらに良くなりそうだ。
C 漫才	大変 よく考えられた内容で、 楽しみながら知識が得られる。	よく考えられた内容で、 楽しみながら知識が得られる。	基本的な内容を満たしている。

ルーブリック②：学修後の自己評価

評価項目	3点	2点	1点
A 発音	ゆっくり大きな声で、 聞き取りやすいように発音できた。	相手が聞き取りやすいように 発音した。	発音した。
B 関わり	活発に 意見を出し合った。	意見を出し合って取り組んだ。	課題に取り組んだ。
C 漫才	大変 おもしろい内容の漫才ができた。 とても 楽しむことができた。	おもしろい内容の漫才ができた。 楽しむことができた。	漫才をすることができた。

資料5

学修者のアンケート原文（抜粋）

オンライン

〈芸人さんからの学び〉

「マヌーさんと藤田さんの話が面白くてすごく楽しい授業だった」、「発表は苦手ですが、発表後に吉本の方々が褒めてくださり嬉しかったです」、「実際に海外での話や、芸人になった経緯を知って、こんな考え方があるのかとか面白くてワクワクしました」、「いろいろな話をきけて良い経験になったと思います。ありがとうございました」など。

〈ペアでの取り組み〉

「スペイン語と日本語をリンクさせるだけで面白いモノを作ることができた」、「スペイン語漫才の授業を受けて、友達とのコミュニケーションのとり方や話し方などを学び、漫才の内容も2人で考えて楽しかったです」など。

〈スペイン語漫才の難しさ・楽しさ〉

「ただ勉強するだけでスペイン語を覚えるのではなく楽しく覚えられた」、「今回の授業はスペイン語で漫才なので難しく考えていましたが、とても楽しく出来たのでとても嬉しかったです」「人前で漫才をすることがなかったのでボケを考えるのが難しかったです」など。

〈言語に対する興味〉

「スペイン語を勉強すると、他の似ている言語もすぐに習得しやすくなる」、「日本語と発音が同じの言葉を覚えることができた」、「今まで知らなかった単語の意味や、実際に日本語と間違えられやすいスペイン語などの知識がふえた」、「楽しみながらスペイン語の単語などを学ぶことができました！！みんなの作った漫才のレベルが高くてすごかったです！！」など。

〈反省点〉

「今回は緊張しすぎて周りがよく見えてなかった。もっと周りをよくみることで、得られることも多くなると思う」、「学習者自身ももっと積極的になるとスペイン語意外の学び、気づきにつながっていくと思う」など。

〈発表に対する不安→楽しさ〉

「今回スペイン語で漫才をやるときは最初はうまく行くのかどうか不安だったけど、いざやってみると講師の方の説明も非常に丁寧でネタやコンビ名を決める時間をとってくれたり先に手本を見せてくれたりしたので最初感じていたほどの不安は最終的には消えていた」、「やる前はすごい嫌だったスペイン語漫才だったが、やってみると思ってたよりも楽しく他言語の良さに気づいた」、「とても恥ずかしかったけれど、良い機会になりました」など。

対面

〈芸人さんからの学び〉

「堅苦しい感じではなくラフな感じで授業ができて楽しかった」、「芸人さんはやっぱり声も聞き取りやすいし、笑顔が多くて凄いなと思った」、「普段の生活では決して経験できないような職業を体験出来たことは良い思い出になった。どの職業でも表舞台に立つまでの努力はとても辛いものがあり、一流に成ればなるほどプレッシャーなどの不安要素がかかるのだと感じた。今回は短い時間だったがそれを経験できたと思うし、別なジャンル同士の好きな事と好きな事を組み合わせて学習することで更なる探究心が得られた」など。

〈ペアでの協力・発表の楽しさ〉

「協力してコンビ名を考えた。仲良くなれてよかった」、「普段から授業は満足しているのですが、今日みたいにみんなで協力しあうことで、お互いに教えあったりすることに繋がると思うので、とても良いと思います」、「相方がしっかりとネタを考えてくれたおかげで、楽しく面白くやらせてもらいました!」、「今日のように、幅広い目でスペイン語を学んでいきたい。普段体験できないような貴重な時間でした。楽しく漫才ができた」など。

〈語学学修への興味〉

「日本語に聞こえるスペイン語を積極的に使用して盛り上がった。楽しい授業だった」、「今回のように漫才などでスペイン語とかを知っていく勉強法がよい」、「日本語に聞こえるスペイン語の単語など、こんな風にゲームみたいなものを取り入れる授業は楽しい」、「日本語だと、またスペイン語だとそう聞こえるんだ!という新しい発見があった」など。

〈恥ずかしがらないことが大切だと分かる〉

「怖じけず飛び出しができました」、「恥じらいをなくすこと、ナチュラルな会話を目指した」、「恥ずかしがったらだめだということが分かった」、「恥ずかしさを捨てることも楽しかった」など。

〈発想のひろがり〉

「漫才を考えることを工夫した」、「スペイン語と日本語の似ている使い回しを知れて、考えの幅が広がった。分からない所や気になったところはどんどん深く調べるようにすることが大切」、「言葉の違いだけでなく、ジェスチャーなど文化的なことも感じられた」、「小さなことでもいいので、趣味や興味を繋げると、探究心が出て楽しくなると思う」、「自分からネットなどで調べ、いい経験になった」など。

〈人前で話す〉

「怖じけず飛び出しができました」、「もっと全力で発表できた」、「堅苦しい感じではなくラフな感じでできた。楽しかった」、「芸人さんはやっぱり声も聞き取りやすいし、笑顔が多くて凄いなと思った」、「みんなもノリノリで楽しかったです。人前で漫才したことで鍛えられたものがあった。今回のように楽しみながらしていくとても楽しかった」、「実際にアクティビティをするのがとても楽しかったです」、「笑いをとる難しさがわかった。漫才授業は楽しかった」、「大勢(見知らぬ人)の前で話すテンポ感、反応を見ながら臨機応変に対応していくなど、相手を第一に考えることが身についたと思う」など。

母語継承の難しさ

——在日外国人集住地域を事例に——

大川ヘナン（大阪大学大学院）

はじめに

出入国在留管理庁（2022）の統計によると 2022 年度 6 月末の時点で、日本における在留外国人人口は 296 万人であり、前年度と比較して 20 万人も増加している形となっている。近年では新型コロナウイルスの世界的感染爆発により、日本でも一時的に在留外国人人口が減少する動きを見せたが、2022 年度からは再び在留外国人人口はプラスの方向に動いている。

日本における在留外国人人口は 2%程度であり、欧米諸国と比較すると少ないパーセンテージであるが、今後より外国人住民が増加すると考えられている。その理由は少子高齢による労働人口の減少の対応策として、外国人労働者に白羽の矢が立てられているからである。日本の労働人口は 2030 年には 644 万不足すると推測されており（パーソル総合研究所・中央大学 2020）、その対応策として移民労働者をさらに迎え入れること政策が進められている。2019 年には再び入管法が改正され、これまで限られていた日本への定住の扉が開かれたことになった。しかし、この入管法改正によって新設されたのは特定技能 1 号と 2 号の在留資格だけであり、外国人労働者たちの定住及び社会統合を促すための移民政策が設けられていないことが指摘されている（高谷 2019）。

これまでに先行研究において、日本における外国人住民の社会統合に関する議論は数多く蓄積されてきた。筆者の依拠する教育社会学の領域においては、外国ルーツの子どもの教育問題や社会への適応が活発に議論されてきた。（志水・清水 2001 など）。そういった議論の中で、日本語の取得や母語の維持の重要性が述べられてきた。しかし、一方でフィールドワークを通じて出会う保護者たちは日本語の取得の重要性を語る傍ら、母語の継承に難しさを感じる場面が見られた。そこで本稿では母語継承を希望していても、それを成し遂げることの難しさについてのフィールドワークから得られたデータをもとに検討を行っていききたい。

1. 地位達成のための母語継承

母語継承はこれまで言語学の学問領域の中で様々な検討が行われてきた。齋藤（2005）の研究では、日本国内における母語・継承語の学校及び地域における活動にフォーカスが当てられ、母語・継承語の重要性を認識しつつも、制度的な基盤や様々なリソースが足りないことが指摘された。また花井（2016）の研究では韓国人国際結婚家庭における言語選択の有り様が検討された。韓国人妻の日本語能力が高い場合には、居住地の日本語が選択されることになり、子どもへのバイリンガル教育が困難となることが指摘された。そして、日本ではエスニックコミュニティが形成しづらいことも、韓国語の継承に困難を与える。花井はこれらの原因は日本にお

ける継承語の政策的支援が不足していることが原因であることを問題提起している。

日本に国内における母語継承の難しさが既に指摘されている一方で、移民研究の領域では母語継承が移民のホスト国での地位達成につながるということが論じられてきた。アメリカにおけるポルト・ルンバウトの大規模な統計調査により、移民のホスト国での同化は時間の経過とともに直線的に果たされるものではなく、様々な要因が複雑に絡み合う形で分節的に行われることが提示された（ポルテス・ルンバウト 2001=2014）。このポルテス・ルンバウトの分節的の同化理論において、移民のホスト同化は主に3つの形態に分けることができる。一つは不協和型文化変容である。不協和型文化変容では移民一世である親と二世である子どもが関係構築に失敗し、ホスト国における下位文化に同化を遂げるものである。次に協和型文化変容である。ここでは移民一世の豊富な人的資本が移民二世の教育達成にプラスの影響を与えるが、二世の子どもはホスト国のマジョリティ文化へ同化を遂げるものである。そして、最後に選択的文化変容である。この文化変容では移民一世も二世もホスト国と出身国の文化・言語を文化に恵まれており、双方の文化を選択的に使い分けることで、ホスト国で地位達成を遂げるものである。これらの3つの同化の形態において、ポルテス・ルンバウトは選択的文化変容が最も教育達成・地位達成が高いものであると論じた。それは選択的文化変容では、双方の文化のアドバンテージを活用することができるからである。ポルテス・ルンバウトの調査はアメリカで実施されたものであるため、日本の移民にも適応できる理論であるのかは検討が必要である。清水ら（2021）日本ではそもそも移民の総数が少ない点やエスニックコミュニティが形成しづらい点があるため、そのまま当てはめて議論することは危険であるが、適合的であると論じた。そのため、日本でもアメリカ同様に選択的文化変容を遂げる二世の若者の方がより教育達成・地位達成を遂げやすいと示した。つまり、日本でも日本語と母語の双方の言語を有している方が、社会で成功をするチャンスが高いということである。

このように先行研究では母語継承に関する様々な議論がなされてきた。日本における母語教育の難しさや国際結婚家庭での母語継承の難しさが論じられてきた。しかし、一方で母語継承はホスト社会における地位達成の可能性を広げるものでもあると示されている。そこで本稿ではこれらの先行研究を踏まえて、日本における外国人集住地域における外国人家庭の母語継承の難しさについて検討を行う。外国人集住地域では、学校や地域において母語継承はより環境が整っており、さらにエスニックコミュニティが存在することによって母語はより家庭以外でも日常的に触れることができるものとなる。このような環境下では母語継承の難しさはどのような点において現れるのかを分析する。

2. 調査概要

本稿では外国人家庭における母語継承の難しさを検討するために、日本で在日外国人が集住しているA県B市のX団地で調査を実施した。A県は外国人住民の人口が日本の中でも高い県であり、そんなA県の中でもX団地は最も外国人住民が集住している地域である。X団地は日本有数の在日外国人が集住している団地であり、2022年現在において外国人住民は団地全体の56.6%（3,818人）である。X団地に暮らす大半外国人住民は在日ブラジル人であり、X団地への集住が始まったのは1989年の入管法改正以降である。周りに多くの自動車工場を有していたことから、多くの会社の社宅としても使われた。外国人住民の集住度合いが高く、さらにその多くが在日ブラジル人であるため、X団地内にはブラジル資本のスーパーマーケットや

ブラジル人学校が隣接しており、さらに診療所や郵便局等には通訳が常駐している。団地内の看板にはポルトガル語が併記されており、X団地内では日本語を使用せずに暮らすことが可能となっている。このような制度的完備性（Breton 1964）が高いことにより、X団地で暮らす家族は日本語取得したり、日本人と繋がりを作ることなく自立した生活を送ることが可能となる。つまり、X団地という場は日本の他の地域よりもポルトガル語の母語継承が行いやすい地域と認識することができる。このようなポルトガル語が優位な環境において、外国ルーツの子どもへの母語継承をどのように考えているのかを本稿で検討する。

本調査では団地内にある学習支援教室に子どもを通わせている在日ブラジル人の保護者に対してアンケート調査及び半構造化インタビューを実施した。半構造化インタビューとは構造化インタビューと非構造化インタビューの間を取るインタビュー手法である（倉石 2022）。構造化インタビューでは、調査協力者に対してあらかじめ質問項目や質問の順番が全て決めた上で聞き取りを行うインタビュー方法であり、それに対して非構造化インタビューは質問項目や順番を事前に設定せずに、日常会話のように聞き取りを行うインタビュー方法である。これらの2つのインタビュー手法の間にあるのが半構造化インタビューである。半構造化インタビューは教育社会学研究や異文化間教育研究で最も頻繁に活用されるインタビュー手法である。半構造化インタビューでは事前にある程度の質問項目及び順番を事前に用意するが、調査協力者の語りの出方次第で柔軟に対応するインタビュー手法である。

調査協力者の選定はX団地内にある学習支援教室に子どもを通わせている保護者から始まり、スノーボール方式で調査協力者を広げていった。本稿執筆時点では調査協力者 20 名ほどである。インタビューはそれぞれの保護者の教育戦略を問うものであり、子どもの教育をどのように考えており、どのような将来展望を持っているのかの聞き取りを行った。その中で、共通して母語継承に関する難しさが語りとして現れた。本稿ではそれら語りに着目して、何故母語継承が難しいのかを検討する。

インタビューに際しては許可を得たのちに録音を行い、その後インタビュー内容の文字起こしを行った。インタビューは筆者と共同研究者が共に行い、調査協力者がポルトガル語で語った場合には、筆者がその場で翻訳を行った。本稿で使用される地域名、団体名及び人物名は全て仮名である。

3. 母語を継承させる難しさ

本調査において外国人保護者から母語継承に関する難しさが語られたが、それは必ずしもそれぞれの保護者が母語を軽視している訳ではない。保護者たちは母語であるポルトガル語を重要視しているものの、日本語の学習を優先せざるを得ない状況にあることが垣間見れた。特に本調査に協力した保護者たちは教育意識が高く、子どもの日本でのチャンスを最大化させるために、様々な教育的投資を行っている保護者たちであった。そして、これらの保護者のもう一つの特徴として日本への定住を決めている点にある。定住を決めている保護者たちにとって、子どもに母語のポルトガル語よりも日本語を優先させることは自然な流れである。

日本で住むことを決めたもんで。だから、ポルトガル語、ブラジルの習慣とか、それを捨てるんじゃないんだけど、ただ、日本語、日本の文化を優先していこうと決めたもんで、その辺は、ブラジルとかポルトガル語とか、あまりしゃべれないとか、あまり分からない

とか、その関係が出てくるんですね。多分、子どもには、ずっと日本で住むことを決めたもんで、ポルトガル語より日本語のほうを知ってたほうが、まだ一人で生活ができるんじゃないかって、いろんな道が引かれるんじゃないかって、そういう思いで、そういうふうにやってるんですよ。だから、そこで決まるんですね。将来、何をやるかによって、日本語に力をもっと入れるか。（2022/3/19 G夫妻：夫 インタビュー）

日本で暮らすことを決めた家族にとっては、子どもが日本社会でいかにチャンスを得ることができるのかが重要な視点となる。工場で働く保護者たちは工場で重労働を日々経験しており、子どもには同じような経験をして欲しくないという強固な考えを持っている。そのため、保護者たちは子どもたちが学校で日本人の子どもと同じチャンスを得られることが重要と考えている。そして、そのためには日本語の能力が求められることになる。

娘が日本の学校に行き、先生たちの言っていることが分からなかったらすごく心配していました。やっぱり日本語が分からない場合は、特別な国際クラスに入れます。私は、それは嫌でした。娘に日本人の子どもと同じように勉強させたくて、それで、今も学習塾に行かせています。（2022/3/6 E夫妻：妻 インタビュー）

E夫妻の事例では幼少期から娘の学習塾に通わせることで、子どもが学校で日本人の子どもと同じような教育を受けられるように準備をしていたと語る。さらに学習塾に通わせるだけでなく、家庭ではポルトガル語の母語継承よりも日本語を優先順位の上に置き、母語よりも日本語の読み聞かせを行っていたと振り返る。

私は、最初はポルトガル語の読み聞かせは避けたというか、今、ちょうど日本の一年生だから、混乱しないように。でも、二年生になったら、その読み書きもちゃんとできるように教えたいです。（2022/3/6 E夫妻：妻 インタビュー）

E夫妻の妻は幼少期に数年のみ日本で暮らした経験があり、日本語がわからない状態で学校に通うことに大きなストレスを感じるようになったという。そのため、娘には同じような経験をして欲しくないことから、幼少期から家庭でも母語よりも日本語を優先してきたという。E夫妻の事例では妻の経験から、母語よりも日本語を優先させる教育戦略を実践しているが、D夫妻の場合には、それは保護者の実体験ではなく、年長の子どもが学校の困難を目の当たりにして、年少の子どもには同じ思いをさせないために、日本語を優先させるようになった。

娘が、結局、高校を卒業するまで、コミュニケーションのところで問題を抱えていたところがあるので、今、息子のところでも娘と同じような経験をしてほしくないという思いがあって、最初に日本語をちゃんとできてからポルトガル語を教えたいという思いがあります。（2022/3/13 D夫妻：夫 インタビュー）

D夫妻の場合には、息子が高校を卒業するくらいの時期に本格的にポルトガル語の学習に力を入れたいと語る。それは上の娘が日本語できないことによって、学校でのコミュニケーションに課題を抱えていたからである。息子にはそのような経験をして欲しくないことから日本語

を優先させたが、その結果家庭では保護者がポルトガル語で話し、子どもが日本語で返事するコミュニケーションスタイルが成り立つことになる。それは子どもが日本語をよりスムーズに獲得することになるが、日本語が堪能ではない保護者にとっては子どもとのコミュニケーションが難しくなることを意味している。

日本語が母語よりも優先される中で、もう一つ考慮すべき点は英語と母語のどちらの学習を優先させるかという問題である。本調査の保護者たちがブラジル人であり、ポルトガル語が英語と近い特徴を持っていることから、英語の下準備として母語を優先させる保護者がいる一方で、英語と母語の間で葛藤を抱える保護者もいる。

筆者：日本語は重要ですけど、日本語の次にポルトガル語を教えるのか、英語を教えるのか、どっちが重要だと思いますか？

Kさん：それはまだ悩んでいます。ポルトガル語も母の言葉だし、教会でもポルトガル語を割と使うので、それはできれば覚えてほしいです。ポルトガル語は家で一緒に読み書きを練習したりしていて、英語は、息子のほうがタブレットでオンラインでやったりしています。 (2022/10/30 K夫妻：妻 インタビュー)

先行研究でも論じられているように、日本における母語の継承は単に日本語と母語の議論のみに留まらず、母語と英語の議論にも広がるものである（花井 2016）。花井の調査では韓流ブームが起きることにより、韓国語を継承させることに前向きになる保護者がいる一方で、よりグローバルに活かすことができる英語は依然として強い存在感を持っている。韓国語の場合であれば、地理的な近さや国際社会における韓国の資本力は母語継承に大きなプラスの影響を与えることになるが、ポルトガル語の場合はそのような母語継承にプラスの影響を与える要因が少ない。そのため、子どもの将来の職業のチャンスを広げるという意味合いでは、ポルトガル語のプラス影響は他の言語と比べても限られており、将来的な可能性を広げるための母語継承よりも、文化継承の一つの形態としての言語継承ということになる。

上記のように母語継承（本稿では特にポルトガル語の母語継承）において、保護者は様々な社会的要因を考慮した上で、母語の継承を積極的に行うのか、もしくは優先順位を下げて継承を行うのかを決めることになる。本調査における保護者は全員母語の重要性を理解しており、その継承にも意欲的である。しかし、実際の教育実践に移る際にその難しさが現れることになる。それは保護者の意思とは別に社会的な制約が見え隠れしているからであると推測することができる。

4. 考察

先行研究においてポルテス・ルンバウト（2001=2014）はホスト国と出身国の双方の文化資源を有している選択的文化変容を遂げた移民二世の方がより教育達成・地位達成を達成しやすいことを論じた。日本でも清水ら（2021）の調査においてもポルテス・ルンバウトの調査と同様に日本でも選択的文化変容が教育達成を後押しする要因として捉えることが示された。しかし、清水らも注意しているように日本における移民の母数も異なれば、エスニックコミュニティの形成もアメリカとは異なる。選択的文化変容の特徴はホスト国と出身国のエスニックコミュニティの双方から様々な資源を獲得することができることである。得ることができる情報やチャ

ンスが二つのコミュニティにまたがっていることから、両方の言語が活用でき、さらに両方の文化に精通していれば必然的に社会での成功のチャンスが広がるのである。けれども日本の状態に目を向けるかなり違った景色が広がっている。

日本における在日外国人の若者たちの大学進学率は正確に明らかにする統計データは現在ない状態であるが、樋口・稲場（2023）の国勢調査をもとにオーダーメイド調査によって導き出された在日外国人の大学進学率を見ると、中国籍と韓国・朝鮮籍の若者たちの大学進学率が日本人と同じもしくはそれ以上であるのに比べて、ブラジル籍やフィリピン籍の若者たちは依然として大学進学に課題を抱えている。この大学進学率の状況とポルテス・ルンバウトの分節的同化論と照らし合わせて考える、強いコミュニティを有しているエスニシティは日本語と出身国の言語の双方を持っていることが大きなメリットとして働くが、そうではないエスニシティにとって同様の効果を望むこと難しい。特に在日ブラジル人においては40.9%が製造業に従事しており、そして、その52.8%が派遣労働者として働いている現状において（厚生労働省 2021）、日本でポルトガル語を活用して、エスニックコミュニティから社会進出のチャンスを得ることは困難である。

このようにエスニシティ間によるコミュニティの発展度合いが、母語の継承にも影響を与えることになる。それは子どもの将来の可能性を広げたい保護者にとっては当然の選択であり、また葛藤を伴う選択でもある。なぜならば、多くの移民一世である保護者にとって、母語が最も自身の気持ちを表現できる言語であり、日本語は第二言語である。そのため、多くの場合保護者と子どものコミュニケーションに大きな隔たりが生まれることになる。

このような母語継承の葛藤を解消するためには、日本社会におけるそれぞれの母語の重要性を示すことである。教育現場においても母語が重要であることは既に周知されている（齋藤 2005）。母語がしっかり確立している子どもの方が、その後の日本語取得にも大きなメリットとなることは既に周知の事実であり、母語を学習すること自体がその子どもの将来のためにもなることである。しかし、現在の日本の学校教育制度では母語を学ぶ機会は限られている。大阪府の外国人特別入試枠を設けている高校では母語の授業が実践されており、母語を学校教育に取れることの可能性が既に示されている（志水 2008）。このような体系的な母語教育を学校教育に組み込むことができれば、保護者は「母語か日本語か」という葛藤を抱える必要はなくなる。また母語教育はグローバル化が求められる現在の時流にも適合的なものである。そして、それは外国ルーツの子どもだけでなく、日本人の子どもにも様々な言語に触れさせる機会にもつながる。

おわりに

母語継承について考えることは、日本に社会においてこれからの外国人労働者をどのように迎え入れるのかを考えるのにつながることである。なぜならば、外国人労働者は単なる労働力ではなく、人格を持った人間であり、つながりを持った家族を有しているからである。外国人労働者たちの子どもをどのように教育させていくのかは、日本社会においても大きな課題であり、それらの子どもたちにどのような日本社会を作りあげて欲しいのかにつながる。しかし、現在の日本社会は必ずしも外国人保護者や外国ルーツの子どもたちにとって優しいとは言えない。本調査に協力してくれたほとんどの家族は、母語を積極的に継承させたい思いはありつつも、その実行に葛藤を抱えている。「母語に力を入れると子どもが学校で困るのではないか」「母

語よりも日本語をしっかりとさせた方がチャンスが広がるのではないか」「母語よりも英語の方がいいのではないか」などという思いと向き合いながら、それぞれの保護者は日々の教育戦略を考えることになる。もし保護者たちがこのような思いを抱くことなく、母語を伝えることができれば保護者にとって日本はより暮らしやすい国へと変わることになる。

本稿では母語継承を望んでいても、それを実践することが難しい実態について迫った。外国人集住地域に住み、周りも同じ母語を共有している人々のコミュニティの中において、母語継承が困難である現実が垣間見られた。母語の継承には保護者の思いとは別に、継承を抑制する様々な社会的要因が存在しており、保護者たちはそのような社会的抑制と向かい合いながら子どもたちの教育戦略を考えることになる。複雑化する社会において、母語継承は社会的マイノリティがより困難になっていくことが予想できる。そのため、今後より多くの外国人労働者を招き入れる日本社会は、母語の存在をもっと真摯に検討していく必要がある。

本調査は限られた事例から分析を行っているため、今後より量的にも、地域性的にも研究を広げながら母語継承を抑制する社会的要因を検討することが求められる。

【謝辞】

本研究はJSPS 科研費（21K02319）の助成を受けたものです。

【参考文献】

- Breton, R. (1964) "Institutional Completeness of Ethnic Communities and the Personal Relations of Immigrants." *American Journal of Sociology*. 70 (2) : 193—205.
- 花井理香 (2016) 「日韓国際結婚家庭の言語選択—韓国語の継承を中心に—」『社会言語学』19,207-214.
- 樋口直人・稲場奈々子 (2023) 『外国人の子ども』から四半世紀を経て」樋口直人・稲場奈々子編『ニューカマーの世代交代 日本における移民2世の時代』明石書店, pp7-19
- 倉石一郎 (2022) 「インタビュー」異文化間教育学会編『異文化間教育辞典』明石書店, p54.
- 厚生労働省 (2021) 『「外国人雇用状況」の届出状況まとめ【本文】(令和3年10月末現在)』
<https://www.mhlw.go.jp/content/11655000/000887554.pdf> (2023/3/16 アクセス可)
- パーソル総合研究所・中央大学 (2020) 『労働市場の未来推計 2030』
https://rc.persol-group.co.jp/thinktank/spe/roudou2030/files/future_population_2030_4.pdf (2023/3/17 アクセス可)
- 齋藤ひろみ (2005) 「日本国内の母語・継承語教育の現状と課題：地域及び学校における活動を中心に」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 研究』1, 25-43.
- 志水宏吉編 (2008) 『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援』明石書店。
- 志水宏吉・清水睦美 (2001) 『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店。
- 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平 (2021) 『日本社会の移民 第二世代・エスニシティ間比較でとらえる『ニューカマー』の子どもたちの今』明石書店
- 出入国在留管理庁 (2022) 『令和4年6月末現在における在留外国人人数について』
https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00028.html (2023/3/16 アクセス可)
- ポルテス, アレハンドロ・ルンバウト, ルベン (2014) 『現代アメリカ移民第二世代の研究 - 移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』村井 忠政訳.明石書店.

高谷幸（2019）「序章 移民社会の現実を踏まえて」高谷幸編集『移民政策とは何か 日本の現実から考える』人文書院、pp7-22.

日本語・スペイン語の複数人会話における話者交替と発話の重なり

——聞き手の反応を中心に——

市川禎理（関西外国語大学非常勤講師）

はじめに

外国語学習者にとって、学習言語での会話のやり取りは、一対一の場合に比べ、複数人会話において発言することの方が難易度は高い。一対一の会話では、会話が進行する上で必然的に発話の機会が与えられ、発話中の割り込みの可能性が極端に低い一方で、複数人会話においては、たとえ参加者の一人が発話しなくても他の参加者によって会話は問題なく進行可能であり、必ずしも発話の機会が与えられるわけではない。したがって、発言するためにはより自発的な発話権の取得が必要となる。盛り上がっている会話ほど会話の参加者は自発的に発話するため、学習者にとっては自ら発話権を取得することが母語話者に比べてより一層難しくなる。

Solano (2010)は、スペイン語を母国語としない者（以下、非母語話者）がスペイン語母語話者（以下、母語話者）との会話中に行う発話権取得の行動について、非母語話者1名と母語話者3名による会話を分析している。Solanoは、分析の対象となった学習者は母語話者3名と比較して、自己選択による発話権の取得よりも他者選択による発話権取得の割合が多く、発話時間が長い（発話に時間がかかる）こと等を特徴としてあげ、非母語話者は会話の主導権を握ることが難しく、割り込みによる発話ではなく話者移行適切場所（TRP）での交替を好む等といったGarcía(2005)の結果を裏付けるものであったとまとめている。

また、学習言語でのグループ会話での発言を難しくする要因として、Tannen (1984)の「会話スタイル」の違いが、学習言語を運用する上でも影響している可能性が十分に考えられる。

本発表では、まず日本語・スペイン語の両言語グループの日常会話をそれぞれ録音し、会話分析の手法を用いて主に話者交替の観点から記述する。特に各参加者の会話への参加の仕方や聞き手の反応に焦点をあてて両言語の会話データを観察することにする。

1. 観察対象

(1) 会話資料

今回は、日本人3名およびスペイン人1名¹⁾による日本語会話、コロンビア人学生4名によるスペイン語会話を観察対象とした。それぞれ約30分の日常会話を録音²⁾し、そのうち20分を文字化³⁾して比較した。どちらの会話においても会話参加者は初対面ではなく、ある程度気心の知れた間柄である。自然な会話を収集するため、会話のテーマや条件は特に設定せず、自由に雑談してもらった。録音データの文字化にはELANを使用した⁴⁾。

(2) 主な分析箇所

Sacks, Schegloff and Jefferson (1974)が提唱したターンテイキング（話者交替）システム⁵⁾に基づ

き、話者交替を話者移行適切場所 (transition relevance place) (以下、TRP) や発話の重複の観点から考察する。TRP は、順番を構成する最小単位である順番構成単位 (turn constructional unit) (以下、TCU) が完結可能な時点を指し、話し手以外の者が順番を取って話し始めてもよい場所とされている⁹⁾。言い換えれば、話者交替や聞き手による「あいづち」など、会話参加者の発話が発生しやすい場所である。

一方で、TRP 以外で発話が発生しないわけではない。他者の発話中に発話権を主張する「割り込み」発話や、発話権を主張しない「あいづち」発話等による発話は、TRP 以外でも確認される。

本発表では、TRP や「割り込み」発話等によって発話の重複が生じた部分に焦点を当て、発話権の取得・維持、あいづち使用の多寡などを中心に観察する。

2. 観察

(1) 会話時間に対する発話時間の割合

図1は、ELAN に書き起こした注釈時間の統計データから会話時間 (それぞれ観察の対象とした会話 20 分間) に対する各会話参加者の発話時間割合および会話時間に対する沈黙時間の割合を算出し作成したものである。スペイン語会話は沈黙時間の合計が2分弱、日本語会話については1分弱であった。なお、この発話時間には「笑い」が含まれている。

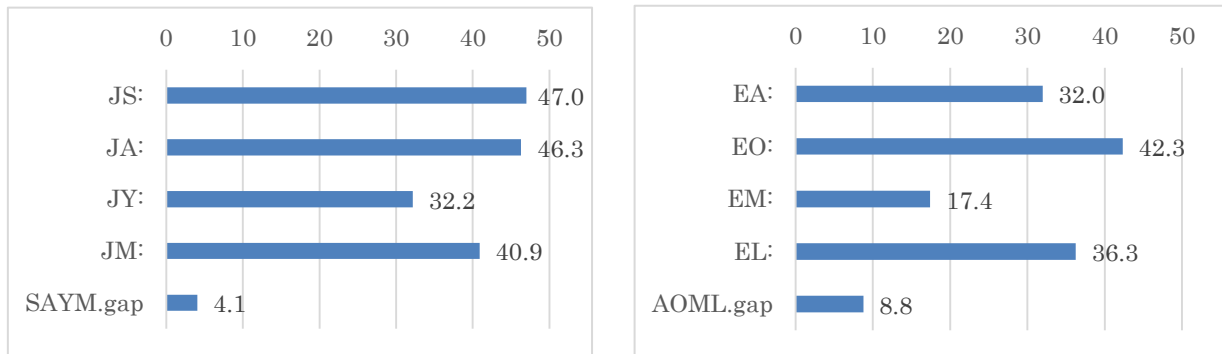


図1 会話時間に対する発話時間の割合(%) (左：日本語会話、右：スペイン語会話)

JS, JA, JM は日本語母語話者、JY はスペイン語母語話者

EA, EO, EM, EL はスペイン語母語話者

SAYM.gap, AOML.gap は沈黙時間 (いずれの参加者も発話していない時間)

EM の発話時間の短さは、会話のテーマに関する知識がなく、結果的にほとんど発言できていないことによるものである。実際に会話の中で、EA により会話に参加していないことを指摘されている。日本語の場合、あいづちを頻繁に打ち、聞き手として積極的に発話することも可能であるが、スペイン語会話ではあまりあいづちが打たれず、話題に関連するトピックを各会話参加者が次々に発言する形で進められていることから、スペイン語のこのようなケースは会話に参加しにくくなる可能性が考えられる。

JY の発話時間の短さはどうか。JY はスペイン人であり、日本語母語話者ではない。

JY の日本語のレベルは極めて高いが、日本には数年居住した程度であり、言語文化面の習得が不十分である可能性が考えられる。また、日本語と JY が母語とするスペイン語との間であいづちの用いられ方や使用頻度が違うことも要因として考えられる。

(2) 発話密度、沈黙、発話の重なるの分布

図 2 は、ELAN の統計機能を用いて、発話の分布を出力したものである。上から各参加者の発話密度⁷⁾、沈黙（誰も発話していない時間）、全参加者（4 名）による発話の重なり、二者間の発話の重なるの分布を示している。

なお、両会話とも「笑い」が発話として注釈に含まれている。会話が盛り上がり、笑いなどの言語行動が増えれば、上記で抽出した発話密度は高くなることに注意が必要である。「笑い」の頻度としては日本語とスペイン語のどちらの会話でも同程度確認されたが、日本語会話の方が「笑い」の継続時間が長くなっているようである。

全体的に、日本語会話のほうが発話密度、発話の重なるの出現頻度共に高くなっていることが確認できる。全参加者による発話の重なるの分布 (SAYM_overlap) は、発話権を実際に取得した場合以外にも、全参加者による「笑い」や「あいづち」による発話の重なりなどが含まれている。



図 2 発話密度および発話の重なるの分布

JS, JA, JY, JM ... 日本語会話参加者

EA, EO, EM, EL ... スペイン語会話参加者

.gap は沈黙、_overlap は発話の重なりを示す

(3) 発話数に対するあいづちの割合

あいづちについては、「うーん」「あー」「へえ」等の、多くの研究で Backchannels と呼ばれるもの、Clancy et al. (1996) の Reactive Token⁸⁾のうち「そう」「ほんとう」「すごい」等の反応表

現（Reactive Expressions）にあたるものを観察対象とした⁹⁾。

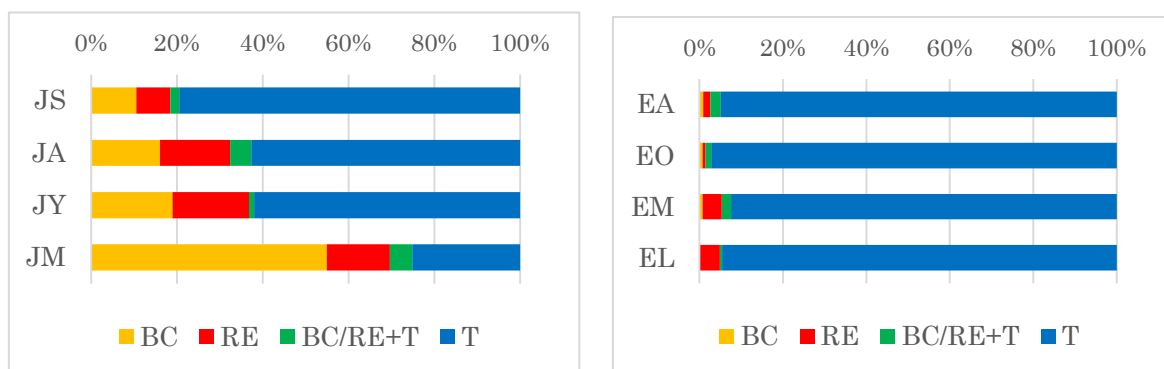


図3 発話数に対するあいづちの割合（左：日本語会話、右：スペイン語会話）

BC ... Backchannels 「うん」、「えー」、「へえ」などのあいづち表現

RE ... Reactive Expressions 「すごい」「そう」「ほんとう」などの短い反応表現

BC/RE+T ... BCまたはREの直後に実質的な発話により話者交替した場合

T ... 発話権を取得する発話

日本語会話ではあいづち的発話が多く、発話権を取得しない（順番交替を伴わない）聞き手としての発話が積極的であることが特徴としてあげられる。一方で、スペイン語会話については発言の多い少ないに関係なく、いずれの参加者も実質的な発話（順番交替を要求する発話）がほとんどであった¹⁰⁾。

日本語会話においてJSのあいづち頻度が少ない理由として、JSにとっては既知の話題が多く、以前の出来事を他の参加者に話すよう誘導している場面も多く見受けられ、結果的にあいづち的な発話が少なくなっていることがあげられる。先取り発話（相手の言おうとしていることを先に発話する）が他の参加者に比べ多く確認され、話題展開をある程度コントロールしている印象を受ける。話題に対する背景知識の多寡が発話権取得を容易にしているようである。

一方で、JMにとっては新情報が多かったことからあいづちが多くなったと考えられる。「聞いている」「賛同している」等といった聞き手としての反応を表出することで、積極的に会話に参加している。

（４）日本語会話の展開

次に、実際の日本語会話の展開を観察する。表1の例では、JSが自宅に空き巣が入ったことを話している。JS, JM, JYは公立語学学校で教師をしている。JAは海外赴任でスペインにやってきてまだ比が浅い（1年弱）。職場にはスーツで行くのか、という話題が展開され、最初に会ったときにスーツを着ていて浮いていたという話から、警察官の生徒が以前授業に制服で来たという話になり、その学生が、先日JSの家に空き巣が入ったときに駆けつけてくれた警官だった、という具合に会話が展開していく。

表1 日本語会話の展開①

0150 JS:	たぶんね, Vigo でむ 盗んだ人はVigo では売ら[ないだろう[な::]::と思[うんだけど::]
0151 JM:	[あ::]
0152 JY:	[それはそうですね::]
0153 JA:	[そうですね::]
0154 JM:	[ああ::]
0155 JA:	[そらそう でしょう[ね]
0156 JS:	[う::ん]
0157 JY:	[難し]いだろね::]
0158 JS:	[でもねバレ]ンティンさんが, [それこそ生]徒の [一人が,
0159 JY:	[うん]
0160 JA:	[はいはいはい][知ってますよ会った][こと()]
0161 JM:	[うん]
0162 JS:	[あの保険]会社のそう いう::[なんだ, [お仕事]をして]いたので,=
0163 JY:	[う::ん]
0164 JA:	[はいはいはい]
0165 JM:	=うん
0166 JS:	けっこうね, (0.2)
0167 JS:	普段はだか 例えば普通は パソコンももう新しくないから,

スペイン語の会話では、誰かがこのような形でストーリー性のあることを話す場合、聞き手は黙って（沈黙を保って）聞いていたが、日本語の場合、聞き手は頻繁にあいづちを打っている。話し手も聞き手のあいづちを想定して、あいづちを期待しているかのように、所々に TRP を設けながら会話を展開する。話し手の発話中の音の引き伸ばしや、コンマ（上昇調のイントネーション）の位置で聞き手によって多くのあいづちが打たれていることが確認できる。また、この例では話を展開している JS 自身が、0156 で「う::ん」と聞き手のあいづちに同調するような発話をしている。大浜（2006）は、このようなケースは Sacks et al.(1974)のモデルには当てはまらず、「日本語会話者に特に多く見られ、日本人の言語行動を考える上で無視できないターン交替形式の一つであろうと思われる」と述べている¹¹⁾。発話権に拘らず、話を聞いている、話しているということの確認作業を行っているかのようなあいづちの発話が挿入されていく。

表2では、JYの友人が狭い家に来て泊まったという話から、JMが自分の夫がスペインに来たときのことを話そうとする。JYの話に反応した後、JMはTRPと判断し1054で「でも私も-」と自分の夫の話を展開しようと発話するが、JSがJYの話に対するコメントを発したことから発話を中断し（0.7秒）、1056で再度「夫が::一週間-」と発話するが、JSとJAはJYの話題に対する反応を同時に発しており、JMは再度発話を中断する（0.1秒）。その後、JS(1055)とJA(1057)の発話にTRPが確認されたため、すぐに1058で「いや十日ぐらいいたけど」と話を続ける。1059でJSが「あどうしてた::?」とJMの発話に反応したことで、JMは話題の切り替えを達成する。ここで注目したいのは、新たな話題を展開する際、発話の重なりを避けている点である。JMは、発話が重なった際に、一旦発話を中断し、TRPと判断できるポイントで発話を再開している。

表2 日本語会話の展開②

1050 JY:	山小屋みたいなの	[ね
1051 JM:		[山]小屋みた あ……]
1052 JY:		[<risas>
1053 JA:	へえ[::]
1054 JM:	[あ:: [でも私も]	
1055 JS:	[ま:: 雑魚]寝:: だね,	[いわゆるね::]
1056 JM:		[夫が:: 一週間]
1057 JA:		[まあそりゃそうですね::]
1058 JM:	いや十日ぐらいいたけど::	
1059 JS:	あどうしてた::?	
1060 JM:	[大変]	
1061 JS:	[ベッド一つ]でしょ [だって]	
1062 JM:		[そうよ::]
1063 JS:	しか [もあれシング]ルベッド [でしょ::?]	
1064 JM:	[()]	
1065 JM:		[そうよそうよ::] だかそれじゃ寝れないし:: だから- (.)
1066 JM:	1人がベッドで1人がソファ	
	(0.2)	
1067 JM:	でなんか	
1068 JM:	交替にローテーション [に	
1069 JY:		[ああ……::
1070 JA:		[あ:: (はいはい)]
1071 JS:		[ソファってどう?寝]心地は
1072 JM:	ん:: そんなに悪くない [けど(ね)私は]	
1073 JS:		[あ:: そうな] [んだ]
1074 JM:		[でも私はちっ]ちやいけど::
	(0.3)	
1075 JM:	夫のほうがおっきいからたぶ [んあたし::	
1076 JY:		[あ:: でも私は]その<es>[colchoneta]</es>を持つてるのに::
1077 JM:		[うん]
1078 JS:	[今年の- 今度来たらベツ]ドあるよあたしあ [のほい簡易式]ベッドってか開くやつ	
1079 JM:	[そんないいよそんな!]	
1080 JM:		[いいよそんな::]

(5) スペイン語会話の展開

次にスペイン語の会話の展開を確認する。表3の会話に至るまでに、290でEMが「旅行するなら日本のどこに旅行に行きたいか」「日本の何を知りたいか」、という話題を提供する。その後、303でELがあらゆる日本の食べ物を食べてみたいと述べ、312で、「新幹線で食べる」ことに言及する。そこから脱線して電車の話になり、356でEOが京都に言及したことで、「行きたい場所」に話題が戻る。表3はその直後の会話である。

ある話題が提供されたとき、また、話題が切り替わった際に、相手の発話に対するあいづち的発話はほとんど確認されず、各会話参加者は自分のことや自分の持っている情報について挙げて発言し、自分の発話に固執する傾向が複数確認された。表3はその一例である。

表3 スペイン語会話の展開①

357 EO:	que Kioto es como antiguo todo todo samurai y [todo.]
358 EL:	[a:y sí [::]
359 EA:	[yo sí- yo sí quisie]ra [co- e- ir a- ir a Osaka, pero] a comer.
360 EM:	[ay yo (por él) quisiera conocer Kioto.]
361 EO:	u:f. (.)
362 EL:	yo::, [no sé::]
363 EA:	[porque ahí se come bu]eno.=
364 EO:	=yo quiero [ir a::]
365 EA:	[y se come del] todo.
366 EO:	yo quiero ir a- a: [::]
367 EM:	[(qué)] [es ["del todo"?]
368 EA:	[()]
369 EO:	[yo creo que es]
370 EO:	creo que [Yokohama donde- donde es como] un centro grando::te [y venden de todo,
371 EA:	[()]
372 EM:	[<risas>

表4 スペイン語の会話の展開②

→408 EO:	y:: tofu. (1.0)
409 EL:	el tofu sí sabe rico. (0.3)
410 EL:	yo probé una vez y me supo- no me supo a nada. me supo [(un poco como) plas]tilina [insípida].]
411 EO:	[a mí::]
412 EO:	[(sea) ()] el tofu no me sé pero yo sé que- yo sé que:: hay muchas recetas con tofu que dicen que son muy ricas. no sé. (0.7)
413 EO:	[pero como amante de la carne en tofu de::]
414 EL:	[(mejor calentó), o fue algo así.] (1.3)
→415 EA:	(yo empecé) a leer. (0.5)
416 EA:	[(pues) no sé yo- yo] [entré-]
417 EO:	[bueno (que- q-)]
418 EM:	[leer?]
419 EA:	sí, yo:: yo entré aquí es como para leer. (0.6)
420 EL:	[(leer?)]=
421 EO:	[no, leer manga, no?]=
422 EM:	=[e-]
423 EA:	=[no, lee]r ma[n]ga, bueno] [leer manga], [y leer literatura] también.
424 EM:	[no, e-]
425 EM:	[lite-]
426 EM:	[leer literatura.]
427 EM:	porque:: (0.2)
428 EA:	por[que es]
429 EM:	[(el optimi]smo) [ante to::do], porque::
430 EA:	[()]
431 EO:	ah (0.3)
→432 EM:	[a cuántos años uno] tend- tiene que estudiar japonés?
433 EO:	[pues yo-]
434 EO:	pues ()=
435 EM:	=no! =pues de pronto- estudiando así y- (ya no sea vivir en) Japó::n (0.1)

また、相手が何かストーリーを話した後、それに対するリアクションを取らずに、新たなストーリーを提供するケースも散見された。表4はその一例である。矢印の位置で新たな話題が提供されている。提供された新たな話題に対して、それぞれが関連する事柄を発言しようとしている様子が窺える一方で、相手の発話に対する反応よりも発話権の取得の方が優先されている。また、415のような、実際に話されている話題との関連性が低い話題を提示するケースも確認された。

4. まとめと今後の課題

以上、簡単ではあるが、日本語母語話者複数名による日常会話、スペイン語母語話者複数名による日常会話を話者交替の観点から記述・観察した。日本語会話では発話の重なりが非常に多く確認されたが、大部分はあいづちによるものであった。あいづちを用いた、聞き手としての積極的な会話参加が確認された。また、発話権の取得にあたっては、「割り込み」発話を回避する傾向が確認された他、話し手は間や抑揚により TRP を自ら産出し、聞き手の反応を確認しながら会話を展開していた。スペイン語会話では、発話の重なりは聞き手による「割り込み」発話、もしくは話し手による TCU の延長によるものであり、聞き手の反応に、日本語で多用されるようなあいづちはほとんど確認されなかった。また、話題に対して、情報を提供しようとする（言いたいことを発言しようとする）傾向が確認され、相手の発話に対する聞き手としての反応が確認されないケースも複数確認された。

今回はある程度気心の知れた間柄である母語話者複数名による日常会話の1つの事例を比較したのみであり、観察された特徴を日本語会話とスペイン語会話の特徴として一般化することは決してできない。さらに広範かつ詳細な分析が必要であるが、少なくとも先行研究と概ね同様の傾向が観察されているといえるだろう。

言語教育でも特に中級・上級の学習者にとって、今回のような事例比較およびそのデータの活用が外国語運用能力を高めるために不可欠であることは、多くの研究者が主張するところである。今後は分析データを増やし、また他の条件下での複数人会話を観察・比較することでスペイン語・日本語教育における言語資料としての活用を考えていきたい。

【注】

- 1) スペイン人であり日本語母語話者ではないが、母親が日系ブラジル人であること、公立語学学校の教師をしていること等から日本語のレベルは極めて高い。今回の調査では他の会話者との関係性を重視して観察対象に含めた。
- 2) 日本語会話はスペインの公立語学学校の喫茶店で、スペイン語会話はコロンビアの私立大学の教室内で行った。各参加者には事前に日時を設定して集まってもらい、ICレコーダーを用いて録音した。録音中、筆者は席を外し、会話のテーマなど条件は設けず、自由に雑談してもらった。
- 3) 文字化にあたっては、主に以下の表記方法を用いた。

[]	音の重なり
=	発話の密着
(.)	0.2秒以下の短い間
(0.4)	0.2秒よりも長い間音が途絶えている場合は実際の秒数を括弧内に記す。

-
- : 音の引き伸ばし。音の伸びの長さに応じてコロンの数を増やす。
 - 音の途切れ
 - (言葉) 不確定な発話
 - () 聞き取り困難な発話。括弧内のスペースの長さは発話の長さに応じて調整。
 - . (ピリオド) 語尾の音調が下がっている場合
 - , (カンマ) 音が少し上がって弾みがついており、続きがあることを予測させる場合
 - ? (疑問符) 語尾の音が上がっている場合
 - h 呼気音。呼気音が長くなるごとにhの数を増やす。笑いを表す際にも使用。
 - 文(h)字(h) 呼気音が言葉に重ねられている場合には、発話の途中に(h)を挿入する。
 - .h 吸気音。吸気音の長さに応じてhの数を調整する。
 - <es>/</es> 会話中に別の言語（この場合はスペイン語）を用いた場合。

4) ELAN はオランダのマックス・プランク心理言語学研究所が開発した、映像や音声ファイルを再生しながら自由に注釈を書き込むことができるアノテーションツール。Version:6.4 (M1 mac版)を使用した。

5) ターンテイキング（話者交替）システムは、Sacks, Schegloff, Jefferson(1974)によって提唱された、発話の順番取りシステムのことであり、Sacksらによれば、会話における順番交替は会話の基本的な側面であり暗黙のうちに複雑な規則によって達成される。

6) TCUの完結可能な点、すなわちTRPは、あくまで完結しうる点であり、話し手はTCUを延長することもありうるため、必ずそこで完結するとは限らない。

7) ここで述べる発話密度とは、各参加者が発話を開始してから終了するまでの時間の合計が全会話時間に占める割合のことである。

8) Reactive Token (RT)は、他の話者が話している間に、聞き手の役割を果たす者が発する短い発話で、通常は発話権利を取得しない。

9) どこまでをあいづちとするかについては研究者の間でも見解が分かれるところであるが、Clancy et al.の研究のReactive Tokenのうち、Reactive Expressionについては多くの研究者の間であいづちとして認められている。

10) Clancy et al. (1996)は中国語、日本語、英語におけるReactive Token (RT)について研究し、日本語と英語には多く確認され、中国語にはあまり確認されなかったと報告している。

11) 大浜 (2006) , p.46.

【参考文献】

大浜るい子 (2006) 『日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究』, 溪水社.

木暮律子 (2002) 「話者交替における発話の重なり-母語場面と接触場面の会話について-」『日本語科学』11 (2002年4月) 115-134.

高木智世・細田由利・森田笑著(2016) 『会話分析の基礎』, ひつじ書房.

細馬宏通・菊池浩平編 (2019) 『ELAN 入門 -言語学・行動学からメディア研究まで』, ひつじ書房.

Calsamiglia Blancafort, Helena; Tusón Valles, Amparo. 2007. *Las cosas del decir*. 2ª edición. Barcelona: Ariel.

Clancy, Patricia M.; Thompson, Sandra A.; Suzuki, Ryoko; Tao, Hongyin. 1996. "The conversational use of reactive tokens in English, Japanese, and Mandarin." *Journal Pragmatics*, 26, pp.355-387.

Sacks, Harvey; Schegloff, Emanuel A. and Jefferson, Gail. 1974. "A Simplest Systematics for the

Organization of Turn-Taking for Conversation”. *Language*, 50, No.4, Part 1, p.696-735.

Solano, Patricia Guillén. 2010. “EL MANEJO DE LOS TURNOS DE HABLA: APLICACIONES DEL ANÁLISIS DE LA CONVERSACIÓN EN LA ENSEÑANZA DEL ESPAÑOL COMO SEGUNDA LENGUA” *Filología y Lingüística* 36 (2), pp.163-173.

Tannen, Deborah. 1984, 2005. *Conversational Style*. Oxford: Oxford University Press.

【参考ウェブサイト】

ELAN (Version 6.4) [Computer software]. 2022. Nijmegen: Max Planck Institute for Psycholinguistics, The Language Archive. Retrieved from <https://archive.mpi.nl/ta/elan/> (2023年3月28日アクセス)

「現集団」の動態と「コミュニティの品質」の考察

—『ヲシテ文献（ミカサフミ）』のタカマナルアヤと「コミュニティの品質」、そこから「社会政策の基本」と「移民の病理」を読み解く—

森田成男（神道史学会、社会・経済システム学会会員）

はじめに

本稿は、文化的伝統の「霊性のまなざし」などの「普遍なるもの」から、「コミュニティの品質」と、次の時代の「社会・経済システム」をさぐる試みである。権力と富の分配に著しい不均衡が生じている現代社会と移民の病理、戦争経済、サイバー戦争の諸現象を検証していく。

そして、まだすべてのアヤが発見されていない『ミカサフミ』の中の、ひとつのアヤである「タカマナルアヤ」の、私たちの精神文化の故郷（原点）の思惟体系についても整理していく。「コミュニティの品質」の意味には、「霊性」、すなわち森羅万象の中に「顕界・幽界（顕・暗在系）」を感得していたスピリチュアルな伝統社会の安定性の側面の積極的評価が含まれる。

全体的に、以下の7つの章立てで、相互のイシュー間の連関性も読み解いていく。

- 1、蔵内数太の問い、ホモ・ルーデンス、呼吸する民族音楽
- 2、ヲシテ文献が隠れた経緯をさぐる、タカマナルアヤの行数番号 41001～41048
- 3、タカマナルアヤの行数番号 41049～41128 について、日本の環状列石遺跡群
- 4、ダグラス・マレー『西洋の自死』の問題提議、移民の病理現象
- 5、世界史のチェス・ゲーム、グローバリズムの近現代史
- 6、サイバー戦争の実相、戦争経済の不道徳
- 7、「コミュニティの品質」と各国の精神文化体系を守る

読者が内容を検証できるように『記紀原書 ヲシテ 増補版（上下）』（2021）の、原テキストの行数番号を都度記載し、ヲシテ文字に不慣れな方のためルビを付して、（ ）内に大意を簡潔に述べながら、霊性の表現あふれる『ヲシテ文献（ミカサフミ）』の考察をも進めていく。

1. 蔵内数太の問い、ホモ・ルーデンス、呼吸する民族音楽

神戸女学院大学の六車進子は、『蔵内数太の問い』（1991）において、蔵内数太（1896～1988）の現象学的社会学が基底にもつ人間社会の、我と汝の関係を基盤とする「コミュニティ」の奥深さへの洞察を語っている。

「身近で些細な歴史の出来事や平凡な、あるいは体制からはぐれ流動する人々を注視した蔵内は、過去と未来の交差するいま・ここでの危機の問題意識と、新たな発想を常に願っていた。

蔵内に社会学を志させたと繰り返し熱っぽく語っていたこと、中学の頃みた、旭川沿いの料亭から嘲笑こめて投下される残飯を川原で必死に拾い集め口に使っていた一家族の姿、上京した大正 10（1921）年前後の社会・文化の激動、これらが、蔵内社会学が現前化してくる（筆者注：真剣勝負のリアルな学問の）沸騰する現場なのである。

人間を含むあらゆる生きものは、自己の親を選ぶことはできないし、自分の生みおとされる場所を選ぶこともできない。生きる場所の選択ということも、生みおとされた場所に関係をもち、これに制約されることが否定できない。そして社会そのものにも、本質的に、つねに社会の外から働いている力がある。

「運命（命）と自然法則（理）は、社会のかなたから社会を規定している力（超社会的）として社会に内在化され、社会的潮流（勢）と規範（法）は、いずれも社会そのものから生み出される。一方、個別性と一般性の観点から分けると、命と勢は個別的、一回的なものを現わし、理や法は事物や人を一般的に規定している」。

これら「理（自然法則）、法（社会規範）、勢（社会的潮流）、命（運命）」の、四者の働きの緊張関係を孕ませた、歴史・社会現象の「からまりの契機」への深い洞察が蔵内社会学の特徴である。学説史的に「理・法・勢・命」の枠組みは、社会科学のコント、デュルケム、タルド、クルノーの四者によって、とくに強調された四つの観点を包含するものとなっている。

「蔵内には理法への信奉と同時に、それ以上に、普遍を潜り抜け、さらにときの権勢の渦のなかに裸形化してくる、絶対的に特殊なるもの、偶然なるものへの信奉がある」。

わが国の『尤双紙』〔寛永 11（1634）年〕の下巻第二七「おさるゝ物」に、「非理法権天」という、人間社会の核心をついた言辞がある。

「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は権＝勢に勝たず、権勢は天＝命に勝たず」と。つまるところ、どの国の歴史においても、非道を尽くす世俗権力・権勢は永遠ではなく、いずれ自ら分解過程に入り、滅び去ってきたのが歴史の常態であった事実である。

全体社会の各「利益集団」が織りなす流動的な基本構造と、その社会変動の実態を大きくつかまえようとした蔵内数太博士は、教育社会学など多様な分野で、さまざまな学術遺産を遺してくれている。

追手門学院大学の矢谷慈國たちによる、蔵内社会学の主要論文の英訳による海外への一連の発信も、あるいは筆者の 10 年間に越える「現集団」及び「後集団」概念からの、世界の「利益集団」群の生息メカニズムの、天理大学の『アメリカス研究』誌上での一連の論考も蔵内数太博士の深くて広い問題意識の大迫力が、背中を押している故の結果である。〔注 1〕

（領家、1985。六車、1991、127 - 130。矢谷、2004、2006、2007。今井、2006。藤岡、2008、2012。森田、2014、2020。竹村、2017、176 - 199）

一方、オランダのヨハン・ホイジンガ（1872～1945）の、歴史学・民族学・言語学などを総合して考察した『ホモ・ルーデンス』（1938＝1971）は、人間存在の根本的な「生きることの本質」と「遊び」という、失ってはならないところの「ゆとり・精神文化」と、他人に迷惑をかけない「遊びの無垢な崇高性」を教えている。

遊びは文化の中の、単に一部分をなすものではなく、文化そのものが遊びの形式を踏み、その性格を帯びて私たちの精神文化・文明は発展してきた。私たちには気づき難いが、「ゆとり・精神文化」は確実に、5・7調の和歌を含めて、大宇宙の奥深い「霊性」、及び「幽界・暗在系」の彼方の次元へもつながっている。

それだけに、人類の精神的故郷のひとつである、北米と欧州諸国の深い精神文化が、現在のグローバル資本主義エリート層の唯我独尊の強欲と、無秩序な移民政策により、粉々に攪乱・破壊されていくのは、悲しみ以外の何物でもない。しかし、まだ間に合うことができる。

私たちの日常生活には、働くこと、食べること、仲間と楽しいおしゃべりすること、大宇宙の天界からの恵みに感謝することなど、さまざまな局面があるが、とりわけ歌ったり、仲間と楽器を奏でることは至福の時間でもある。

世界の国々の、いろいろな音楽表現を見てみると、必ずしも一オクターブは、十二平均律で分割されてはいない。現実の日本であれば、明治時代以来の、西洋由来の鍵盤楽器やクラシック音楽の普及のみならず、何割かの人々は従来からの伝統的なお箏や、三味線や尺八、謡曲（能楽）、民謡、歌謡曲（演歌）を積極的に味わい、楽器を奏でて楽しんでいる。小泉文夫（1927～1983）が指摘するように、「西洋由来の、一オクターブを十二平均律で分けた、そうした機械的な楽器ですべてまかなってしまうということには、いささかの疑問がある」。

たとえば、アラビアの地域のように二十四分割や、細かく五十数分割してあったり、微少音程などもある。あるいは東南アジアのように五等分平均律、七等分平均律、九等分平均律といったような平均律の例があったりする。あるいは「声明（しょうみょう）」などを含めての、歴史的な音楽のように、ある音は確定しているが、そうした核音以外の音は浮動しているといった、微妙な感覚によって、音楽が支えられている場合もある。

つまり、世界のそれぞれの国ごとが独自に内包する「民族の精神文化」、及び何千年もかけて収斂してきたエートス（独特の精神）に根ざした文化の多様性が、地域ごとに棲み分けながら共存してきたのが人類の歩みであった。伝統文化という時間軸の中で磨かれてきた、民族ごとの異なる精神文化の尊さの存在である。（ホイジンガ、1938=1971。岡田、1995。小泉、2003b、10 - 20。ホーケン、2009。ラモー、1722=2018。伊藤友、2020）

古き良き時代の欧州諸国の、大作曲家たちの名曲の数々はいうまでもなく、それらはそれぞれの国の民族的感性を基盤にした、独自の精神文化を基礎にして生まれたものである。たとえば、ブルガリアやハンガリーなどの古民謡をふくめた民俗音楽の価値の普遍性は、東洋の日本の地においてもずっと深く味わい得てきたものである。

そして、音楽における西洋だけの尺度を疑い、全世界的な視点を求めてインド、アラビア、ペルシア、トルコ、インドネシア他、世界中のほとんどの伝統音楽を巡って記録に遺したのが、小泉文夫その人であった。〔注2〕

生身で日常の生活を営む、普通の人々の口ずさむ歌や、操る伝統的な楽器の奏でから飛び出している心情のエネルギー（自己表現する民族の精神文化）にこそ、普遍的な文明・文化の価値がある。それゆえに、各国の伝承されてきたわらべ歌や子守歌のなかにも、民謡の基本的な

音楽パターンの独自性がみられる。当然に、日本のわらべ歌には、日本語の持つイントネーションと、5・7調のリズムなどが自然にそのまま取り入れられている。

(ホイジンガ、1938=1971。岡田、1995、100 - 112、206。小泉、2003a)

他の国々の精神文化の価値観を認め、その国の精神文化を破壊しないという道徳の原理は、「コミュニティの品質」破壊の、現実をどう回避していくかの重要な問題につながっている。

2. ヲシテ文献が隠れた経緯をさぐる、タカマナルアヤの行数番号 41001~41048

『ヲシテ文献 (ホツマツタエ他)』の原テキストが、国民に広く読まれてきたことで、わが国の建国が、カンヤマトイハワレヒコ (神武) の時代よりもはるかに遡ることがわかってきた。そして、わが国に仏教が入ってきた際の、物部氏などの拒絶の心情と、その受容を巡って混乱した経緯を、日本書紀は欽明、敏達、用明、崇峻などの御代の記述で述べている。

だが、このように物議をかもした仏教渡来よりも一世紀あまり前に、すでに儒教と漢字はわが国に入ってきている。『ヲシテ文献 (ホツマツタエ他)』など、建国以来の伝統の、大宇宙哲学の深遠な体系をもつ皇室の中枢部においては、儒教・漢字の伝来の際にこそ、もっと強烈な反撥があったであろうことが、普通に想像できる。

ところが意外にも、朝鮮半島経由の儒教と漢字の伝来を、「日本書紀はもとより古事記さえ、何事もなく至極スムーズに受け入れてしまったように書いているのである」。だがしかし、「本当は、仏教渡来の時よりも幾層倍かの深刻な軋轢があり、もっと血なまぐさい頑強な闘争が繰り広げられたのではなかったか。もっといえば、そういう事実があったにも関わらず、そのことを記紀は載せなかったのではないか。そんな風にも思えてくる」。

松本善之助たちは、『ヲシテ文献』がやむなく地下に隠れたところの、記紀編纂の約三百年前と推測される歴史的経緯の考究で、このように述べている。

「そしてこの三点 (ホツマツタエ、ミカサフミ、フトマニ) が永い間埋没していた、近江国高島郡内の後掲の水尾神社文書その他をみるに及んで、この疑いを一層深めないではおれなかった。そして、つまるところ、儒教が侵入してきた、まさにその時、ホツマツタエなどの貴書が地下に潜らざるをえなかった時ではなかったか。また、それは同時に、日本固有の古代文字が使われなくなった時期をも意味するのではないか、と考えざるをえなくなったのである」。

応神天皇 15 年の、日本に儒教が入った最初の記事 (百済の阿直岐なる者が経書、典籍をよく読むので、皇子菟道稚郎子 (うじのわきいらつこ) は彼を先生として儒教を教わった。応神天皇はさらに請うて学者の王仁を招く極端な傾倒ぶり) が、あまりに平易にすぎて、とても真実とは信じにくい。まして『ヲシテ文献』によって、縄文時代以来の皇室の中心にあった、高度な精神性があふれる、稀有な基本哲学が公になった今日、それはありえないと考えられている。

実際に、日本書紀も古事記も同様に、その後の時代の四人の皇子間の不和と殺戮の様子を、多くの枚数を費やし、二人の皇子はあえない最期を遂げるという筋書きを記している。

「本当は、一方のホツマを守ろうとする国粹派の二人の皇子が、外来文化を入れようとする儒教派の他の二人の皇子によって殺戮、または敗北させられたと考えられる。その四皇子とは次の如くである。国粹派①大山守（おおやまもり）命②隼総別（はやふさわけ）命。儒教派③菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）皇子④大鷦鷯（仁徳天皇）。記紀に載るこれら四皇子に関する記述は、前に見た記述と同じく記紀の原資料から継受した内容であったろう。「菟道稚郎子（うじのわきいらつこ）の母は帰化人の娘だし、大山守の母は、おかしなことに記紀ともに12代景行天皇の媛と同名なのだ」。

記紀では継体天皇の祖は、稚渟毛二派（わかぬけふたまた）皇子とあるが、出典は『上宮記』に限られている。しかし、隼総別命を継体の祖とする史書は、次のように多数ある。

「①和解三尾大明神本土記（808）、②皇代記（1274頃）、③日本皇帝系図（1308頃）、④水鏡（1330頃）、⑤神皇正統録（1330頃）、⑥神皇正統記（1339）、⑦神明鏡（1430）、⑧和漢年契（1796）などである」。なお、宮下古文書とか富士古文書とかいわれるものがあり、「その中に大山守、隼総別など三皇子が富士山に拠ったとあるが、この点のみは他の記述を別にして注目される」。 （松本、1980、1993、148 - 159）

さらに、景行天皇や仲哀天皇の御代の「伊勢斎王」以来、雄略天皇及び継体天皇の皇女まで、ミツエシロ（伊勢斎王）の記述が長く途切れている（鎌倉時代末期の『二所太神宮例文』や『一代要記』の記録）ことも、この当時に『ヲシテ文献』が隠れた事情と辻褃があっている。

ところで、『ミカサフミ』については、和仁佑安聡が記したとみられる『生州問答』（1779）に、もともと全部で六十四アヤあったと記載されている。現在、私たちが入手できているのは、和仁佑安聡が遺してくれた八アヤにすぎない。

すなわち、①「キツ（東西南北）ヨヂ（四至締）ノアヤ」、②「サカノリノアヤ」、③「ヒメミヲ（イサナギ・イサナミの子供たちの一女三男）ノアヤ」、④「コエソフノキサキタツアヤ」、⑤「ハルミヤ（皇太子・のちにアマカミを継ぐオシホミミ）ノアヤ」、⑥「タカマナルアヤ」、⑦「ナメコト（年中行事）ノアヤ」、⑧「ハニマツリ（古代の地鎮祭）ノアヤ」である。

そして、僧の溥泉（ふせん、安永年間に生存）が記述した『春日山紀（かすがやまのふみ）』や『朝日神紀（あさひのかみのふみ）』などから、七アヤ分の各題名が窺い知れている。

『ヲシテ文献』考究 50年の池田満（神道史学会会員）によれば、以前に『ミカサフミ』に含めていた『トシウチニナスコトのアヤ』は、『カクノフミ』としての認識が望ましいことが判明したので、現在、『ミカサフミ』の一覧目録からは外れている。

したがって、『カクノミハタ（カクノフミ）』で私たちが現在手にしているのは、文献名「アワウタのアヤ」（行数番号 53001～53248）と、「トシウチニナスコトのアヤ」（行数番号 55001～55096）、及び『フトマニ』128首の和歌（卦）の体系（行数番号 57001～57669）になる。

参考に、2012年末に、山梨県の旧家の屋根裏で発見されたヲシテ文字の写本は、溥泉伝本の『和歌字咥紀』のことで、『カクノミハタ アワウタのアヤ』であった。これにより、「フトマニの図（モトアケ）」の構造の、深い意味内容がより明らかになったのである。

（和仁佑、1779。池田、2013、208 - 216。内藤、2019。池田、2020。茂木&原田、2023）

そして、このヲシテ文字での5・7調の、「タカマナルアヤ」の叙述で驚かされるのは、この縄文時代に、私たちの住む大地が、経験的に大きな球状のものであろうことが把握されていたことで、大宇宙における「クニタマ（地球）」の運行、及び大自然の諸現象の解釈や、長さの単位などが詠われている。ヲシテ文字の原テキストは、漢字伝来以前の原初ヤマトコトバが行き交う《言語空間》である。それに無頓着な漢字仮名交じりの直訳は、偽の物語の危険がある。概念が微妙なヲシテの語彙は、厳密にわざとカタカナ表記としている理由をご理解頂きたい。

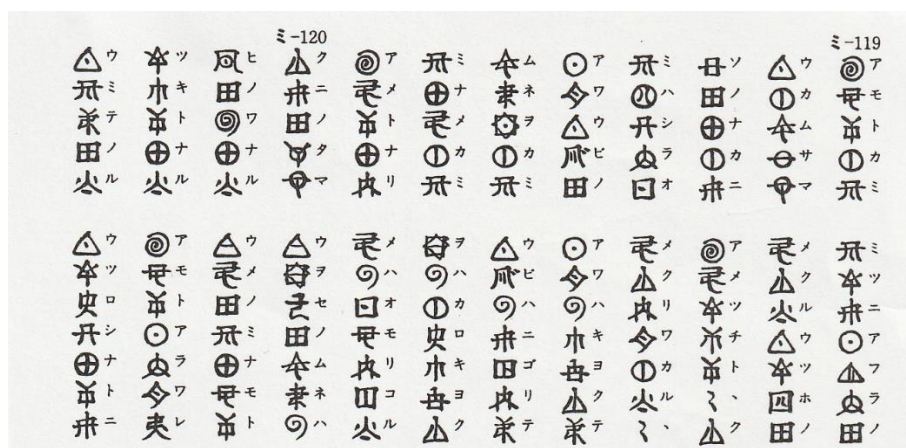
さらに、西欧文明における一神教との混同を避けるため、現代語での解釈において原則としてカミと表記している。まずはヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、最初の部分の行数番号41001~41012を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(ヤマクイの タカマ (宮中の別名をタカマとも言う) を乞えば 草なぎて コホシ (九星) をまつる ユキ (悠紀) のミヤ アメトコタチ (アモトとトホカミエヒタメ) と スキ (主基) トノ (殿) に ウマシアシガイ ヒコチカミ (キツヲサネ (東西央南北) とアミヤシノウの十一のカミ) 合わせ祀れば (大嘗祭の悠紀宮と主基宮の意味) 名もタカマ モロ (諸) 集まりて 故乞えば キミ (アマテルカミ) サホヒコに ミコトノリ これタマキネ (トヨケカミのイミナ (実名)) に ワレ聴くは アメツチ (天地) いまだ 成らざるに アメ (天) のミヲヤ (御祖) の ナス (生す) イキ (呼吸) は キワ (際) 無く動く。

この箇所では、コホシ (天空の九つの星・モトアケ (フトマニの図) の中央のアウワとトホカミエヒタメを指す) をアメトコタチとしてまつるユキ (悠紀) ミヤ、ウマシアシガイヒコチカミとしてまつるスキ (主基) トノ (殿) という、現代日本の皇室へ伝承されている大嘗祭の神事が述べられている。『アメリカス研究 26号』(2021) の拙論で詳述したように、『ホツマツタエ』の27アヤなどでも「悠紀宮、主基宮でのナメエ (大嘗祭)」が詠われている。

次に、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、続く行数番号41013~41024を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(アモト (天元) カミ (神) 水に油の 浮かむサマ (様) 巡るウツホ (空) の 中に アメツチ (天地) 届く ミハシラ (御柱) を 巡り分かるる アワウビ (原初の軽いもの重いもの) の アワ (原初の軽いもの) は清くて ムネ (根本の) ヲカミ (ヲのはたらき) ウビは濁りて ミナ (水) メカミ (メのはたらき) ヲ (陽) は軽ろ清く アメ (天) と成りメ (陰) はオモリ (重り) コル (凝る) クニノタマ (地球) ウラセ (大元のヲ) のムネ (根本) は ヒノワ (日の輪) なる ウメ (大元のメ) のミナモト (源) 月となる アモト (天元) あらわれ 生みてのる ウツロ (空) シナトに)。

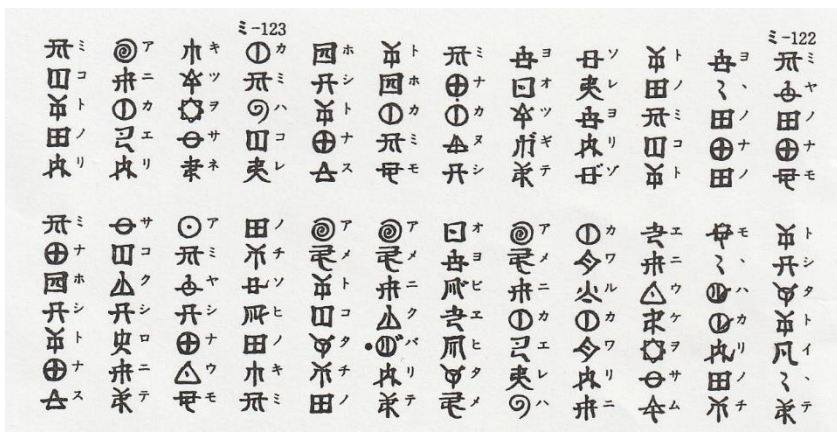
続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号 41025～41036 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(ハ (地) を巡り アリサマ (有り様) なせば 月の水 海とたたえて ヒ (日) に 生める ウツホ (空) 動きて カセ (風) となる カセ (風) ホ (火) となれば ツチ (土・埴) もまた ミヅハニ (水と埴) となる このキツツ (五つつ) 交わり成れる カンヒト (初期の人) は アウワ (天・人・地) あらわる ミナカヌシ クニタマ (地球) ヤモ (八方) に ヨロコ (万の子孫たち) 生み 初にヲウミ (今の琵琶湖沿岸地方) の エト (兄弟) の子の エミコ (兄御子) ア (初代アマカミのクニトコタチ) に継ぎ ヲウミ (今の琵琶湖沿岸地方) タス (治める) オトミコ (弟御子) の住む トシタ (富士山南麓の古いミヤ) ミヤ これ今ハ

ラ（富士山南麓のミヤ）のナ（名）の）。

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号 41037～41048 を、下にそのまま記して解釈していく。尚、右側に黒のポイントの付くヲシテ文字は、元写本の虫食いで判別困難な中での文字である。



大意は、（ミヤ（宮）の名も トシタ（富士山南麓のミヤ：今はハラのみヤであるが古くにはトシタと呼んでいた））と書いて 世々の名の モモハカリ（100×10 万年：ハカリ（マス）とは 10 万の位を指す概念）後 ト（弟）のミコト（命）は エ（兄）に受けヲサム（治める）それよりぞ 代わる代わりに 世を継ぎて アメ（天）に帰れば ミナカヌシ 及びエヒタメトホカミも アメ（天）に配りて 星となす アメトコタチの カミはこれ のちソヒ（十一）のキミの キツヲサネ アミヤシナウも ア（天）にカエリ（還えり） サコクシロにて ミコトノリ 皆星となす）。

（池田、2012、61 - 64。池田・辻、2021b、507 - 512）

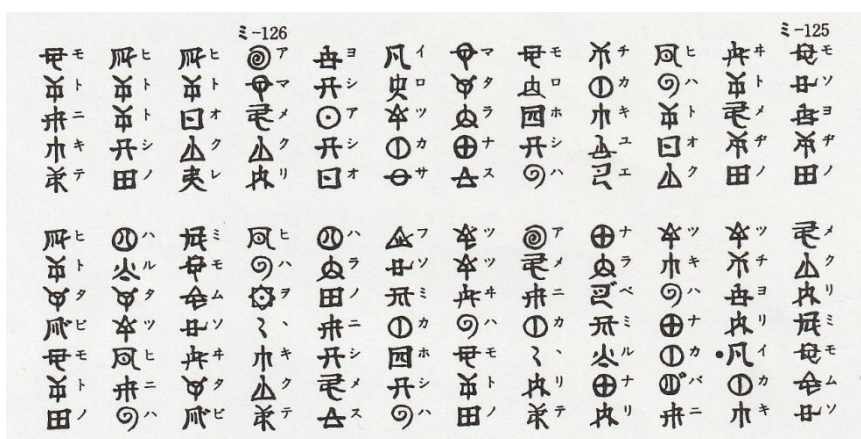
3. タカマナルアヤの行数番号 41049～41128、日本の環状列石遺跡群

続いて「タカマナルアヤ」の行数番号 41049～41060 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(このカミは ハラワタ (臓腑) イノチ (生命) ミケ (御食) をモル (守る) ウマシアシカイ ヒコヂカミ かれアメミコ (天御子) と ワ (地・埴) のミコ (御子) と クニトコタチ の ナヨ (七代) のカミ 皆サコクシロ よりの星 ア (天) に現わるる ヒ (日・太陽) のワタリ (径・直径) モモキソ (百五十) トメヂ (長さの単位) 月のホド (程・径) ナソ (七十) トメチ内 ヒ (太陽) の巡り ナカフシ (中節) のト (外) の 赤き道 ヤヨロ (八万) トメチの 月を去る 月の白道 ヨヨ (四万) ギ (トメチ) 内 クニタマ (地球) ワタリ (径) は)。

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号 41061~41072 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(モソヨ (百十四) ギ (トメチ) の メグリ (周り) ミモムソ (三百六十) キ (五) トメヂの 月より近き 日は遠く 月はナカバニ (半ばに) 近きゆえ 並べ見るなり モロホシ (諸々の星) は アメ (天) にかかりて マダラ (斑) なす ツツキ (五惑星) は元の 色ツカサ (司・物理的運動の主体) フソミカ (二十三日) 星は ヨシアシ (吉兆) を ハラノ (原野・現象世界) に示す アマ (天) 巡り 日は大きくて ヒトオクレ (一遅れ) ミモムソキ (三百六十五) タビ (度・回) ヒトトシ (一年) の ハルタツヒ (春分に立つ日) には元に来て ヒトタビ (一度) 元の)。

この箇所朗詠では、クニタマ (地球) の直径は、モソヨ (114) トメヂ、周囲長さは 365 トメヂで、およそ 365 日でヒトトシ (1年) である、と述べている。ハルタツヒ (春分) の概念が、すでにこの当時の天文観測から知られていたことがわかる。

いまから約 4000 年から 3500 年前とされる環状列石の遺跡が、東京都町田市の田端遺跡や青森県小牧野遺跡、秋田県の大湯 (おおゆ) を始め、日本列島の各地で発見されている。参考に、北海道小樽市塩谷町忍路 (おしよろ) の遺構は、大きな長い石を立てており、長径約 28m を有している。田端遺跡の環状積石遺構は、丹沢の最高峰蛭ヶ岳 (ひるがたけ) の山頂に冬至の日没を見る位置に築かれており、立石を伴う配石が長楕円形に連なったものである。

一般的に、人々はなぜ川から 8500 個以上もの岩石を、遠くまで運んで環状列石の施設を形作ったのか。縄文時代中期には、すでに天体観測を行えるに足る算術知識を有していたことが

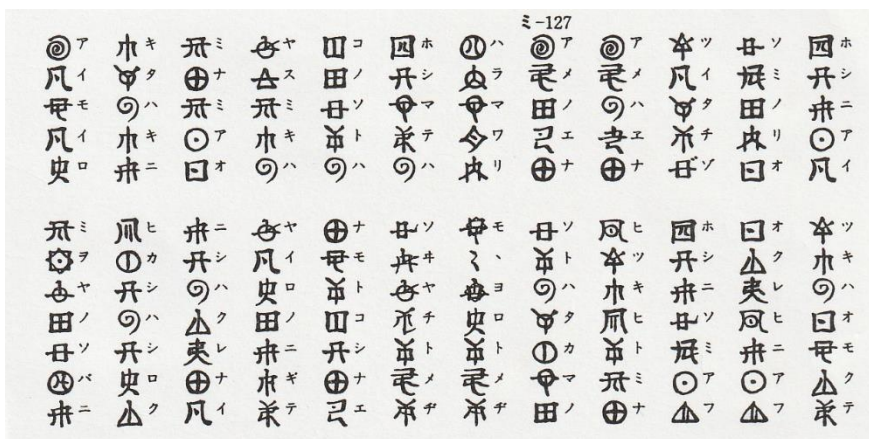
推測されてきている。

しかも、大湯環状列石の岩石配置のなかに、聖山を指す石組みがみられることから、太陽軌道の特異点(二至二分)や天体観測の目印など、さまざまな観点からの検証が試みられている。

たとえば岐阜県中津川市の、一連の方位型巨石群の調査により、古代の人々が北極星や二至二分の太陽観測から、東西南北という方位の4方向の目印としていたことがわかってきている。おそらく天体観測が行われていたのであろう、これらの環状列石遺跡群と、「タカマナルアヤ」などの叙述内容との関連性が、近年とくに注目されてきている。

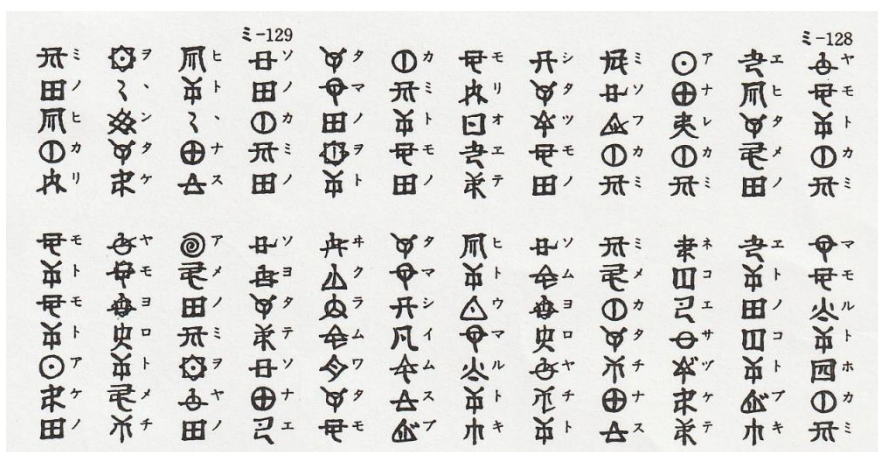
(斎藤、1975、35 - 36。羽根田、1976。秋元、2005。田中・佐原、2011、177 - 179。中村、2013。御所野縄文博物館、2019。柳原、2021、11 - 19。平津、2021。小林、2021、20 - 26)

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号41073~41084を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(星に合い 月は重くて ソミノリ (十三の日程) を 遅れ日に合う ツイタチ (朔日・一日) ぞ 星にソミ (十三) 会う アメ (天・宇宙) はエナ (胞衣) ヒツキ (日月) ヒト (人) 皆 アメ (天・宇宙) のエナ (胞衣) 外はタカマの ハラ (原・大宇宙) 回り モモヨロ (百万) トメヂ 星までは ソキヤチ (十五万八千) トメヂ この外は 名もトコシナエ (永久・永遠) ヤスミ (八隅) キハ (際) ヤイロ (八色) のニギテ (和幣) 南アオ (青) 西はクレナイ (紅) 北は黄に 東は白く アイモイロ (間も色) ミヲヤ (御祖) の側に)。

月は重いためにその周りは遅く、1年で12に余り、13回太陽にめぐり逢い、ヒツキ(日月)ヒト(人)にもこの周期は及んでいる。さらに、タカマのハラ(大宇宙)の周囲長さ100万トメヂを円周率で割り、さらに2で割り地球の半径の58トメヂを引くと、この「タカマナルアヤ」が詠う通りに、星までがおおよそソキヤチ(15万8千)トメヂとなり、算術上の数字が合致してくる事実である。続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、行数番号41085~41096を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(ヤモトカミ (八元のはたらき) 守るトホカミ エヒタメの エト (兄弟) のコト
 ブキ (寿き) アナレカミ ネコエ (音声) さづけて ミソフ (三十二) カミ 見目かたち (人
 体) 成す シタツモノ (下つ物) ソムヨロヤチ (十六万八千) と 守りを得て 人生まる時
 カミ (形而上のもの) と物 (物質) タマシイ (タマ・シキ) 結ぶ タマのヲ (緒) と キク
 ラムワタも そのカミ (はたらき) の ソヨ (十四) 経て備え 人となす アメ (天) のミヲ
 ヤ (御祖) の ヲヲンタケ (大御丈) ヤモヨロ (八百万) トメチ 身の光 元々明けの)。

拙論の『『ホツマツタエ』の 34、38、39、40 アヤ及び『フトマニ』のウタの考察』と、「住
 吉大社神代記、皇太神宮儀式帳、ヲシテ文献 (フトマニ他) の、相互関連性をさぐる」にて、
 128 首の占いの和歌 (卦) の解釈でふれた、重要なミソフ (三十二) カミの大宇宙哲学が、こ
 の『ミカサフミ』の「タカマナルアヤ」にも出ているのである。

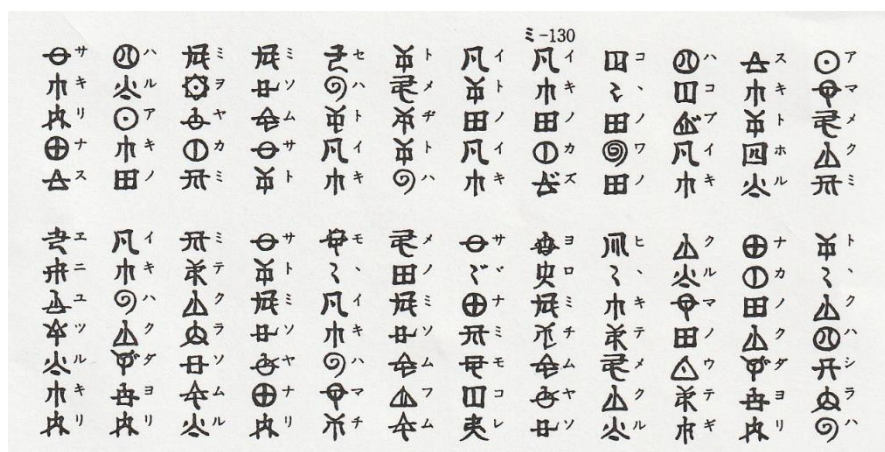
(池田、2012、65 - 68。池田・辻、2021b、513 - 518。森田、2023b、c。茂木&原田、2023)

ところで日本のみならず、煮炊きに使われた痕跡がある縄文土器が、世界の各地で出土して
 きている。縄文時代前期において海面は今より低く、日本列島周辺の環太平洋沿岸地域の間で
 活発な交流があったことが推定されている。煮炊き用の土器という道具が、生活様式の根本を
 変え、食糧の安定供給から人口の増大をもたらしてきた。

そして、青森県の大平山元 (おおだいやまもと) 遺跡からは、旧石器時代の石器と一緒に食
 べ物の焦げのついた、16500 年前の世界最古の土器が出土している。

重要なことは、考古学による古代史探求の世界に、縄文時代前期中葉にまでさかのぼる、『ヲ
 シテ文献 (ホツマツタエ、ミカサフミ、フトマニ他)』という文献史料の出現が、当時の実生活
 の具体的様態の解明を進ませてきている、最先端の学問状況である。

そして、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の原テキストの、続きの行数番号 41097
 ~41108 を、下にそのまま記して解釈していく。



大意は、(アマ (天) 恵み 届く柱は 透き徹る ナカ (大宇宙の中心) の管より 運ぶイキ (息・呼吸) 車のウテギ (腕木) ココノ (九九の) 輪の 響きて巡る イキの数 ヨロミチムヤソ (万三千六百八十、参考に $0.801 \times 13680 = 10.958$ km) イトのイキ ササナミ (さざ波の長さ) もこれ トメヂとは メ (陰) のミソム (三十六) 踏むこと (そもその長さの根本の単位は女性の 36 歩の長さから始まるの意か) (そして) セ (畦) はトイキ (イキの十倍の単位) で モモイキ (イキの百倍の単位) はマチ (町) ミソム (1 マチの三十六倍が) サト (里) サト (里の) ミソヤ (三十八倍) なり ミヲヤ (御祖) カミ ミテグラ (幣) 染むる 春秋の イキはクダ (管・天に向けた柱) より サキリ (ヒヨ・一陽) なす エ (兄) にゆづる霧)。

因みに、現代に知られている地球の赤道周囲の長さは 40070.4 km である。このタカマナルアヤで詠われる、この長さの単位 (クニタマ周囲約 40000 km の前提から) の近似値を試算すれば、1 トメヂ 109.59 km (1 サトの 38 倍)、1 サト 2.884 km (1 マチの 36 倍) などと推定でき、部分的に、後世の尺貫法における 36 町で 1 里と称するのと合致している事実である。

イキは、現代日本語の、空間の範囲を仕切る「域・閾値」の概念につながっていると見ることできる。トメヂやサトとは、クニタマ周囲 $40000 \div 365 = 109.589$ km $\div 38 = 2.8839$ km であり、一連の叙述がトメヂやサトを説明している。はるかに時代が降った後において、これら『ヲシテ文献』が詠う長さの単位の、メ、セ、イキ、マチ (町)、サト (里) の原型の考え方・概念が、漢字文献へとつながっている、連続性の側面を読み取ることができるのではなからうか。

そして考古学の事実として、たとえば秋田県の大湯環状列石では、高さ 5 メートルの太い柱が六本も並んでいた。それは建物の支柱ではなくて、ただ突っ立てていただけのようである。しかもその配置は、三本と三本の形になっていた。大湯では、野中堂と万座の 2 基の環状列石の、それぞれ北西部にある日時計型組石を結ぶ線の延長上に夏至の日没が当たるように設計されている。

日本天文学考古学会の柳原輝明は「遺跡大湯環状列石の天体観測」において、日時計状組石の役割りや、二列の木柱列の位置と特定の星の観測の可能性が考えられ、「二列の木柱列が全天で最も明るい星シリウスを 10 月の初めの夜明けに観察していた。その日は縄文人にとって、最

も重要な食料である栗の収穫時期である。これらのことから、遺跡大湯環状列石は間違いなく太陽と星の天体観測の場であったと言える」と指摘している。

また、青森県の三内丸山遺跡においても、巨大な栗の樹の柱が六本、サイコロの「六の目」のような形で並び、中心間の距離はすべておよそ4.2メートルにそろっていたのである。

さらに、考古学者の小林達雄は『縄文人追跡』（2000）において、むき出しの柱だけが天を衝いて立っていたらと強く主張している。天空に向かって柱を立てることを、重要な祭祀・神事とする慣習は、いまも全国各地に多く存在している。長野県諏訪湖畔に鎮座する諏訪大社（上社本宮、同前宮、下社春宮、同秋宮の総称）で、七年ごとに行われる御柱祭は、その代表例である。

佐賀県吉野ヶ里遺跡の北墳丘墓からも、弥生時代の大型甕棺 14 基が出土し、そこは集落のリーダーたちを葬った祭壇の場所と見られ、復元されている。その南隣には、高さ7メートルの一本柱が天空に向かって立っている。

また、同じ佐賀県鳥栖市の柚比本村（ゆびほんむら）遺跡でも、同じような状況の一本柱の跡が確認されている。縄文・弥生時代においては、カミのヨリシロ（依代）として、天空に向けて御柱（クダ・管）を立てるということが、大切な神事であったということが了解できよう。

（池田、1993、104 - 107。中村、2012。平津、2021。柳原、2021、11 - 19）

続いて、原テキストの行数番号 41109～41120 を、下にそのまま記して解釈していく。



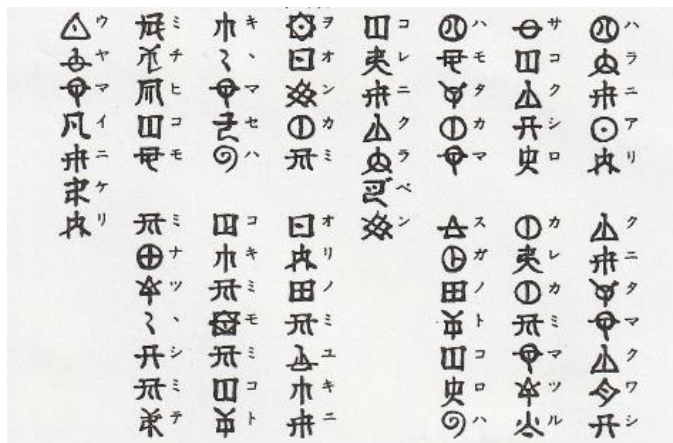
大意は、(日を招き 冬ヒヲ (一陽) を返す ト (弟) は夏に 月のメ (陰) 返す 春秋ぞ アメ (天) ゆづる日は ア (天) のサキリ (ヒヲ・一陽) クニゆづる月 ハ (植・地) のサキリ (ヒヲ・一陽) てればタタユル (称ゆる) ミナカヌシ アキリ (天霧) に乗りて ヤモ (八方) に行き 日月の道を ゆづりハ (地) に アガタのカミの イロ国と 名づけア (天) の道 ハ (地) の道も 葦のごとくに 立つゆえに ヨソコ (四十九) のカミは ア (天) に 還り 元のタカマの)。

ヨソコ (49) のカミとは、モトアケ (フトマニの図) を指している。古事記などにも出てくる ミナカヌシ (アメナカヌシ) が、この「タカマナルアヤ」にも出てくる。天地開闢が起きてから、初めて出現したヒト (人) をミナカヌシと尊称し、アマカミの初代となったクニトコタ

チは、ミナカヌシ出現から幾世代もの長い年月を経た後であった。

(池田、2020、118)

続いて、ヲシテ文字で記された「タカマナルアヤ」の最後の部分の、行数番号 41121～41128 を下にそのまま記して解釈する。このアヤを 11 に分割して、全体を解説してきたわけである。



大意は、(ハラ (大宇宙の中心) に在り クニタマ (地球) クワシ (精し) サコクシロ カレ (故) カミ (アメトコタチとウマシアシガイヒコチ) 祀る ハ (地・宮中のカシコトコロ) もタカマ スガノ (清の) 所は これに比べん ヲロンカミ (8代アマカミ・アマテルの尊称) 折のミユキ (行幸) に 聞きませば コ (九) キミ (君) モ (百) ミコ (御子) と ミチヒコ (三千彦) も 皆謹みて 敬いにけり)。

(池田、2012、69 - 71。池田・辻、2021b、519 - 522)

以上のように、『ヲシテ文献』の朗詠は、全体的に、「人間存在」それ自身の始原への問い、人類普遍のスピリチュアルな在り方と、森羅万象の中に「顕界・幽界 (顕・暗在系)」が共に生きて存在していることを詠っている。

たとえば後世の、わが国の伝統的な神社仏閣の「寺子屋」は、単に読み書き・ソロバンの基礎知識を与えるのみならず、親孝行や家族のきずなの大切さや、平凡な日常生活のなかに神秘的で大切なもの (暗在系) を深く感知するウタ (和歌・俳句・詩) の直観能力をも養ってきた。

今読んできた『ミカサフミ』や、拙論でふれた『フトマニ』の 128 首の和歌 (卦) も、大宇宙を構成する「顕界・幽界 (顕・暗在系)」への深い感性から、「現象世界」の出来事を捉えており、その清明の思惟が、人間社会の「コミュニティの品質」につながっている側面がある。

次の章では、各国における不法移民などによる、「伝統的精神文化」と、その「コミュニティの品質」への影響、及びわが国の治安についての問題点を深く掘り下げて考えていく。

4. ダグラス・マレー『西洋の自死』の問題提議、移民の病理現象

2000 年以降の、今日のアムステルダムやロッテルダムの郊外にある、多くの地区には、さまざまな「ミニ・トルコ」や「ミニ・モロッコ」が存在する。食料品店ではイスラム教の戒律に

副った商品が売られ、女性たちは皆、何らかの形で髪を覆っている。

ダグラス・マレーによれば、欧州は移民の滞在を許すことだけではなく、自分の国の富を食い物にする、不法入国者を支援することでも世界の先頭を走っているようだ。

ドイツのメルケル首相は、この当時の 2015 年 9 月に、スイスのベルン大学から名誉博士号を授与されている。その際の聴衆との質疑応答で、同年配の女性から、先ほど首相は難民に対する欧州人の責任について語りましたが、他の欧州人の幸福を守るという欧州人への責任についてはどうなのでしょう？

首相は殺到する移民たちから、どうやって欧州人と欧州諸国が大切にしてきた伝統文化をまもるのですかと、根本的に重要なことを問われていた。

ベルギーの調査機関が、同国の国籍を持つテロ犯について調査したところ、その多くが国家による援助を受けながらテロ計画を練っていたことが判明した。

たとえば、「2015 年 11 月のパリ同時テロの首謀者であるサラ・アブデスラムは、テロに先立つ期間に 1 万 9 千ユーロもの失業手当を受け取っていた。最後の支給日は事件のわずか数週間前だ。かくして欧州は人にカネを払って自分たちを襲わせた史上初めての社会になった」。

ではなぜ、ダボス会議を中心とする多くのグローバリストたちは、「コミュニティの品質破壊」の移民政策をそこまで強行に推進するのだろうか。

ダボスの「世界経済フォーラム」に集まるビジネスエリート、官僚エリートそして政治エリートたちは、すでによく知っている者同士である。

表向きはロビイストや、日本の「経団連」のような機関を使って、大量の移民や難民が経済成長に必要であると主張する。つまり実態は、先進国の人件費が高すぎるから、安い労働力が必要だということで、要するに、海外に展開するグローバル企業の、おカネ儲けが単純な動機だと指摘されている。

現在の欧州の緊迫した状況を見れば、社会にどうしても同化しないマイノリティの大規模な集団がいることで、国民の間に不安が広がり、各種のトラブルが多発していることがわかる。

日本では、かつてのK政権と財務省の政策判断ミスによる「失われた 30 年」の結果、日本経済の人件費は現在、世界最低水準となるまで国民の生活が痛めつけられた状態である。高度な職業倫理をもつ日本国民を、不当に低賃金で抑えつけながら、共生する意志の不確かな不法滞在者を毅然と国外退去させない、経済団体、地方自治体及び国の不作為の責任は大きい。

例えばシンガポールでは、低技能のサービス労働者を受け入れている企業は、短期ビザのために労働者の月給の 2 割から 3 割の税金を政府に毎月払っている。つまり、移民がもたらす利益がきちんと国民に均等に分配されるように、移民政策は目的税と助成金を盛り込むべきなのだ。

「外国人材」の皆さんは、言語、宗教、文化、生活習慣といった属性を持った方々であり、取り替え可能なロボットのような存在ではない。むしろ、ひとつ間違えば欧州諸国であった 2010 年以降の暴動のように、歴史的に構築してきた「コミュニティの品質」と、神社仏閣の靈性の文化フィールドを一夜にして破壊してしまう側面をもっている。

しかも、『移民の政治経済学』（2017）のジョージ・ボージャスたちは、移民受け入れによって主に得するのはグローバル企業家たちであり、経済的に損をするのが国内労働者（国民）である。移民が惹き起こす文化的・社会的な軋轢の影響も、トータルに考慮すれば、その移民政策の経済効果は容易に「マイナス」になり得ることも示唆している。これは、やりたい放題のグローバリゼーション、新自由主義と、日本国民が今後どう対峙していくかの問題にもつながっている。

したがって焦眉の急として、日本においては、国民各層の賃金を今後引き上げていくことこそが現在の最優先の国民の課題であり、安易な「移民の導入」に反対という世論が、高まっているのは当然のことであろう。

実際、2023年度の『経済財政白書』も、「サービスを中心に物価上昇率が低い品目が多く、経済成長の足かせとなるデフレから脱却したといえる状況に至っていない」。「人件費を製品やサービスの価格に転嫁するなどして、物価と賃金がそろって上昇する好循環を生み出すことが課題」、と訴えている。（ボージャス、2017、208 - 220。マレー、2018。浜崎、2018。川口マーン、2018。施・黒宮・柴山・川端、2019。室伏、2019a、b）

トラック、バス、タクシーの運転手不足では、安易に新たに外国人労働者を入れるのではなく、海外からすでに来ておられる方々を含め、就職氷河期の40代、50代の、現在低賃金に甘んじているところの、引きこもりがちではあるが労働意欲のある約500万人強の方々にこそ、もっと高い給与で働く場を与えるのが優先順位である。つまり、運転手不足は、日本の就業構造の再編成による賃上げと、国内経済の底上げの大チャンスなのである。

2000年代以前の日本経済では、消費税率を5%に引き上げるまでは、実質賃金は上昇して活発な景況が続いていた。

「ところが、消費税率を5%に上げた途端に実質賃金の下落が始まった。日本経済がデフレに転落したからだ。消費税率を上げると、その分だけ実質所得が減少する。そうなる消費関連の企業の売り上げが落ちるから、リストラをしたり、賃金の低い非正規社員に置き換えたりして、人件費を削る。そうすると、また所得が落ちて、消費が減少するという悪循環に陥るのだ。それは2014年に消費税率を8%に引き上げたときも、2019年に10%に引き上げたときにも起きた」。

国柄が《新自由主義》の株価至上主義に洗脳され、主に外国の株主と経営者たちを富ませた反面、ここ30年間割を食ってきたのが、汗して働く真面目な国内の従業員たちである。自公政権によって国民の給料は上がらず、海外を豊かにする方ばかりに国民のおカネが回されて来た。そして、ウォール街が日本から収奪するシステムが、今は同時に、中国が日本を買収しやすいシステムとして機能してしまっている。それが今の危機的な局面である。

すでに若年層を中心の、年収200万円以下のワーキング・プアーの人々は、わが国で1100万人以上にも達している。景気の好循環を破壊し、国民を生活苦に痛めつけ、日本経済の浮揚を抑え続けているのが、財務省（自公政権）がセットした、弱者に犠牲を強いる「消費税」だ。

森永卓郎など多数のエコノミストが指摘するように、確実に景気が浮揚するように「消費税」

を軽減して、国策として非正規労働者の労賃を主体に、日本の全事業所において物価と賃金がバランスよく上昇する好循環を目指していかねばならない。

(中野、2019、2022。菊池、2020。藤井、2022a、2022b。平井、2022。藤井&森井、2022。馬淵&松田、2022、116 - 119。西田、2023b。森永卓、2023、92 - 106)

ところで不法滞在の移民でさえも、「米国の民主党のネオコンと強欲のグローバリストたちにとっては、安い労賃の人々であり、自分たち民主党に投票させる大票田として大きな役割があると言われている」。

実際に、バイデンが大統領になって最初に行った政策が、メキシコ国境の全面解放だった。過剰どころではないところの、中南米や中国からの大量の不法移民を受け入れている現実である。その数は、バイデン政権開始から2年弱で、すでに400万人以上。1日平均1万8千人が入国したと報じられている。

(山中、2022。及川、2022。我那覇&山中、2023。西森、2023)

当然に、「不法移民の中には、凶悪な犯罪者、麻薬業者、人身売買業者が含まれている。フェンタニルという鎮静剤に使われる麻薬が業者によって広まり、薬物の過剰摂取で死亡した米国人が、1日あたり約250人、1時間あたり約11人も死亡している。そんな状況にもかかわらず、民主党上院リーダーであるチャック・シューマー上院議員は、米国内にいる1100万人以上の不法移民に恩赦を与えることを主張。恩赦とは市民権を与えることだ」。

「これに対して立ち上がったのが、テキサス州のグレッグ・アボット州知事(共和党)。アボット知事は、合衆国憲法とテキサス州憲法にある「侵略条項」を発動。大量の不法移民は、単なる移民受け入れではなく、「侵略」である。侵略に対しての防衛として、州兵を配備し、侵略者である不法移民を逮捕するとした」。

つまり、米国のネオコンとグローバリストたちは今、不法移民を大量に入れることで、彼らの投票により、民主党が大統領職を永久に取れる体制づくりを狙っていると言われている。

その意味で、EU(欧州連合)もまた、いま目に見える「グローバリズムが伝統社会を破壊する」大混乱の真っ最中にある。欧州では伝統的文化をもった27の国の上に、上部組織の欧州政府をつくり、単一の欧州市場をつくった。EUは各国の上の存在として、独自の政策(シェンゲン協定他)を実施してきた。

そのために、欧州諸国の歴史的な伝統文化や宗教的背景とは無縁な人々であっても、入りきれないほど大量の移民受け入れを推奨してきた。

そうして、本来はキリスト教圏の欧州に、大量のイスラム教徒がなだれ込んだ。その結果、労働単価の安い中東からの移民が、生まれつきに住んでいる欧州人たちから雇用を奪い続けてきた。しかも、各国の医療保険や生活保護など、欧州人が爪に灯をともしてコツコツと積み立ててきたおカネが、自由に使われるようになったのである。

ダグラス・マレーが描き出すのは、まさしく移民社会の荒廃した地獄絵の現実である。「そこで提示される風景は、移民によってもたらされる貧困と失業、移民によるユダヤ人の襲撃、強姦、女子割礼、少女の人身売買と頻発するテロ。ヨーロッパの文化的アイデンティティの崩壊

と、それに対する極右の台頭など、この先の日本においても予想され得るディストピアと大差ない風景である。マレーは言う、「欧州は自死を遂げつつある」。

根本的に考えれば、移民流出の国の人々の多数が、自国において自分たちの文化圏内で、幸せに暮らすように国際協調で工夫するのが「社会政策の王道」であった。本来的に人間は文化的な存在であり、基本的には自分が生まれ落ちた文化圏の中でこそ、一番能力を磨いておのれのタレント（能力）を発揮し、幸福に生きていくことができるのではないか。そのために、私たちは海外諸国の経済の拡大に向け、積極的に経済援助（ODA）などをしてきた。

ダグラス・マレーによれば、ロンドンでは 2011 年の段階で、白人の英国人が少数派になっており、2016 年に英国で生まれた子供で一番多かった男の子の名前が「モハメッド（ムハンマド）」であったと言う。

その意味で英国のEU離脱は正当であり、反グローバリズムの歴史的分岐点であったと見ることができる。

ナイジェル・ファラージ（英国独立党）は、まさに「英国のトランプ」と言われていた。反グローバリズムの波は、英国だけでなく、フランスのマリーヌ・ルペン、ドイツの政党「AfD（ドイツのための選択肢）」、ジョルジャ・メローニの「イタリアの同胞」などが飛躍的に躍進したのである。〔注3〕

（ボージャス、2017。マレー、2018、315 - 316。浜崎、2018、118 - 125。川口マーン、2018。施・黒宮・柴山・川端、2019。室伏、2019b。及川、2022、138 - 149）

現代につながる安全で文化的な、「まち（ゲマインシャフト）」の成り立ちと成熟は、歴史的事実として、欧州諸国や日本の各地において十三～十六世紀に普通に見られた。

たとえば、都市文化研究の川嶋将生たちは、十四世紀から現代にかけての、京都の「まち」の暗黙のルールと歴史的な在りようの大原則を教えている。

公家、武家、寺社勢力が入り乱れる中世の京都において、外来勢力の流入を阻むところの「自律性」の強い典型的な「町」を歴史的に形成し始めた。「そのころ、町内の家々がおカネを出し合って、夜回りなど町の警備を行うシステムができた。それが十五世紀になると、一挙に広がった」。

室町時代は、南北朝の内乱、応仁・文明の乱など、争乱及び社会の大混乱が絶え間なく続いた。そうしたなかで、外来のならず者たちから「自分の身は自分で守るという自治意識が高揚し、町が一種の裁判権を持ったり、木戸、構えなどの防御施設を持ち始めるのが、十五世紀後半から十六世紀前半にかけてであった」。

つまり、安全で文化的な生活空間を守るため、人々が結束し、やがて「町内」のまとまりができ、さらに団結・連合して「町組」ができ、「町組」が寄り集まって「上京」や「下京」などの「都市」が生まれてきたのである。

これらの「町内」の家々は、「職住一致」で、商売やモノづくりの仕事の空間と、盆栽や俳句や和歌など家でくつろぐ風流な「居住空間」が重層的に合わさった、絶妙の文化的ネットワークの「町」の全体社会を構成しながら現代に至っている。

当然に、「条例」のような、それぞれの「町」で人々が生活していくための「町」の規約、すなわち「町定め」「町式目」と呼ばれるものができあがってきた経緯である。

さらに、「まち」の公共性と同胞の一体感を際立たせたものが、祇園祭や天神祭などの神事・祭礼であった。たとえば祇園祭は、氏子町が主体になってはいたが、鋒や山を出すそれぞれの鉾町、山町を支援する特定の「寄町」が決まっていて、資金や人材を提供していた。

明治時代の初期、京都の町組がおカネを出し合い、土地を提供して小学校をつくった事例もあった。次世代への歴史教育は、クニや自治体任せにしない、という心意気である。

町衆、町人が主体となった安全な「公共空間」と「公共精神」の成立と、中世以来の、現代につながる七百年間の日本文化の伝統精神が、厳として日本の各地方の都市に生きている。

(川嶋、1976、1993。谷&増井、1994)

出入国在留管理庁によれば、2023年6月末時点で、日本には322万人の外国人が暮らしていると言う。日本の文化を理解する方々と、物質面の追求に偏らない、縄文時代以来の人間そのもの中心の、神社仏閣と共生する「コミュニティ」を一緒に発展させていきたいものである。

ところで、埼玉県川口市には、2023年秋現在でおよそ4000人位と推定される、入国して90日（ビザの期間切れ）たっても帰国しない、住民登録のない人々などが住んでおり、訪れてトラブルの各種に驚いた（川口市議会が今年6月に住民の安全への懸念を議決している）。

「日本の行政と社会は、外国人、特に日本人と共生する意志のない悪意の外国人に対応する準備がまったくできていない」。

きちんとした法治国家として、入国在留管理を精緻化し、国会議員が動いて不法滞在者を毅然と帰国させるのは行政機関の当然の責任である。一般的に、住民の安全のため、「不法滞在者や不法移民をコントロールしなければ、私たちの国家は存続できない」。最近のフランスでの移民の暴動を始め、欧州や北米の大混乱と、「コミュニティの品質」破壊を他山の石としなければならないのだ。（山岡、2023。石井、2023、76 - 85）

さらに、米国やカナダで今とくに深刻なのが、社会全体への違法薬物の蔓延である。

カナダ在住のやまたつ氏によれば、薬物の過剰摂取による死亡が後を絶たず、「米国では2021年に10万6699人が命を落とし、18歳から45歳の死因第1位になるほどです。単純計算で1日に、292人が薬物の過剰摂取で亡くなっているのです。カナダでも大きな問題になっていて、私の住むブリティッシュコロンビア州の死因の第2位が薬物の過剰摂取でした。薬物の過剰摂取が急増している背景には、フェンタニルの蔓延があります」。

現在の状況として、「フェンタニルは中国由来のものが中心であると言われています。中国から原材料がメキシコ西海岸に送られ、麻薬カルテルが製造、それがアメリカの南部国境から流入しています。トランプ政権下で、中国から直接アメリカに流入することは防げるようになりましたが、メキシコが経由地になっただけでした。不法移民と絡む問題で、2024年大統領選挙の主要な争点になることは間違いないでしょう」。

実際、2023年4月12日に、ブリティッシュコロンビア州リッチモンドで、3人の男が薬物の違法製造で逮捕されている。フェンタニル22kg（1100万人の致死量）、覚せい剤800g、コ

カイン 2 kg、末端価格 7.8 億円相当の薬物が押収されたが、この 3 人は逮捕された直後に保釈された。

カナダ在住のやまたつ氏たちによれば、北米における狂った「ソフト・オン・クライム（犯罪者に優しい）政策」のため、薬物の密造・密売・密輸がまったく止まらず、日々に治安が悪化してきており、社会生活が大混乱の大変な状況にあるとのこと。彼らはこのように述べる。

米国やカナダにおける社会の大混乱の背景には、「薬物合法化も過激ジェンダー・LGBT 活動、人種平等、ジェンダー平等などと、同じ問題があるように思えます。左翼リベラルの社会正義マンたちが、“あなたのために”を押し付けているだけで、“当事者”の話に耳を傾けていないのです」。

基本的に、保守主義の本質は、人間の理性を過信しないことであり、逆に左翼はすべてが理性によって分析することができ、合理的に社会を改革できると安易に考える傾向がある。何よりも人類誕生以来の常識に還って見るべきだ。生物学的な男女の性差は確実に存在する。

（デランティ、2006。浜崎、2018。坂東、2019。西森、2022。及川、2022b。オーウェンズ、2022。岩田温、2023。やまたつ、2023、115 - 131）

5. 世界史のチェス・ゲーム、グローバリズムの近現代史

スメドレー・D・バトラー海兵隊少将は、米国の軍事史上でもっとも因習にとらわれない、率直にありのままを語る軍人の一人だった。「33 年と 4 か月、私はわが国でいちばんの機動力を誇る軍隊である海兵隊の現役軍人として仕えてきた。少尉から少将まですべての階級を経験した。そしてその期間のほとんどを、私は大企業、ウォール街、銀行家などを守るために、体のいい用心棒として過ごしてきたのだ。言うなれば資本主義に雇われた恐喝屋であり、ギャングであった……」。そのような関係は今日でも存在する。（ロスコフ、2009、286 - 346）

19 世紀以来の、世界史の大舞台（ゲーム盤）では、国際金融資本、グローバリスト、共産主義、元祖ネオコンなどの、公共ではなく、自分たちへの「私益追求のグループ」群がうごめいていた。現在私たちが目にして、ウクライナ戦争へと至るロシアへの、「英米のネオコンによる挑発行動」と、かつて石油や生活物資を禁輸された ABCD 包囲網の仕掛けによる、第二次世界大戦勃発などとのプロセスの類似性を指摘する人々も多い。

たとえば、シカゴ大学のジョン・ミアシャイマーは、ロシアがウクライナに侵攻する 9 日前の 2 月 15 日に、ユーチューブで配信されたインタビューでこう述べている。

ソ連崩壊後に NATO の東方拡大がはじまり、これこそがウクライナの大参事の根本的な要因である。プーチンは、NATO のウクライナへの進出は自国存亡の危機だ。もうこれ以上の NATO の拡大は許されないと警告を発信していた。「それにもかかわらず、米国は東方拡大に深く関与していきました。いわば、米国は熊（ロシア＝プーチン）の目を棒でついたので」。

クリミア半島へのロシアの軍事侵攻のきっかけは、2013 年 11 月からウクライナで始まった「マイダン革命」という、親ロシア政権への反政府デモでした。「じつはこのときウクライナの

反政府派を最も強力に支援したのは、当時オバマ政権で副大統領を務めていたバイデンなのである。彼はオバマ大統領に任命されてウクライナ問題を担当し、NATO 加盟の“超タカ派”として動いてきました。(中略) 米国が 2008 年以來、ロシアに隣接するウクライナでやってきたことは、ソ連がキューバでやったことと同じではないでしょうか。

「米国は東欧よりも、東アジアの心配をすべきです。(中略) 米国はウクライナの紛争のことばかりに気を取られていると、対中国に知的リソースを割くことができず、有効な戦略を立てられなくなってしまいます」、と。

ウォール街（あるいはグローバリスト）と国家権力との密接な結合の関係が明らかになった今、従来どおりの国家間の関係だけを追いかける目線では全体像は解けない。「マネーの動き」・「石油や鉱物資源の利権の動き」・「紛争が長引くほど軍産複合体が儲かる」などの、《軍産学医メディア複合体》という、強欲で反道徳の「利益集団」群の暗躍の側面をも視野に入れた、深い分析が必要とされてきている。

実際、2023 年 7 月の国連安全保障委員会の公聴会で、現在のウクライナ戦争の背後には、ネオコンと軍産複合体との癒着（「回転ドア」方式の戦争を長引かす、国連大使も含めた政府高官たちが、退官後に軍事会社の役職や報酬をもらっている広義の「ねずみ講」の仕組みである）についての、調査報道サイト編集長のマックス・ブレメンタールの証言が出ていた。その証言場面は世界中で大きな反響を呼び、その動画の再生回数は数千万回を記録した。

とくに、米国の国内インフラが老朽化していく中で、ウクライナへ高額の軍事支援を発表・実行しているが、この援助の使い道の、肝心の監査をバイデン政権はまったくしておらず、そのおカネや武器が関係ない所にも流れているいかげんな実態を指摘した証言でもあった。

過去の約百年間の米国では、世界の金融センターであるウォール街と合衆国政府が、ほとんど一体化して動いていた。合衆国政府の意志は、ウォール街の意志を反映したものであり、両者を区別するのは困難であった。

ニクソンがドルを金で裏づける義務を外した直後に、今度は実体のないところからカネがカネを産む金融工学を利用した「デリバティブ（金融派生商品）」が市場にデビュー。米国の投資銀行はこの錬金術によって、さらに巨額の利益を手にするようになってきた。

それが 2016 年のトランプ政権の登場により、「ウォール街と、他国に干渉しない理念を持ったトランプ大統領の合衆国政府とが敵対するようになり、その結果、トランプ氏は再選をかけた 2020 年の大統領選挙で、奇妙な敗退をすることになった」。

ミアシャイマーたちが示唆するように、ウクライナ危機とは、ウクライナだけのことではなく、ドイツ危機のことでもあり、ロシアとドイツの分断こそ、世界覇権をにぎる米英の隠れた勢力の「百年の計」と見ることもできる。（堤、2021a、144 - 148。ミアシャイマー、2022、146 - 157。ベルトン、2022、95 - 105。及川、2023a）

トマ・ピケティの『21 世紀の資本』（2014）は、大局的に、庶民の立場から「国際経済の真実」、つまり世界の「財の分配」における不公平な、メカニズムの現状を説明している。

米国のトップ 400 人の超富豪は、ボトムスの 6 割の国民よりもはるかに多額の資産を所有し、

トップ 1%層の金持ちが、ボトム 93%の国民よりも大きな資産を所有している。1950 年代のアイゼンハワー政権時までの米国では、欧州由来の深い歴史意識を持った、真つ当な道德規範が存在していた。しかし、1960 年代以降の米国では、自己規律と自己抑制を重んじる道德規範を徐々に失い、利己主義的な能力主義と拝金主義を信奉する無責任な人々が増えてきた。

近年、大富豪たちは自分の名前が表に出ないやり方で、米国の政界に何千億円もの政治資金をばら撒くようになってきた。

「例えばアメリカの税法には、「501c」という制度がある。この 501c とは、慈善、福祉、人権、環境保護、少数民族保護、女性解放、社会正義の推進といった主張を掲げる NPO は、「あらゆる人とあらゆる組織から、匿名で無制限の資金提供を受けることができる。その資金を、特定の政治家に所属する Super PAC に流しても良い」という機能を規定した法規である」。副大統領や有力議員に直接電話をかけて、「〇〇という NPO を通して、あなたの管理する Super PAC に〇〇億円流しておきました。ところで例のあの件に関しては、よろしくお願ひします」と伝えれば効力を発揮できるシステムのようなのだ。

シンガポールの外交官（元国連大使）であり、シンガポール大学の国際政治学教授を務めたキショー・マブバニは、「アメリカの政治資金は、legalized bribery（合法化された賄賂）である。これは legalized corruption（合法化された腐敗）なのだ」と述べている。

外交問題評議会終身会員のチャールズ・ファーガソンもまた、「社会・経済システム」の腐敗、とりわけ金融部門の墮落を厳しく指摘している。

銀行は大量のクズ証券を組成、販売しただけでなく、金融システムを巨大なカジノへと変貌させた。2008 年のリーマン・ブラザーズなどの金融危機の際、「ゴールドマン・サックスでさえ、政府が AIG を救済してゴールドマンや他の大手銀行に対する債務を返済させていなかったら、生き延びることはできなかつただろう。（中略）「カネと刑事免責」がその答えだ。金融部門の個人の報酬体系は完全に有害なものになっていたし、どれほど非道なことをしても刑事訴追されることはない、銀行家たちは正しく予想していたのである」。

リーマン・ショック時のように、私的負債を公的債務（国、民衆）に付け替え、平然としているグローバル金融企業の役員たち、そして基軸通貨特権の存在。借りた「価値」を返さなくても罰せられない仕組みが、地球規模で形成されてきている。

（ジョンソン&クワック、2011。ファーガソン、2014、26 - 33。伊藤貫、2021、268 - 277）

米国の政権を形作っている、回転ドア式で、民間企業の役員から政府高官へと一時的に就任した絶大な権限を持つ人たちは、当然に「選挙で選ばれた」人間ではない。

彼ら権限を持つテクノクラート群は、長い間、民主、共和党の両政党の中で生きてきて、各利権のシステムを作り、多数の利権を管理・運営していく立場だ。現在もその回転ドア式のネオコンが、「アメリカ合衆国」という“ぬいぐるみの中身”の《軍産学医メディア複合体》勢力の利益を最大化すべく、政権内で絶大な力を行行使っているとみるべきだろう。

ところで、2023 年現在のバイデン政権下において、民主党首長が牛耳る米国の大都市の治安が、まさに今、加速度的に悪化している。ロスアンジェルス、サンフランシスコ、シカゴ、ニ

ニューヨークなどでは、ブラック・ライブズ・マター（BLM）暴動に連動する民主党首長たちが、BLM活動家の主張する「警察予算のカット」を忠実に実行し、警察は目の敵にされ、警官の退職率が非常に高くなった。

米国在住の多くの人々から悲鳴が聞こえてくるように、現在の米国で急上昇している犯罪の陰には、犯罪を犯しても起訴されず、たとえば950ドル（日本円で約13万円）以下の万引きであれば犯罪にもならない。即日保釈となり何回でも同じ犯罪を繰り返させているなどの、民主党首長の「悪しき司法システム改革」が影響していると言われている。

主要な大都市にあっては強盗や万引きが毎日であり、お店や日常の商いが不可能になっている。それどころか殺人やレイプが頻繁となり、もはや法治国家のおもかげもない、大変な状況が、民主党が首長の都市で拡大していると伝えられてきている。

たとえば、ミシガン州下院議員ラシーダ・タリーブは、「終身刑の禁止、3回目までは軽い刑期とする法律の改正（3ストライクス・アウトと呼ばれていた法律。それを何度も犯罪を犯しても重罪とならない法案に変える）、警官のスタンガン使用禁止、10年以内に連邦刑務所を廃止」という、極端に過激な意見を語った。

そのため米国各州の多くの市民たちは、自身の身を守るために銃を所持し、より多くの訓練を受けていることが伝えられている。実際に、日々治安が悪化しているロスアンジェルスやサンフランシスコから、共和党首長が治安を守っているテキサス州やフロリダ州へと住居を移転する世帯が増えている趨勢が顕著になってきている。

米国に長年在住の西森マリーは、大混乱の北米の社会状況をこのように指摘している。

トランプ大統領は、バイデン政権下で不法移民問題を浮き彫りにするために、わざと国境の壁を完成させずにワシントンに去った、とも言われている。バイデン政権発足とともに、テキサスでは毎日1万人の不法入国者が堂々と、国境を越えて収容施設に入っている。（収容施設を避ける麻薬密輸入などの数は記録されていない）。バイデン政権はなんと、彼ら不法入国者に衣服や携帯電話を与えた後、飛行機に乗せて米国の各地へと送っている。

「こうした現状は、フォックスとニュースマックス以外のメディアでは、まったく報道されません。しかし、2022年の夏に、テキサス州知事のグレッグ・アボットが、不法入国者をバスに乗せてマンハッタン、ワシントンDC、シカゴに送った後、それぞれの市長が文句を言って、連邦政府の援助を求めたことで、左派の偽善が明るみに出ました。その後、ニューヨーク市は、彼らを1泊500ドルのホテルに収容し、市民が激怒しています。9月14日には、ディサンティス州知事が、バイデンがフロリダに送りつけた不法入国者のうち50人を、左派の牙城であるマサチューセッツ州の島、マーサズ・ヴィンヤードに送りました」。

調査報道によれば、一般的に「国境越えを斡旋するカルテルに不法入国者が支払う額は、メキシコ人は2500ドル、中南米人は3000ドル、中国人は5000ドル、ロシアと中東からの密入国希望者は9000ドルです。斡旋金が払えない不法入国者たちは、入国後にカルテルが仕切る組織の家に監禁されて、借金返済のために奴隷や売春婦として働きます」。

肝心なことは、「バイデン政権はアメリカに入ってきた不法入国者の行方を追跡していないの

で、彼らが人体実験用に売られ、臓器提供のために殺されても、政府が気づくことはありません。低賃金で働く不法入国者は、アメリカの中間階級を潰して、アメリカを内側から崩壊させるための道具でもあります」。

(及川、2022、38 - 43。我那覇&山中、2023。伊藤貫、2023。西森、2023、156 - 158)

米国在住が長い山中泉によっても、信じられないことがバイデン政権下で起こっていることを、日本国民の参考になればと発信している。

「すでに 2021 年だけで 200 万人の不法移民が出たが、速やかに合法移民とし、彼らに投票権を与える。過去、バイデン民主党が政権を取ったら、こうした政策を行うだろうとの予測は出ていたが、まさにニューヨークを皮切りに、一気にこの動きは進んでいる」。「バイデン政権は、この国の根幹を変質させていくことで、全体主義、共産主義国家のように国民の自由を様々に縛っていきやすい社会を作り上げつつあるのだ」。

2022 年 5 月には、『2000 ミュールズ (2000 人の運び屋)』という、不正投票用紙の運び屋の実態を描いた、ドキュメンタリーが公開され、2020 年の大統領選挙の各州で、大規模な不正があったと信じる人の数が急増した。

つまり、「トゥルー・ザ・ヴォウト (票を正す) という保守系組織が、携帯電話の地理位置情報データを買って、ザッカーバーグが設置した投票箱と左派組織のオフィスを 1 日に何度も往復した運び屋の素性を突き止めました。

そして、投票箱の近くにある防犯カメラの記録と照合し、データの一部を使ってドキュメンタリー映画を製作すると共に、集めたデータを各地の警察に提供しました。そのおかげで、アリゾナ州では、不正投票用紙 (実在の有権者や死者の名前を無断借用して、あるいは老人ホームの住民の了解を得ずに代行投票者と偽ってバイデンに投票した投票用紙) を収集、投票した民主党工作員、元ユマ市長のギエルミナ・フェンテスが投票詐欺で逮捕され、有罪になりました」、などの各地での不正が報告されている。

(茂木&渡辺、2022。西森、2022、206 - 210。山中、2022、60 - 73、86)

「ペロシとアダム・シフは、バイデン大統領の息子、ハンター・バイデンのスキャンダル「ラップトップフロムヘル」(ハンター所有のハードディスクに大量の未成年少女の写真・動画や、中国・ウクライナからの賄賂を示すメールが含まれていた) が浮上した際、「完全にロシア側による偽情報だ」と言い続けていました。(中略) 結局、大陪審において、ハンターのパソコンに入っていた諸情報は本物であることが判明し、彼らの策謀は失敗に帰しています。『ニューヨーク・タイムズ』ですら「本物だった」と白旗をあげています」。

一方、「欧州全体が米民主党のようなリベラル思想に侵されています。どうして彼らはそこまで言論統制や思想統制をするのか。おそらくブレグジット (英国の EU 離脱) がショックだったのではないのでしょうか。(中略) 英国の政治学者、リチャード・タック、ハーバード大教授のように、ブレグジットを支持する左派知識人も現れています。自国の労働者のことを考えれば当然でしょう。巨大なグローバル企業に利用されているだけではないか、という声も出始めているのです」。

「共産主義者とネオコンは、ともにフランス啓蒙思想の系譜にあり、グランドデザインによって社会を作り直そうとする「設計主義的合理主義者」として、ある種、兄弟関係にあると考えています。ただし、フリードリヒ・ハイエクが指摘しているように、合理主義は一つではありません。もうひとつの合理主義、デイヴィッド・ヒュームに代表されるスコットランド啓蒙主義の系譜にある、理性の限界を自覚する「批判的合理主義」は、伝統や共同体と矛盾するどころか、(筆者注：『ワシテ文献』などの大宇宙哲理と同様に人類共同体の) その維持発展を支えるものなのです」。

日本は戦後も、スターリンが目指す世界共産主義革命の主たるターゲットの一つであった。しかも、各国の共産党と同様に、日本共産党はスターリンに隷従するコミンテルンの日本支部でもあった。

除名されるまで30年以上にわたり、日本共産党の活動家だった兵本達吉が指摘するように、今日の頼りない優柔不断の政権の状況から見て、戦前の日本政府の内務省と「むしろ特高警察の方が、日本を守り、日本国民を暴虐な専制政治から守っていたと言えなくはない」。

実際に、「そもそも共産主義勢力との『冷戦』を早い時期から開始していたのは、他ならぬ日本であった。それが開始されたのは、戦前の1925年、日本がソ連との国交樹立に伴い、治安維持法を制定してからであった」。(伊藤隆、2001。兵本、2005。坂本多、2005。福井、2020)

関岡英之の『帝国陸軍見果てぬ「防共回廊」 機密公電が明かす戦前日本のユーラシア戦略』(2010)や、小代有希子の『予定された敗戦：ソ連進攻と冷戦の到来』(2015)が示唆するように、日本政府が戦前に国民と社会を、海外勢力の共産主義(一党独裁の全体主義)の脅威からいかに守るかを、戦後の冷戦の到来以前に考えていたことが理解できる。

つまり、共産主義的思惟・フランクフルト学派などによる「コミュニティの品質」破壊に対しては、もはや従来の生ぬるい治安法規では、対処できないと考えられた。

日本大学国際関係学部の小代有希子は、このように述べている。

「これまで外務省や防衛省公文書館に埋もれていた資料を掘り起こしてていねいに読み込んで行くと、日本の指導者たちは、ソ連が日本と中立を維持していく意思がないことを早くから見抜いていたことがわかる。日ソ中立条約を結んだ松岡洋右自身が、まさにそうだった。太平洋戦争時、彼はすでに政界を引退していたが、ある日、彼が外務大臣時代に締結した日ソ中立条約が、いろいろな意味で誤りでなかったかと聞かれた。松岡は即座に質問を却下し、スターリンが日本の国益を守ってくれるなどとは、はなから期待していない。それでもあの時点で日本の大陸利権を守るためには、ソ連を中立にさせておく他に方法がなかったのだ、と述べたという」。

「陸軍大臣、支那派遣軍総司令官などを務めた畑俊六も、太平洋戦争勃発の頃、ソ連はいつか絶対に中立条約を破って日本に攻め込んでくる、これは軍内の他の最高指導者たちも同じ意見だ、と日記に書いている」。大戦中の日本人が、国際情勢の移り変わり、共産主義の脅威をよく理解して、米国とソ連の対立だけでなく、終戦前後の中国の内戦の行方をもかなり正確に予測していたことを、現代の日本人で知る人は少ない。

戦前の米国内に潜むソ連の諜報活動を、長い間黙殺してきた日本の歴史学会といえども、『ヴェノナ文書』と『ヴァシリエフ・ノート』を無視して現代史を語ることは、学問的良心があるのであれば許されない状況となってきた。

この『ヴァシリエフ・ノート』のオリジナル文書は、米議会図書館に寄贈され、米議会が設置したシンクタンク、ウィルソン・センターのホームページで、ノート自体のスキャン画像版、ロシア語原文、及び英訳が無料で公開されている。

そして今日、私たちにとって最大に危険な存在は、偽物の「人民解放の猿芝居」の、狂気の共産主義であり、強大な軍事力を背景に自らの勝手な、間違った「理想」を全世界に押し付けようとする米英のネオコン勢力なのではなかろうか。

(兵本、2005。坂本多、2005。小堀・中西、2007。小代、2015、138 - 151。佐々木、2016。福井、2020、155 - 172。福井・渡辺、2022、140 - 143、188 - 199)

ただし、2023年の米国の最新状況として、大部分の「正義（ジャスティス）を判断する権力を、彼ら（民主党系の）裁判官たちが握っているから、闘いはそう単純ではない。さらに裏側がいろいろあってね。このリーガル・ギルドが公然と存在するアメリカのカバールですからね。これを甘く見てはいけません」。 (西森&副島、2023、149 - 157、281 - 302)

一般的に、1952年の創設以来、米国を代表するNSAは、米国随一の盗聴機関であり、暗号解読の機関でもあった。「フォート・ミード陸軍基地において、ずば抜けた頭脳を持つ数千人の博士号取得者、数学者、暗号解読者が暗号を解読し、分析、冷戦時代の次の一手に役立てた」。 (ハートウング、2012、378 - 382。パーローズ、2022a)

続いて、サイバー戦争の現実と、人類社会が大崩壊の瀬戸際にある、厳しい現状にふれる。

6. サイバー戦争の実相、戦争経済の不道徳

ロシアによるウクライナ侵攻以前の、2017年6月27日の午後、あちこちのウクライナ市民は真っ黒なパソコン画面を目にした。ATMから現金を引き出せず、ガソリンスタンドで支払いができなかった。メールの送受信もできず、食料品も買えず、公共料金も支払えず、何よりも恐怖はチョルノービリ原発の計測システムが作動しなくなったことだった。

2023年4月の日本経済新聞によれば、日本において消費全体におけるキャッシュレスが100兆円分を越え、キャッシュレス比率が初めて3分の1を上回ったと言う。しかし、キャッシュレスによる経済活動の脆弱性が増し、有事の際に長期間、経済活動が止まる可能性が大きい。

ジャーナリストのニコール・パーローズによれば、2017年の7年も前から、中国サイバー軍のハッカーとその請負業者が、数千もの米国の産業システムに忍び込み、最新のステルス爆撃機的设计図からコカ・コーラの製法まで、あらゆる企業秘密が盗み取られていた。

「私（パーローズ）が《ニューヨーク・タイムズ》紙のITセキュリティチームで働いていたあいだ、私たちが「サマーインターン」と呼ぶようになる中国人ハッカーは、毎日、北京時間の午前10時にネットワークに出発して私たちの情報源を探り、決まって午後5時に退出し

た」。

米国のセキュリティ・リサーチャーが不正侵入を追跡すると、中国大陸の大学生にたどり着き、とくに膨大な国家予算がつぎ込まれている上海交通大学が多いと言う。また別のケースでは、中国の大手の「テンセント」の従業員にたどりついたと言う。

「標的にしたどの企業においても、中国のハッカーはソースコードのレポジトリを無気味なほどうまくハッキングしていた。不正侵入によって、彼らはコードをこっそり改竄できた。やがてそのコードが商品に組み込まれて市場に出回った時には、そのソフトウェアを利用した顧客に攻撃を仕掛けることができた」。

彼らは、フォーチュン 500 に名を連ねる大手企業や研究所、シンクタンクから、米国の知的財産を盗み取っていたのだ。国家情報長官を務めたマイク・マコーネルは、私（パーロース）にこう語った。

「政府や連邦議会、国防総省。航空宇宙部門、貴重な企業秘密を有する企業の重要なコンピュータを調べた結果」、中国によって「感染していないコンピュータは、ひとつとしてなかった」。そこで私たちは、サイバー戦争の世界における肌寒い一発触発の、特段に厳しい現状を把握しておかねばならない。

「スノーデンが暴露した文書のなかで特に不安を掻き立てたのは、NSA が通話記録のメタデータを収集していた件だろう。誰が、誰に、いつ、どのくらい長く電話で話したのか。そして合法的な介入プログラムとして、NSA はマイクロソフトやグーグルなどに、裏で顧客データの提出を求めている。(中略) 漏洩した機密文書は、NSA が市販のハードウェアやソフトウェアのほぼすべてに、バックドアを仕込んでいたことについて言及していた。

その膨大なライブラリは、おもなアプリケーションからソーシャルメディアのプラットフォーム、サーバー、ルーター、ファイアウォール、ウイルス対策ソフトウェア、 아이폰、アンドロイド、ブラックベリー、ラップトップ、デスクトップ、OS まで多岐にわたった。ハッキングの世界では、見えないバックドアには、SF の名前がある。「ゼロデイズ」だ。ゼロデイは「インフォセック (情報セキュリティ)」や「中間者攻撃」と同じように、セキュリティ専門家が乱造し、私たち素人には馴染みがないサイバー用語のひとつである」。

「そしてスノーデンが暴露するまで、(2007 年に世に出たアップルの) 아이폰のユーザーは幸せなことに、NSA がはめた見えない“監視用の足輪”にまったく気づく様子もなかった」。1990 年代、国防総省の軍事予算は 3 分の 2 に削られたが、サイバー分野だけは別だった。どの諜報機関の内部でも、見つけた「最善のゼロデイは最善の機密情報を捉え、それがサイバー予算の増額につながる」ことを学んでいた。

ゼロデイの発見は金儲けにもなり、昼も夜もコンピュータ画面にかじりついているハッカーは、大小のテクノロジー企業を含めて、世界中に数万人にも達すると推定されている。

「その魔法のマントをまもって姿を隠せば隠せるほど、スパイやサイバー犯罪者はますます大きな力を手に入れる。最も基本的なレベルにおいて、ゼロデイとは、修正パッチが存在しないソフトウェアやハードウェアの欠陥を指す。(中略) ゼロデイは、ハッカーの兵器庫のなか

でもとりわけ重要なツールだ。ゼロデイを発見することは、世界中のデータにアクセスする秘密のパスワードを発見するようなものだ」。

世界中の普通の人々の暮らしは、最新のデジタル技術の土俵の上に成り立っている。

IT 技術の専門家たちは、日常に使用されるデジタル機器は、ゼロデイ、セキュリティホールだらけだとも指摘する。しかもすでに、「NSA の数十万のインプラントは、世界中のネットワーク、ルーター、スイッチ、ファイアウォール、コンピュータ、電話に深く埋め込まれ」、毎日それらがテキストメッセージ、メール、会話を積極的に吸い上げ、NSA のサーバー群に送り込まれている。「それ以外の多くはスリーパーセル（潜伏工作員）であり、緊急事態が発生するか、将来に重要なサービスが停止するか、全面的なサイバー戦争が起きるまでは潜伏を続ける」。

2009 年には、「フォート・ミード陸軍基地の銅線に覆われた壁の奥で、アメリカはサイバー戦争の新たなルールを設定した。その年から、アメリカ以外の国の重要インフラに、コードを埋め込むことを容認しただけではない。国境を越えて、よその国の核開発計画を無力化することを、アメリカは完全に問題ないとしたのである」。

そして、「2012 年、オバマ大統領は諜報関係の高官に、海外の標的となる「システム、プロセス、インフラ」のリストを作成するように命じた。翌年、その機密の指令をリークしたのがスノーデンだった。（中略）NSA のさまざまなマルウェアの多くはスノーデン文書で暴露されたが、それ以外にもたくさんあり、電話の会話、テキストのスレッド、メール、産業用機械の設計図も窃取できた。感染したコンピュータのマイクをオンにして、周囲の音声を収集するマルウェアもあった。スクリーンショットを盗み見し、標的が特定のウェブサイトアクセスするのを妨害し、コンピュータを遠隔操作で終了させ、全データを破壊し、削除した。また、キーボード操作を乗っ取り、検索履歴、ブラウズ履歴、パスワード、暗号化データ解読に必要なカギも窃取できた」。

また、正当な文書に偽装した PDF ファイルをメールに添付して送付し、標的を感染させることもできた。

今日注目を集める「エクスプロイト」とは、コンピュータのソフトウェアやハードウェアの脆弱性を利用し、コンピュータに有害な動作をさせるプログラムや、そのようなプログラムによる不正アクセスなどの攻撃を指す。

「ランド研究所の調査によれば、平均的なゼロデイ・エクスプロイトは発見されるまでに約 7 年かかるのに対して、およそ 4 分の 1 のゼロデイ・エクスプロイトが 1 年半以内に発見されるという。以前の調査では、ゼロデイの平均寿命を 10 か月と割り出していた」。

グローバルなサプライチェーンに、破壊工作が仕掛けられる可能性も増大してきている。家庭電気製品や医療分野のカルテから、沖合の風力発電・石油掘削装置、送電線インフラ、役所の公共サービス、金融機関の決済システム、デジタル通貨などによる給料支払いまで、私たちの日常生活自体が大きな脆弱性を抱えているのだ。

（パーロース、2022a、21 - 49、97 - 107、191 - 247、323 - 343。松原、2023）

KDDI は 2023 年 8 月 30 日に、人工衛星を活用した通信サービスの実用化に向けて、米宇宙

企業「スペース X」との新たな業務提携を発表した。スペース X 社が開発した衛星通信サービス「スターリンク」は、高度 550 キロの低軌道上にある衛星のネットワークを利用するため、既存の衛星通信に比べ通信速度が速く、大規模な地上インフラを必要としない。

現在のウクライナ戦争の特徴のひとつは、ウクライナ側とロシア側の味方をして、参戦してきた国際ハクティビスト集団の数の多さである。「ハクティビスト」とは、DDoS 攻撃やウェブサイトの改竄などのハッキングを通じ、オンライン上で政治的・社会的主張をする人々を指す。米国のサイバーセキュリティ企業「フラッシュポイント」の集計では、2022 年 3 月 5 日時点で 50 もの、政府や軍に所属していないハクティビスト集団が、ウクライナ戦争に参加していた。国際ハッカー集団「アノニマス」なども、軍事侵攻直後に、ロシア政府機関やロシアのメディアのウェブサイトへの DDoS 攻撃を表明している。

一方、2022 年 2 月 25 日にロシア政府への支持を表明したのが、2020 年に登場以降、活発にランサムウェア攻撃を続けてきたサイバー犯罪者集団「コンティ」である。

イスラエルのサイバーセキュリティ企業「チェックポイント」が分析したところ、コンティがハイテク企業のような組織構造になっていることも判明した。このコンティと他のハッカー集団との関係についても明らかになってきた。たとえば、日本企業や大学、自治体の間でも感染被害が拡大しているコンピュータウイルス「エモテット」関連のハッカー集団とも協力しているようだとされる。

「エモテットに感染すると、今までにやりとりしたことのある相手の氏名、メールアドレスやメールの本文などの情報が盗まれてしまう。そして、あたかも今までに自分がやりとりしたことのある相手からの返信メールのように見えるなりすましメールが作られ、他の人々に送付されていく。そのため、ついなりすましメールの添付ファイルをクリックし、感染してしまう人がネズミ算的に増えていく。非常に厄介なコンピュータウイルスだ」。

(松原、2023、133 - 154)

2023 年 3 月、米国議会下院の外交委員会は、中国系動画投稿アプリ「TikTok (ティックトック)」の、米国での一般利用を禁止する法案を賛成多数で可決した。米国ユーザーの個人情報が、ティックトックを通じて中国政府に渡るのを防ぐなどの狙いであった。

2021 年 3 月に、LINE の日本人ユーザー 8600 万人の個人情報が中国側に閲覧可能な状態にあり、実際に情報が漏出していた恐れがあるとのニュース報道があった。

ところが日本政府は、業務改善命令ではなく行政指導でお茶を濁して、依然として国民と行政をつなぐ道具にする模様であり、これは日本国の終わりの始まりではないのか。

報道によれば、これら日本の情報にアクセスしていた中国企業は、①中国で AI (人工知能) サービス機能の開発をしている LINE の子会社。②不適切な投稿の監視業務を委託されている中国の会社で、1 日で約 9 万件の書き込みなどを監視していた組織体とのことであった。この監視対象業務は、人力では不可能であり、当然そこには不適切な投稿を判断し、抽出するための AI が活用されていたはずで、各アカウントの傾向を AI で効率的に分析していたのだろう。

米紙ワシントン・ポストは 2023 年 8 月 7 日、中国人民解放軍のハッカーが、日本政府の最

高レベルの防衛機密を扱うコンピューターシステムへの侵入を報じている。

2019年の三菱電機へのサイバー攻撃などのように、海外子会社の拠点で本社との接続のために使用される小型ルーターを乗っ取り、ネットワークに侵入する手口が多い。ルーターを乗っ取ることで正規の通信に見せかけるので、発覚するまでに若干の時間がかかるという。

米国では「国防権限法」に基づき、ハイクビジョン（抗洲海康威視数字技術）やダーファ（大華技術）の監視カメラの使用は禁止である。「ならば日本はと言えば、ダーファ、ハイクビジョンの監視カメラを警備会社大手のセコム、ALSOK、セントラル警備が使用しているばかりか、ファーウェイとZTEのルーターを使用しているのがソフトバンク、au、楽天、ソニーなど、殆どである」。有事に監視カメラが遠隔操作され、動きの筒抜けや稼働の停止が懸念される。

そして周知のようにLINEは、通信機能として、端末のアドレス帳に登録してある電話番号やアドレスなどを使っている。また、LINEには友達などの誕生日を通知するという機能があり、そこから「誕生日通知で人脈の構図の把握」や「よく行く場所の特定」、「生活圏・行動範囲の特定」、「仲間とのやりとりの把握」、「趣味と経済状況の把握」など、ほとんどすべての情報が他国の諜報機関に収集されている、LINEの使用という危険な状況の現在である。日本政府による国民への、「大事な情報漏れに留意せよ」との注意喚起がもっと必要ではないのか。

（坂東、2019、170 - 178。2022、36 - 40。堤、2021b。宮崎、2023、144）

ところで、フェイスブックは「実名登録」が基本であり、そのために利用者の年齢、性別、住所地、職業などの個人情報が集積され、しかも利用者がどのような投稿に「いいね！」を押したのかなどの分析で利用価値が高く、当然に、広告料も高くて増益を続けてきた。

しかし、2018年9月には、フェイスブックは、ハッカーによってセキュリティの脆弱性を突かれて、利用者情報が不正に流出する状態が1年間続き、約5000万人分のアカウントに影響があったと発表した。その3か月後の12月には、ニューヨーク・タイムズ紙が、フェイスブックは収集したデータについて、IT企業を中心として約150社にアクセスを許可していた、と報じた。

「同紙によれば、マイクロソフトやアマゾンには、フェイスブック利用者の名前や連絡先、または利用者の友人の名前を取得し、動画配信のネットフリックスや音楽配信のスポティファイもフェイスブックのデータにアクセスしていたという。フェイスブックは現時点では、多くの企業との情報共有を中止しているが、アマゾンやアップルとは現在も情報の共有を行っている」という。（岩田昭、2019、171 - 180）

「TSMCやフォックスコンは台湾企業に見えるが、じつは中国で超優遇されている実質的な中国企業である」。中国政府が進める「デジタル人民元」が、孫正義のソフトバンク・ジャパンのデジタル決済アプリ「ペイペイ」と密かにタイアップしている。中国では、二大スマホ決済の「アリ・ペイ」と「ウィチャット・ペイ」が、いずれ中国政府が開発した「デジタル人民元」に吸収され、統合されていく流れであろう。

同じように日本では、「ペイペイ」や「楽天ペイ」「ドコモd払い」「auペイ」などが、すべて「デジタル円」（CBDC、中央銀行デジタル通貨）へと一体化されていく。どんな支払いも、

取引決済も、資金のやり取りも、おカネの流れはなんでもガラス張りになる方向ではある。

ただし、将来に予測される、必ず来る緊急事態のために、現金支払い制度は必ず残し、日本全体の 2~3 割の、地方を中心にしたインフラ設備には、井戸を掘るなどわざとアナログの領域を残しておく政策が、国民の生命を守るための今後 100 年間の安全保障上の最重要事項だ。

警視庁は 2011 年から、三次元顔画面識別システムを運用し、民間の防犯カメラデータの相互運用を始めている。2021 年には、厚生労働省が健康保険証対応マイナンバーのカードリーダーのシステムとして、米国企業の AI 顔認証ソフト「SAFR (セイファー)」の導入を採択したという。2024 年までに、紙の健康保険証の原則廃止が表明されたが、その意味はマイナンバーの生体データを AI と紐づけるシステムが一人歩きし始めているということだ。

欧州委員会の「人工知能 (AI) 規制枠組み規制案」では、リアルタイムの生体認証や、マイノリティ (少数派) を脅かす AI の利用、政府による個人の信用度のスコアリングなどは「禁止」の事項である。生まれつきに持った生体の特徴、人事判断に利用されるスティグマの生体分類、及び「大量監視」の AI 利用に警鐘が鳴らされている。(カツ、2022、310 - 320)

さらに、日本の主要な新聞ではほとんど報道されないが、YouTube (2022 年 10 月 9 日、14 日で実際の動画) で見られるように、欧州各地で反 NATO のデモが起きている。米国に引きずられるように NATO は東進を続けてきた。フランス、ドイツだけではなく、スペイン、イタリア、チェコなど EU 全土に、生活費高騰に憤る抗議活動が広がっている。欧州の一般国民の、「反 NATO・反 EU の思いは、米国ネオコンに同調するブリュッセルに巣食うグローバリスト官僚には届かない」。

「EU にリアリストの眼があれば、ウクライナの尻を叩くのではなく、トルコのように、外交的解決を図るようにゼレンスキー大統領に促すべきであった。(中略) シュルツ独首相は先のバリ島での G20 の場で次のように発言した。(ロイター電：2022 年 11 月 15 日)「もう一度ははっきりと言っておきたい。世界がこの不況から脱却する最善の方策はロシアのウクライナに対する戦争を終わらせることだ」。トルコによる仲介のあった 2022 年 3 月の時点では、ロシアとウクライナの両国には、戦火を拡大させない意志があった。そして実際に、暫定的合意がなされたようであった。

「しかし、この合意は文書での合意に至らなかった。ウクライナ交渉団メンバーの一人デニス・キリーフが暗殺されていたのである。2022 年 2 月 28 日、ベラルーシで行われた交渉に参加した一週間後、ウクライナ情報部にロシアのダブルエージェントだとされ射殺された (イスラエルタイムズ：3 月 6 日付記事)。筆者 (渡辺惣樹) は、ロシアと何らかの妥協を覚悟した勢力への、ウクライナ政権内部の対口強硬派による見せしめの処刑だと疑っている」。この事件はウクライナの真の愛国者たち、すなわちリアルに大局を見据え、ウクライナ国民のこれ以上の損耗防止と復旧の人員温存のため、停戦の交渉にのぞむメンバーたちを大きく怯えさせた。

「難しい外交交渉では互いが何らかの妥協案を示す必要がある。ウクライナ交渉団は妥協案提示に消極的になった。そんなことをすればロシアのエージェントだとレッテルを貼られ殺されることを覚悟しなければならない。それでも何らかの妥協が必要だと考えるグループもいた

が、それをポリス・ジョンソン英首相が潰した。ジョンソンは、キリーフ暗殺事件のおよそ一ヶ月後の4月9日、突然にキユーを訪問した」。揺るぎない軍事支援を続けるので、そんなに早く戦争を終わらせるな（軍事産業を儲けさせろ）の意であったのだろうか？その真意はわからないままである。

7. 「コミュニティの品質」と各国の精神文化体系を守る

総合の視座をもったA・ネグリとM・ハートは、近年の世界全体に形成されてきた、グローバル化の階層的秩序体系・ネットワーク上の世界権力の領域を横断的に、生息の枠組みを浮かび上がらせ、それを《帝国》と名づけた。

その後二人は、『帝国』(2000)に次ぐ、『マルチチュード』(2004)と『コモンウェルス』(2009)で、より具体的な各種社会経済現象の軌跡と、要因相互の連関性の分析に焦点を移している。

多くの国際機関、とりわけ「WTO（国際貿易機関）は、グローバルな国際的貴族層のためのフォーラムであり、そこには国民国家間のあらゆる敵対性や矛盾、利害の衝突、権力の不均衡などを見ることができる」。

私たちが自明と思われている所有権・財産権と近代法体系の基盤は、じつは特殊な一解釈に過ぎない脆弱性を持っている。

根本的に考える法学者たちによれば、《帝国》が決めた法とは、主として多国籍グローバル企業の利益に貢献する「新自由主義グローバル化」など、ネオコンたちが企画・実行する「戦争経済」体制をも含めて、ほとんどが収奪の目的達成のために用いる手段だという。

二人は、地球を覆い尽くしつつある《帝国》的権力に抵抗する集団的な主体を「マルチチュード」と名づけ、グローバル社会の公平と、コミュニティの質の向上の可能性、及び「対抗—《帝国》」のプロジェクトを平和的に打ち立てようと試みてきた。

そして二人は、『コモンウェルス』において、「コモン」と「ウェルス」の関係性をふまえ、〈共(コモン)〉的な富(ウェルス)からなる均衡のある世界を制度化し、平和的に管理運営し、普通の民衆の立場から、私たちが生きる「コミュニティの品質」を問いかけている。(ネグリ&ハート、2005a、273 - 279。2005b、143 - 146、265 - 271。2012、119 - 126、242 - 248)

そもそも「コミュニティの品質」の本質は、素朴な社会を「未開」や「前近代」の残存として見るのではなく、人間がまっとうに互いに、全体の人々に公共レベルで仕える側面をもつものである。その点で、古代の思惟体系だけでなく、ラテンアメリカ研究のマヤ系先住民のフィールド調査の観点なども参考になる。

つまり「真正な社会」(レヴィ=ストロース)とは、顔のみえる関係でつながる小規模な社会であり、けして本質主義的に近代以前の小規模な閉じた共同体を想定しているのではないことだ。「メンバーシップ(資格)に流動性のないアイデンティファイ(帰属)ではなく、活動することにつながるビロング(所属)を基盤とするコミュニティの形成を再領土化戦術と呼びたい」。

大きく見れば私たちは、「クルソー・マヤ」であることがコミュニティ活動に参加できる条

件ではなく、参加することでクルソー・マヤ（筆者注：たとえば日本人）「になる」のである。

（蔵内、1979。デランティ、2006。初谷、2011、98 - 101）

ところで、経済学者でもあり社会学者でもあった高田保馬（1883～1972）は、全体社会の「体制」維持の過程を、「構造」と「変動」とに分ち、主に社会的な「勢力」の観点から社会変動の全体の動きを、巨視的に捉えようとした。

そしてさらに、蔵内数太は、時間の流れの側面から、社会的潮流の主体としての権勢をもつ「利益集団」などを視野に入れ、現在栄華をきわめる「現（げん）集団（役割集団 *Rollegruppe*）」、今後実力を増大して追いついてくる可能性のある、たとえば「非営利中間組織」、「個人事業主（LLP）制度」集団など、「後（こう）集団 *Nachgruppe*」の分析概念を提唱した。

勢力を持つ個々の「利益集団」（多国籍企業や超富裕オーナー集団、覇権国の諜報機関傘下の企業群、及び彼らに有利な、国際的法体系を設計する専門家集団、医療利権のうごめく WHO（世界保健機関））などがどう動いてきて、今後どのように動くのかの視点でもある。

それは、国際経済社会に構造的に埋め込まれたルール（制度的虚構も含む）の下で、覇権を持つ主要集団の、ネオコンなどの強引な「戦争経済」の働きが行き過ぎて人類の絶滅（核戦争）に至らないよう、現状を検証する学術的叡智にもつながっており、大切な客観的視座である。

ジョゼフ・スティグリッツは、ますます拡大する一方の今日の戦争経済を、批判的にとらえる経済学者の一人である。イラクとアフガニスタンにおける米国は、これまで軍人と文官が担ってきた、囚人の尋問、爆弾の処理、高官の武装警護などの任務を、今では民間の請負業者に外部発注している。

多くの軍事コンサルタント会社がからむ、このような民間依存には重大な欠陥がある。第一の欠陥は、請負業者が公務員と異なる、高額の利益というインセンティブで動く点である。第二の欠陥は、注ぎ込んだ税金分の価値が得られていない点であり、例えばイラク復興資金の大部分は、安い労働力を使える地元建設業者ではなく、高値をふっかける米国のゼネコンに流れ込んだ。第三の欠陥は、業者をうまく管理できない現実である。国防総省は、請負業者を監査するための請負業者をさらに雇っているありさまだ。また、世界的に、これらの民間軍事会社の請負の多くは、《原価計算》契約である。コストをかければ利益が増える「ねじれたインセンティブ・システム」である。

そして政府の現金主義会計では、今日の実際の支出は記録されるが、未来の障害補償費などを含む将来的なコストは無視されている。つまり、イラク戦争などの《戦争経済》の真の勝者は、コンサルタント会社などをはじめとする、多くの分野の民間の軍事関連の業者であることを示唆している。（スティグリッツ、2008、245 - 268）

ところで、2017年2月7日、極左として名高い民主党のアレキサンドリア・オカシオ＝コルテス（通称 AOC）が中心となり、101人の議員団が、米国の下院議会で決議案「グリーン・ニューディールを創設する連邦政府の義務の認識」を提出した。

しかし、多くの人々が指摘したように、この決議案の内容には、気候変動や環境に関する対策はなく、環境問題とはまったく関係のない「社会構造の改変の偏った見解」が述べられている

るものだった。

AOCの主席補佐官サイカ・チャカルバルティは、「グリーン・ニューディールの面白い点は、本来は気候に関するものではまったくなく、“どうやって経済構造全体を変えるか”というものだった」と、キコウヘンドウという方便を利用して、社会の変革という目的を達成しようとしていることを自ら認めている。

つまり、やろうとしていることの本質は、キコウヘンドウという流れに便乗して、世界の国々に社会主義・共産主義思想を浸透させる道具にしている側面がちらちらと見えてきている。

これには、約9300兆円の予算確保が必要とされていることからわかる通り、膨大なカネと各団体の利権が絡んでいる。「単純に利権に群がる、強欲の塊のような醜い連中がいることは間違いないかもしれませんが、その奥には（恐ろしい）左翼による社会変革が隠れている」と言われる。

（レビン、2020。やまかつ、2023、144 - 166。伊藤貫、2023）

ところで、「デジタルという仮想空間では、新自由主義のアメリカと共産主義の中国は結びついている、それがいまの世界なのです。「ネットで検索すれば世界のどんな情報も瞬時にアクセスできる」と多くの人が思っていますが、検索エンジンで世界の85%超のシェアを誇るグーグルが、（筆者注：中国と同じように西側世界も）都合の悪い情報を検索に引っかからないようにしていることはまだまだ知られていません」。

さらに、CBSの記者のシャリル・アトキンソンは、このように述べている。

2023年の現時点で、「ウィキペディアは多数の専門家の、総合的な知識が反映された最も正確で中立的な情報源と勘違いしている人が、一日も早く目覚めることを祈るばかりです」と。今日の世界の現実として、諜報機関に操作されているウィキペディアなどを鵜呑みにする危険性を広く世界に訴えている。

実際に、ウィキペディアの共同創設者のラリー・サンガーは、すでに客観性と信ぴょう性を失ってしまったウィキペディア崩壊を目指して、エンサイクロソフィアというオンライン情報源サイトを立ち上げた。このサイトのホームページには、こう記されている。米国内の「小さなエリート集団が、我々が何を知るべきかを定める権力を持つべきではない」、と。

深い問題意識を持って独立系の動画を検索していけば、例えば2024年の大統領選挙に出馬のK氏の、連邦議会の公聴会（2023年7月）での「ソーシャルメディア上の検閲について」の危機感あふれる発言などを知ることができる。（及川、2023b。林、2023。渡辺、2023b）

ところで、勤勉な日本人が創意工夫をかさねて積み上げた、国民全員の共通の財産である「国富」が、1990年代から2023年の現在まで、どんどんと海外へ流出し続けている現実がある。

1998年には、元日本興業銀行の吉川元忠たちが、国民の生活を守るため、強い警鐘を鳴らしていた。ずっと続く国富流出のメカニズムを、「ひと言でいえば、日本がモノ経済で稼いだお金を、アメリカが米国債（米国財務省証券）等の形で借金し、アメリカ経済はそのジャパンマネーの流入で潤っている。借金はもちろん返さなくてはならないが、アメリカ（FRB）はいくら（米国債で）借金を重ねてもドル紙幣を刷ることでしのげる。ここに基軸通貨国の最大の旨みがあります」。国民の財を大切に管理する財務省（大蔵省）の責任の立場から、「日本もプラザ

合意とひきかえに、今後は円建ての米国債ならば購入しましょうといった交渉を米国としてみる価値はあったと思います」。

アカデミーフランセーズ会員のジャック・リュエフたちは、このように厳しく指摘している。米国債を購入した国々は、米国側から見れば結果的に、民間の対外債務超過額の一部を公的債務（国家の対外債務）で肩代わりしたことを意味する。米国の銀行システムにおいて、非居住者ドル預金が、米国政府名義のドル預金（居住者預金）に振替えられるのである。借金の全部をさらにまた借金で支払っているにすぎない。いずれ「歴史上類を見ないこの横領にも似た制度の実態」があばかれることとなろうと述べている。

買わされるだけで、国民の意志で必要時に自由に売らせてもらえないという意味で、結局は、国民にとって究極の不良資産（吉川元忠）ではないか、とエコノミストたちから揶揄されながら所持する膨大な米国債は、1990年代半ばからの長期的かつ意図的なインフレ推進政策や、大幅な円高と円安の何回もの往復運動の為替差損で、資産価値はどんどん減じているようだ。

また、2023年現在で相続税の税制があるのは、世界全体の半分以下の44カ国でしかない。

世界に196カ国あるなかで、タイやマレーシアなどの東南アジアだけでなく、オーストラリアにもニュージーランドにも、中国にもインドにもロシアにも、中東の資源諸国にも、日本に在るような「相続税」はない。日本の国富が海外に流れていくカラクリの中で、国民が納めた有事のための「国民の貯え」が、財務省が買った「米国債」で塩漬けにされ続けている。

そして、『グローバル経済と法』（2000）を著した石黒一憲は、金融・保険・軍事・電力・知的財産権・電子マネー・暗号技術などに広く関係している、高度な「NTTの世界的技術」を守れとずっと訴え続けてきた。

じつはNTTが民営化された頃から、米国は日本の通信市場に、トロンの採用見送りなどの大きな圧力をかけ続けてきた。当時、「自国のマイクロソフト社を支援して、英語でしか対応できないOSを国際標準化させることで世界覇権を維持しようという国家戦略があったことは言うまでもない」。その後の1995年に、またしてもNTTの分割・再編問題を起こさせた背後にも、1994年から始まった米国の「年次改革要望書」の圧力の存在があった。

「つまり、（高度な通信技術をもつ）NTTの市場シェアを取り崩して外資に与えろ、というのがアメリカの本音だということです。私はNTTの人たちに、「政府持ち株の解放と会社法改正、とくに三角合併に気をつけろと警告」してきました。2023年8月に内閣府が急になだした、「NTT株の放出」案などは、日本の高度技術の保全と、国民経済の安全保障をまったく考えないところの売国の行為ではなからうか。

その状況下で、塩漬けの米国債の一部の売却も検討すべきとの声もある。たとえば、2011年3月の東日本大震災の際、日本はせっかく貯えてある米国債の一部を売る手段もある、と指摘してくれた勇気ある海外の経済学者もいた。

（リュエフ、1973、233 - 237。吉川、1998、42 - 54。石黒、2006、170 - 177。伊藤貫、2023）

現在「ネオコン」と呼ばれ、本来は不要な「戦争」で荒稼ぎする通常コンサルティング会社に籍をおく人々のグループは、「軍産複合体」の利権と1990年代から深くかかわってきた。

たとえば、1990年代に米国はクロアチアに続き、ボスニアにも軍事援助したが、政商リチャード・パールのコンサルタント会社は、ボスニア政府にこの軍事援助をどのように使うのかの助言をおこない、多数の米軍事企業との契約をまとめた。また、トルコからボスニアへの武器支援のルートを開き、戦後は両国政府の軍事協力をアレンジしている。

破綻した通信会社のグローバル・クロッシング社に対し、パールは自分を雇えば、同社のある事業部門を中国系企業に売却することを米政府に承認させると約束していた。中国のような潜在敵国に対するハイテク資産の売却には、対米外国投資委員会（CFIUS）の承認が必要だ。また、ローラル社の衛星情報を中国に不正に渡した嫌疑もかけられていた。中国の核ミサイルの命中精度と射程距離を向上させる行為だった。

主要な軍事企業とコンサルタント会社と高級官僚たちが、現在のウクライナ戦争と似るように、国際政治経済を縦断して結びつき、各私的集団や営利ファンド、その他の機関と連携して、複雑な「利益集団」群の「軍産複合体制」をつくってきたようだ。（ハートウング、2004、120 - 124。ブリオディ、2004。アベラ、2008。菅原、2009、61 - 75。及川、2022b）

ウィリアム・D・ハートウングによれば、現代では、軍事産業が担っているのは兵器生産だけではない。たとえば、ロッキード・マーティンは、米国のFBIのためのバイオメトリック技術の開発や、国税庁向け米国民の納税申告書類も管理している。2005年には、米国の国勢調査局との関係を、6年間5億ドルの契約に拡大した。そして、ロッキード・マーティンは米国だけでなく、英国とカナダの国勢調査でもデータ処理の仕事を請け負っている。

ハートウングたちは、国勢調査や納税に関するたくさんの個人情報や、そのような一つの民間企業・米国の軍事産業に扱われてよいのか、と問うている。

ずっと日本国に盛られ続けている「新自由主義の毒」、つまり国民の富が海外に流出し続ける実態を分析して、国民が汗を流した果実が国民自身へと行き渡る、1990年代までのもとの健康な身体（国体）を取り戻す対策が、反転へ向けての第一歩である。

たとえば「不登校児」増の問題にしても、是非はともかくとして、この広がる現象を根本的に突き詰めていけば、ある意味、人類普遍の公明正大な精神文化に反した《グローバリズムによる「人間の家畜化」》や、「弱肉強食の新自由主義」思想、及び歪んだ自虐史観「歴史教科書」に対する無意識下での、自分たちの文化的アイデンティティを守ろうとする条件反射の拒絶反応という側面が見て取れるのではないか。

西欧の精神文化においては、E・スウェーデンボルグ（1688～1772）やC・G・ユングたちが、この世の現象世界における、顕・幽がからまる不思議な諸事象を真摯に深く考究して来た。

日本におけるスウェーデンボルグの最初の紹介は、『天界と地獄』（1758）を1910年に邦訳した仏教学者の鈴木大拙であった。その後の丸山敏雄、西谷啓治、湯浅泰雄たちの深い思索ののちの2014年3月、伊勢神宮の第62回遷宮の機会に、笹川日仏財団主催の日仏シンポジウムが、皇學館大学の場で実現した。

竹本忠雄監修の『霊性と東西文明 日本とフランス 「ルーツとルーツ」対話』（2016）は、その際の両国のメンバーによる「霊性」の学際的研究の、世界最先端の問題をさぐった研究発

表の記録である。その「靈性」の力が、冷酷な物質主義の「新植民地主義（現代の新自由主義）」へ対抗の底力として、歴史的現実と密着した、人類共通の世界的なエネルギーとなっている。

カール・ポッパーは、隷属への道は、自由で合理的な議論の消失、思考の自由市場の消失、及びウソで固められた《空虚な言論空間》の日常化からはじまると言う。私たちは近年の、ソビエト連邦や東欧諸国における、密告だらけの《家畜》同様にされた、真実が人間とともに粛清される、共産主義社会の大参事の経験をけして忘れてはならないのだ。

（鈴木、1940。西谷、1961。湯浅、1980。ポッパー、2003、2014、307 - 321。西尾、2010。竹本、2016。丸山、2016。田中英、2023。渡辺、2023a。及川、2023a。伊藤貫、2023）

むすび

以上、第一章から第三章までの「普遍なるもの」を物差しとして、2023年現在の「社会・経済システム」の歪んだ諸現象を相対化して、世界に勢力を張る《帝国》の生態と、現状の移民の問題点、国民の財産の海外流出や、サイバー戦争の実相などを巨視的に考察してきた。

最も危惧すべきことは、現実の地球文明のどの国においても、ジョージ・オーウェルの『1984年』の世界が、すでに現実のものとなってきていることだ。

膨大な儲けと利権がからんだ、擬制（フィクション）プロパガンダのグローバリゼーションは、多様な地球上の国々の文化を壊しながら、世界全体をひとつの独善的な基準に当てはめようとしている。その結果、各国が制定する法体系よりも優先させる、グローバリゼーションという別名、偽装された「新・植民地主義の収奪」が国、州、地域、村を支配するようになってしまった。

それに加え、「米中対立という単純な構図の陰で、じつは当のアメリカも、共産主義化、すなわち「デジタル・ファシズム」的体制を推し進めてきているという、事実を見逃してはならない。「政経一体」「個人情報」の掌握」という視点で見ると、中国共産党とアメリカ政府は「情報という分野を入り口にデジタル・ファシズム化しつつある」点で、いまや非常によく似てきている」状況である。

そもそも外国の民間企業が提供するデジタル・サービスに、一国の行政が丸ごと乗っかってしまう低次元のありさまは、あまりにも危機感が欠けていると言わざるを得ない。セキュリティ対策が不十分なまま、一気に脆弱なデジタル化を進めることは、壮烈な《サイバー戦争》の状況下、丸腰で戦場に出ていくことであり、縄文時代から続く私たちの生命を守る、「アナログ社会」という天然に備わっている防御の高い壁を、わざわざ壊しているありさまである。

この中途半端な状況下で、マイナンバーカードとキャッシュレス化の一気呵成の推進は、デジタル・ファシズム（共産主義・グローバリズム）陣営が用意している、私たちが長年にわたって築いてきたまっとうな「コミュニティ」大破壊の「落とし穴」へ、自らはまりに行く大愚行ではないのか。

社会の安定した秩序というものは、精神文化という、目には見えないものを共有しているこ

とにより成り立っている。

原初の霊性（倫理観）あふれる「古代文献」のひとつの、『ヲシテ文献（ホツマツタエ、ミカサフミ、フトマニ他）』が5・7調でリズムカルに詠うのは、天然の、規制を受けない“精神の自由”の高みである。そこから「夜中に女性が一人で歩ける」、「落し物がきちんと見つかる」、「拾い主から届けてもらった喜び」などの、安全面や生活環境の魅力が生まれている。

最優先課題が金儲けという《軍産学医メディア複合体》が、言論空間を検閲・情報封鎖し、世界のルール作りをする腐った世界に、本当の《地球文明》の持続可能性は成立し得ない。

永遠に「霊性（倫理観）」あふれる“精神の自由”の高みを目指す、「誠実自然」の人類であり続けたいものである。

（付記：本稿は筆者の個人的研究及び見解に基づくものであり、天理大学アメリカス学会の見解ではないことを申し添える）

注1 C・C・ギリスピーの『科学思想の歴史』（1965）などを訳された島尾永康先生たちに知的探求の灯を授けて頂いた、関西学院の高等部から大学への進学では、全体社会の鳥瞰にあこがれて迷うことなく社会学部を選んだ。1969年度における大学の社会学部では、蔵内先生はすでに大学院での指導が主であった。しかし幸運にも、時間社会学の領家穰先生の基礎ゼミ（2回生対象）の番外の集まりの場に時々来られ、その都度有益なご教示を賜った。参考に、教養課程の「社会学」は塩原勉、「経済学」は丹羽春喜、専門課程での「社会集団の考察」は清水盛光、「産業社会学」は西山美瑛子、「法社会学」は及川伸（文学部）、「意味論」は片桐譲、「科学史」萩原明男（文学部）、「家族社会学」は光吉利之、「宗教社会学」は森東吾先生などの贅沢な陣容であった。1949年生まれの私たちが、古代史（銅鏡・銅鐸）や神社、川面凡児、フェノロサ、日本の行く末など蔵内数太博士に直接にふれて学んだ、最後の世代のグループだったのかもしれない。

注2 若き頃、1980年代前半にかけて朝の出勤前に、FMラジオの聴きたい音楽番組の録音をセットして仕事に出かけていた。その当時の、小泉文夫氏の解説する「世界の民族音楽」は筆者が好きな番組の一つで、それから40年経った今も、時々インドのシタールや、インドネシアのガムラン音楽など、それらの音源コレクションに癒されている。その頃、日本中のどの街を歩いても、ポピュラー音楽や、尺八、三味線、民謡、謡曲などの楽しまれている様子が、外に漏れ聞こえていて、まさに「ホモ・ルーデンス」の世界の、精神文化の花盛りのお国の感じであった。ところが2003年以降、中間層を大切にす政体とコミュニティが壊されてきている状況下、第二次産業（各種製造業）のフィールドでの経験を基に、「社会・経済システム」に関する諸論考を発信してきた経緯である。

注3 欧米などでは、出稼ぎ目的での入国を防ぐため、原則としてアルバイトを含めた留学生の労働は制限される。学校への入学の条件も厳しく、学力や語学力の高いハードルをク

リアしなければ入学は認められない。現在、日本で学ぶ留学生は、中国と韓国だけで全体の半分以上を占めている。日本はこれら海外からの留学生に超膨大な税金を注いできたが、この制度はすでに役目を終えたのではないか。複数の中国人留学生が一日の免税上限額 50 万円ぎりぎりの買い物を繰り返して、多額の利益を得ていたことが広く報じられた。また、日本国民の私たちがぎりぎりに運営している、「国民健康保険」制度を悪用し、病気持ちの中年や老人が留学生の資格で、しかも日本語が喋れないのにガン治療を受け 1500 万円ほどかかる治療費を 8 万円前後で済ませて帰る輩」たち悪徳の「ツーリズム」などが告発されている。(長尾、2022。宮崎、2023) そして、不公平だとかねてから問題になっていた、日本でアルバイトをする中国人留学生に適用されているアルバイト給与の免税措置の撤廃に向け、1983 年の日中租税協定の改定の検討が、やっとスタートした。結婚もできないくらいに低収入の、困難にある日本の若者たちの賃金を上げ、彼らにこそもっと私たちの税金を注ぐべきである。

【参考文献】

- 秋元信夫 (2005) 『石にこめた縄文人の祈り 大湯環状列石』 新泉社
- アレックス・アベラ (2008) 『ランド 世界を支配した研究所』 牧野洋訳、文藝春秋
- 池田満 (1993) 「マスとハカリ (十万の位の用語) について」 『ホツマツタエ 秀眞政傳紀』
松本善之助覆刻監修、池田満解説、新人物往来社
- (2002) 『定本ホツマツタエ 日本書紀・古事記との対比』 松本善之助監修、展望社
- (2012) 『新訂 ミカサフミ・フトマニ 校合と註釈』 展望社
- (2020) 『ホツマ辞典 改訂版 漢字以前の世界へ』 展望社
- 池田満・辻公則 (2021a) 『記紀原書 フシテ 上 増補版』 展望社
- (2021b) 『記紀原書 フシテ 下 増補版』 展望社
- 石井孝明 (2023) 「「裏口移民」クルドが埼玉で大暴れ」『Hanada 2023 年 10 月号』
- 石黒一憲 (2000) 『グローバル経済と法』 信山社出版
- (2006) 「「NTT 解体」という謀略 危険な通信システムへの介入との戦い グローバリゼーションという名の虚構」『アメリカの日本改造計画』 イースト・プレス
- 伊藤貫 (2020) 『歴史に残る外交三賢人』 中公新書クラレ
- (2021) 「超富豪に支配されるアメリカ」『WILL 2021 年 8 月号』
- (2023) 「アメリカを中心に見る世界情勢② 大手メディアでは報道されない民主党の闇」伊藤貫チャンネル 2023 年 8 月
- 伊藤隆 (2001) 『日本の内と外』 中央公論新社
- 伊藤友計 (2020) 『西洋音楽理論にみるラモアの軌跡』 音楽之友社
- 今井隆太 (2006) 「地域社会の概念をめぐって 新明正道と蔵内数太」『国際経営・文化研究 Vol.11 No.1』 国際コミュニケーション学会編
- 岩田昭男 (2019) 『キャッシュレス覇権戦争』 NHK 出版

- 岩田温 (2023) 「オピニオン： 最高裁判決の滑稽と過激 女・男は存在しない？」『産経新聞 2023年9月10日朝刊』
- 及川幸久 (2022a) 『今世界を動かしている「黒いシナリオ」 グローバリストたちとの最終戦争が始まる』徳間書店
- …… (2022b) 『そして第三次世界大戦が仕組まれた カネと資源をめぐる覇権争いの真実』ビジネス社
- …… (2023a) 「国連安全保障理事会の公聴会でのネオコンの生態の証言」7月6日
- …… (2023b) 「下院公聴会でのソーシャルメディア上の「検閲」に関する証言」「大統領候補K氏が語る」及川幸久 WISDOM CHANNEL 2023年6月17日、7月22日
- C・オーウェンズ (2022) 『ブラックアウト』我那覇真子訳、ジェイソン・モーガン監訳、方丈社
- ジョージ・オーウェル (1949=1972) 『一九八四年』新庄哲夫訳、早川書房
- 岡田真紀 (1995) 『世界を聴いた男 小泉文夫と民族音楽』平凡社
- 小代有希子 (2015) 『予定された敗戦：ソ連進攻と冷戦の到来』人文書院
- ヤーデン・カツ (2022) 「帝国と資本に仕える AI (人工知能)」他『AI と白人至上主義』庭田よう子訳、下地ローレンス吉孝解説、左右社
- 我那覇真子&山中泉 (2023) 「エマニュエル駐日大使の内政干渉に断固抗議」(パナマの山岳地帯を越境し米国へ向かう中南米や中国の人々の映像と現地報告) 5月8日、YouTube
- 川口マーン恵美 (2018) 「ドイツ人にならないドイツ移民たち」『正論 平成31年4月号』
- 川嶋将生 (1976) 『町衆のまち 京』柳原書店
- …… (1993) 「中世京都文化の周縁」『藝能史研究 122号』
- 菊池英博 (2020) 『米中密約 “日本封じ込め” の正体』ダイヤモンド社
- 吉川元忠 (1998) 「ドルに喰い潰された日本の国富 債権国・日本がマネー敗戦を迎え、債務国・アメリカが好況に沸く。このカラクリは何か？」『諸君 1998年3月号』
- …… (2003) 『マネー敗戦の政治経済学』新書館
- C・C・ギリスピー (1960=1965) 『科学思想の歴史 ガリレオからアインシュタインまで』島尾永康訳、みすず書房
- 蔵内数太 (1979) 「現象学的社会学」「法則・運命、規範・潮流 (理・法・勢・命)」 「前集団・現集団・後集団」『蔵内数太著作集 第四巻』関西学院大学生生活協同組合出版会
- ジェフリー・ケイン (2022) 『AI 監獄 ウイグル』濱野大道訳、新潮社
- 小泉文夫 (1995) 『世界を聴いた男 小泉文夫と民族音楽』平凡社
- …… (2003a) 『人はなぜ歌をうたうか フィールドワーク小泉文夫著作選集1』学習研究社
- …… (2003b) 『呼吸する民族音楽 小泉文夫著作選集2』学習研究社
- 御所野縄文博物館・編 (2019) 『環状列石ってなんだ』新泉社
- 小林由来 (2021) 「岐阜県中津川市・恵那市・八百津町・川辺町・美濃加茂市・関市まで約 48

- km・北緯 35 度 31 分 40 秒ライン上に並ぶ巨石ネットワークとは』『J-AASJ vol. 3』日本天文考古学会編
- 小堀桂一郎&中西輝政（2007）『歴史の書き換えが始まった コミンテルンと昭和史』明成社
- 古森義久（2020）「ニューヨーク・タイムズ、ワシントン・ポスト、CNN はなぜ民主党びいきなのか」『WILL 2020年11月号』
- 斎藤忠編（1975）『新訂 日本考古学図鑑』吉川弘文館
- 坂本多加雄（2001）『国家学のすすめ』ちくま新書
- ・・・（2005）『市場と国家 坂本多加雄選集Ⅱ』藤原書店
- 坂本龍一・河邑厚徳編（2002）『エンデの警鐘 地域通貨の希望と銀行の未来』NHK 出版
- 坂本龍一・中沢新一（2010）「青森県の小牧野環状列石遺跡」『縄文聖地巡礼』木楽舎
- 佐々木太郎（2016）「ヴァシリエフ文書」他『革命のインテリジェンス』勁草書房
- サイモン・ジョンソン、ジェームズ・クワック（2011）『国家対巨大銀行 金融の肥大化による新たな危機』村井章子訳、ダイヤモンド社
- E・スウェーデンボルグ（1758=1910）『天界と地獄』鈴木大拙訳、東京有楽社
- 菅原出（2009）『戦争詐欺師』講談社
- 鈴木大拙（1940）『禅と日本文化』北川桃雄訳、岩波新書
- ジョセフ・E・スティグリッツ&リンダ・ビルムズ（2008）『世界を不幸にするアメリカの戦争経済』楡井浩一訳、徳間書店
- 関岡英之（2004）『拒否できない日本 アメリカの日本改造が進んでいる』文藝春秋
- ・・・（2010）「防共回廊の源流 チベットとモンゴル」『帝国陸軍見果てぬ防共回廊 機密公電が明かす戦前日本のユーラシア戦略』祥伝社
- 施光恒・黒宮一太・柴山桂太・川端祐一郎（2019）「移民政策で日本はさらに衰退する」『表現者 クライテリオン 2019年3月号』
- 副島隆彦（2020）『金とドルは光芒を放ち決戦の場へ』祥伝社
- ・・・（2023）「貢いだ、これまで45年間の累積の米国債の残高は16兆ドル（1800兆円）」『米銀行破綻の連鎖から世界大恐慌の道筋が見えた』徳間書店
- 高田保馬（2003）『勢力論 高田保馬・社会学コレクション3』ミネルヴァ書房
- 竹村英樹（2017）「蔵内数太の生涯と教育社会学」『法学研究 90巻1号』慶應義塾大学法学研究会編
- 竹本忠雄監修（2016）『靈性と東西文明 日本とフランス 「ルーツとルーツ」対話』勉誠出版
- 田中琢・佐原真編（2011）『日本考古学事典 小型版』三省堂
- 田中英道（2016）「神道は形象で表現される」『靈性と東西文明』竹本忠雄監修、勉誠出版
- ・・・（2023）『虚構の戦後レジーム』啓文社書房
- 谷直樹&増井正哉（1994）『まち祇園祭すまい 都市祭礼の現代』思文閣出版
- 堤未果（2021a）『デジタル・ファシズム 日本の資産と主権が消える』NHK 出版新書

- (2021b) 「デジタル庁は中国の餌食になる」『Hanada 2021年10月号』
- (2023) 「日本を喰い尽くすショック・ドクトリン」『Hanada 2023年10月号』
- ジェラード・デランティ (2003=2006) 『コミュニティ グローバル化と社会理論の変容』
山之内靖・伊藤茂訳、NTT 出版
- 所功 (2012) 「伝承伊勢斎王の再検討」(景行天皇、仲哀天皇の御代から雄略天皇の御代へと一
気に飛んで空白である伊勢斎王の記録) 『神宮と日本文化』 皇學館大學編
- 内藤裕子 (2019) 「ヲシテ文献にみるアワウタの役割」『関西外国語大学 研究論集』
- 長尾たかし (2022) 『永田町中国代理人』 産経新聞出版
- 中野剛志 (2019) 『奇跡の経済教室 基礎知識編』 KK ベストセラーズ
- (2022) 『奇跡の経済教室 大論争編』 KK ベストセラーズ
- 中村大 (2013) 「縄文時代の空間認知と社会 大湯環状列石の分析」『季刊 考古学 第122
号』
- 西尾幹二 (2010) 「皇室と日本精神 (辻善之助) の現代性」『GHQ 焚書図書開封4 「国体」
論と現代』 徳間書店
- 西谷啓治 (1961) 「虚無と空」「空と時」『宗教とは何か 宗教論集1』 創文社
- 西田昌司 (2023a) 「「財務真理教」が日本を滅ぼす」『Hanada 2023年6月号』
- (2023b) 「世界の仕組み、日本経済低迷の要因」週刊西田昌司チャンネル 7月
- 西森マリー (2022) 『フェイク・ニュースメディアの真っ赤な嘘』 副島隆彦監修、秀和システ
ム
- 西森マリー&副島隆彦 (2023) 『カバール解体大作戦』 副島隆彦監修、秀和システム
- A・ネグリ&M・ハート (2005a) 『マルチチュード (上) 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』 幾島
幸子訳、水嶋一憲・市田良彦監修、NHK 出版
- (2005b) 『マルチチュード (下) 〈帝国〉時代の戦争と民主主義』 幾島幸子訳、水嶋一
憲・市田良彦監修、NHK 出版
- (2012) 『コモンウェルス (下) 〈帝国〉を超える革命論』 幾島幸子・古賀祥子訳、水
嶋一憲監修、NHK 出版
- 初谷譲次 (2011) 「近代条里空間を平滑化する人びと メキシコ・マヤ系先住民の再領土化戦
術」『アメリカス世界のなかのメキシコ』 天理大学アメリカス学会編、萌書房
- W・D・ハートウング (2004) 『ブッシュの戦争株式会社』 杉浦茂樹・池村千秋・小林由香利
訳、阪急コミュニケーションズ
- (2012) 『ロッキード・マーティン巨大軍事企業の内幕』 玉置悟訳、草思社
- 羽根田正明 (1976) 「日本の環状列石遺構の分布」『日本の環状列石』 大陸書房
- 浜崎洋介 (2018) 「日本の自死 暴走するリベラリズム (移民国家の危機)」『正論 31年4月』
- 林千勝 (2019) 『日米戦争を策謀したのは誰だ!』 ワック
- (2023) 「報道されない K 氏下院公聴会での発言」林千勝CGSチャンネル 7月23日
- ニコール・パーロース (2022a) 『サイバー戦争 終末のシナリオ (上)』 江口泰子訳、岡嶋裕

- 史監訳、早川書房
- ……(2022b) 『サイバー戦争終末のシナリオ (下)』 江口泰子訳、岡嶋裕史監訳、早川書房
- 坂東忠信 (2019) 「移民戦争への準備はできているか」他『移民戦争』 青林堂
- ……(2022) 「スパイ防止法の必要性」『スパイ』 青林堂
- トマ・ピケティ (2014) 『21世紀の資本』 山形浩生、守岡桜、森本正史訳、みすず書房
- 平井宏治 (2022) 『経済安全保障のジレンマ 米中対立で迫られる日本企業の決断』 扶桑社
- ……(2023) 《株主資本主義が日本を壊している》(企業は公けのもので、東芝の株主資本主義による無残な解体から何を学ぶかの解説) 「文化人放送局」9月22日、YouTube
- 平津豊 (2021) 「大湯環状列石の岩石配置図に関する検証」『J-AASJ vol. 3』 日本天文考古学会編
- 兵本達吉 (2005) 『日本共産党の戦後秘史』 産経新聞出版
- チャールズ・ファーガソン (2014) 『強欲の帝国 ウォール街に乗っ取られたアメリカ』 藤井清美訳、早川書房
- 福井義高 (2020) 「ヴァシリエフ・ノートの公開が意味するもの」「歴史修正主義論争の正体」『日本人が知らない最先端の「世界史」』 祥伝社
- 藤井聡 (2022a) 『プライマリーバランス亡国論 令和版 PB 規律凍結で日本復活』 育鵬社
- ……(2022b) 『グローバリズム植民地ニッポン』 ワニブックス PLUS 新書
- ……(2023) 「運転手不足への対応、安易なライドシェアの導入に反対」KBS 京都ラジオ『藤井聡のあるがままラジオ』 2023年9月18日
- 藤井聡&森井じゅん (2022) 『消費税減税ニッポン復活論』 ポプラ新書
- 藤岡秀英 (2008) 「蔵内社会学にもとづく「新しいコミュニティ論」の研究」『国民経済雑誌 第198巻第4号 平成20年10月』 神戸大学経済経営学会
- ……(2012) 「非営利中間組織など後集団の視点」『社会政策のための経済社会学』 高菅出版
- ダン・ブリオディ (2004) 『戦争で儲ける人たち ブッシュを支えるカーライルグループ』 徳川家広訳、幻冬舎
- キャサリン・ベルトン (2022) 『プーチン ロシアを乗っ取った KGB たち』 藤井清美訳、日本経済新聞出版
- ヨハン・ホイジンガ (1938=1971) 『ホモ・ルーデンス 文化のもつ遊びの要素についての定義づけの試み』 里見元一朗訳、河出書房新社
- ポール・ホーケン (2009) 『祝福を受けた不安 サステナビリティ革命の可能性』 阪本啓一訳、バジリコ
- ジョージ・ボージャス (2017) 『移民の政治経済学』 岩本正明訳、白水社
- カール・ポッパー (2003=2023) 『開かれた社会とその敵 第四巻』 フーベルト・キーゼヴェッター編 (第8版) 小河原誠訳、岩波文庫
- ……(2014) 「自己奴隷化状態へと至る共産主義の道」『K・ポッパー 社会と政治 開か

- れた社会以後』 J・シアマー&P・N・ターナー編、神野慧一郎他訳、ミネルヴァ書房
- 孫崎享&副島隆彦 (2023) 『世界が破壊される前に日本に何ができるか』 徳間書店
- 松原実穂子 (2023) 『ウクライナのサイバー戦争』 新潮新書
- 松本善之助 (1980) 「ホツマツタエはなぜ地中に隠れたか」『月刊ほつま 72号昭和 55年 1月』
..... (1993) 『「ホツマ」 古代日本人の知恵』 溪声社
- 馬淵睦夫&松田学 (2022) 『日本を危機に陥れる黒幕の正体』 宝島社
- 馬淵睦夫 (2023) 『ウクライナ戦争の欺瞞 戦後民主主義の正体』 徳間書店
- 丸山敏秋 (2016) 「日本的霊性と生活規範 丸山敏雄が唱道した「純粹倫理」をめぐる」『霊性と東西文明』 竹本忠雄監修、勉誠出版
- ダグラス・マレー (2018) 『西洋の自死 移民・アイデンティティ・イスラム』 中野剛志解説、町田敦夫訳、東洋経済新報社
- ジョン・ミアシャイマー (2022) 「この (ウクライナ) 戦争の最大の勝者は中国だ プーチンが核ボタンを押すまで終わらない」『文藝春秋 2022年 6月号』
- 宮崎正弘 (2023) 『誰も書けなかったディープ・ステートのシン・事実』 宝島社
- 六車進子 (1991) 「蔵内数太の問い」『ソシオロジ No.112 第 36 卷 2 号』 ソシオロジ編集会
- 室伏謙一 (2019a) 「改正入管法に係る政策的課題と施行に向けて政府がなすべきこと」『表現者 クライテリオン 2019年 3月号』
..... (2019b) 「日本を「外国人材」による多文化「モザイク構造」国家にしてはならない」『表現者 クライテリオン 2019年 5月号』
- 茂木誠&渡辺惣樹 (2022) 『教科書に書けないグローバリストの近現代史』 ビジネス社
- 茂木誠&原田峰虎 (2023) 「ほつまの世界、『フトマニ』のウタ (君が代の本歌か)」『茂木誠チャンネル』 2023年 8月 No.1~No.4の一連の『ヲシテ文献』の解説
- 森田成男 (2013) 『帝国の鳥瞰Ⅲ 「軍産複合体制」の広報と技術独占の視角から』『アメリカス研究 第 18 号』 天理大学アメリカス学会編
..... (2014) 「「現集団」 概念と経済人類学の射程 山田方谷の経済政策と地域通貨の可能性」『アメリカスのまなざし 再魔術化される観光』 天理大学出版部、萌書房
..... (2018) 「ニコラス・ルーマンの『社会の社会』『社会の経済』『社会の法』のまなざし」『J・R・コモンズの『制度経済学』、支払い共同体と履行共同体「債権者対債務者の関係」』『「現集団」 概念と経済人類学の射程 その 5 』『アメリカス研究 第 23 号』 天理大学アメリカス学会編
..... (2020) 「蔵内数太の「現象学的社会学」と「理・法・勢・命」、『ホツマツタエ』と古事記、日本書紀の内容を対照、1300年の封印を解く』『「後集団」 概念と汎神論 (広義の神道) の射程 その 1 』『アメリカス研究第 25 号』 天理大学アメリカス学会編
..... (2022) 「「かかん・のん・てん」「あぐり」 概念、その社会観から田口卯吉、B・アップルバウムたちの「経済学的座標軸」の共通性をさぐる」『アメリカス研究 第 27 号』

- ・・・(2023a)「ヲシテ文献研究から縄文語（日本語の起源）と欠史八代を考察する」
 - ・・・(2023b)『『ホツマツタエ』の34、38、39、40アヤ及び『フトマニ』のウタの考察』
 - ・・・(2023c)「住吉大社神代記、皇太神宮儀式帳、ヲシテ文献（フトマニ）の、相互関連性をさぐる」
 - ・・・(2023d)「ヲシテ文献（ミカサフミ）のキツヨヂノアヤ、サカノリノアヤ、ヒメミノアヤの考察」（いずれの論考も国会図書館のデジタルサーチにて閲覧が可能）
- 森永卓郎（2023）「岸田政権は財務省の傀儡となった」他『ザイム真理教』三五館シンシャ
- 矢谷慈國（2004）「蔵内数太博士の現象学的社会学 時間と全体社会について（英文）」『追手門学院大学人間学部紀要 第17号』
- ・・・(2006)「法則 Law 運命 Fate 規範 Norm 潮流 Stream」（英文）『追手門学院大学人間学部紀要 第20号』
 - ・・・(2007)「Zen Shuudan Preceding groups, Gen Shuudan Present groups, Kou Shuudan Subsequent groups」矢谷慈國訳、『追手門学院大学社会学部紀要（2）』
- A・ヤツフェ編（1973）『ユング自伝 2』河合隼雄・藤縄昭・井出淑子訳、みすず書房
- 柳原輝明（2021）「遺跡大湯環状列石の天体観測」『J-AASJ vol. 3』日本天文考古学会編
- 山岡鉄秀（2023）「川口市議会が問題視する《不法滞在者問題》」『文化人放送局』8月18日
- やまたつ（YouTube 番組「カナダ人ニュース」）（2023）『北米からの警告』徳間書店
- 山中泉（2022）「メキシコ国境開放の裏で行われている極めて残虐な犯罪」、「ニューヨークは市民権のない移民80万人に投票権を認め始めた」『アメリカの崩壊 分断の進行でこれから何が起きるのか』方丈社
- 湯浅泰雄（1980）「古代神道の基本的性格」『古代人の精神世界』ミネルヴァ書房
- ジャン＝フィリップ・ラモー（1722＝2018）『和声論』伊藤友計訳、音楽之友社
- ジャック・リュエフ（1973）『ドル体制の崩壊』長谷川公昭・村瀬満男訳、サイマル出版会
- 領家穰（1968）「社会的時間論 経験社会学的覚書2」『関西学院大学 社会学部紀要 16号』
- ・・・(1985)「蔵内社会学の基底にあるもの」『現代社会学 19号』アカデミア出版会
- マーク R・レビン（2020）『失われた報道の自由』道本美穂訳、日経 BP
- デヴィッド・ロスコフ（2009）『超・階級 グローバル・パワー・エリートの実態』河野純治訳、光文社
- 渡辺惣樹&福井義高（2022）『スペイン内戦からウクライナ戦争まで 「正義の戦争」は嘘だらけ ネオコン対プーチン』ワック
- 渡辺惣樹（2023a）『ネオコンの残党との最終戦争』ビジネス社
- ・・・(2023b)「ケネディ JR 「独立候補宣言」」『そうきチャンネル』2023年10月No.087
- 和仁佑安聡（1779）「ホツマツタエをノブ」他『生州問答』写真版、日本ヲシテ研究所